

斯の親しげに戯れて見せる正宗君の言葉も、高村君や森田君の笑聲も、にはかにファルギエールを賑かにした。三君が旅の話聞かうとして、時には勝田君も自分の部屋の方から顔を見せた。得意廻りをするやうなモデルの娘が帽子も冠らずにそこへ入つて来たのも、時に取つて興を覚えさせた。新に巴里へ着いたといふ人達を見ると、その娘も部屋を出て行かうとはしないで、通じない國の方の言葉で皆が語り合ふのに耳を傾けて居て、以前に世話に成つたといふ美術家が残して置いて行つたものなぞをそこへ取出して見せた。貧しげな娘ではあつたが、モデルとして使はれた人のことを斯様なに忘れずに居て、その人の残した小さな形見のやうなものまで女らしく大切に保存して居た。

正宗君等はなかくちつとして居なかつた。私が辭して歸らうと言へば、君等は山本君誘をひ合せて私と一緒に町へ歩きに出た。新にファルギエールの人となつた三君の中でも、船に弱い正宗君は長い航海の間殆ど寝て来たやうなものだとの話はあつたが、しかし君は疲れたらしい様子も見せないで皆と同じやうにバスツウルの附近から天文臺前まで歩いた。

「シモンヌの家」ではおかみさんから娘迄めづらしさうに三人の新しい客を迎へた。シモンヌもまた

ます可愛らしくなつて行つた。國の方の娘で言へば肩揚の似合ふ年頃ではあつたが、巴里風俗の黒を着るやうに成つてから遽に姉さんらしく見えるやうにもなつた。側の奥まつた部屋に集まつて見ると、正宗君等の旅の洋服がまだ新しかつたに引きかへ、山本君なり私なりの着て居るものは黒く煤に汚れて居た。

高村君は漸く斯様な暢氣な珈琲店に身を置いて、佛蘭西の珈琲を味はつて見るといふ風で、

「僕などはまだ、何が何だかさつぱり見當もつかない。しかし是が巴里かと思ふと、すこし變な氣もするね。」

と言つて快活に笑つた。斯うして集まつて見た美術家の中では、高村君が一番年長で、その次が山本君、森田君、正宗君の年順らしかつた。森田君と正宗君とは何方とも言へなかつたが、黙し勝ちな森田君の方はあるひは年よりふけて見え、光澤の好い頬の色と赤味勝ちな髪の毛とはあるひは年よりも正宗君を若く見せた。この正宗君に託して私のところへ煙草を贈つて呉れたといふ東京の蒲原君の噂などを聞くのも懐かしかつた。

旅するものに取つて好季節とも言ふべき五月から六月へかけての間には、正宗君等ばかりでなく、巴里に着く同胞の旅行者も多かつた。京都大學の河田君、劇の巡禮者として生田君は獨逸方面の滞在先から、考古學者の濱田君は希臘の旅から、詩人野口君は倫敦から、美術家の足立君、それから宮本君といふ年若な旅行者は國の方から直接にスエス經由で着いた。その中でも野口君、生田君はかねて私も識合の仲で、巴里で相見るとは互に思ひがけなかつた。野口君は英吉利の旅から疲れて来て、九日ばかりも私の下宿に足をとめた。七月に入つて見ると、山本君など、一緒に日本飯屋に集まつて夜明しまでの野口君も生田君も巴里には居なかつた。宮内君は羅馬舊教の寺院を、目がけて遠く國の方からやつて来たやうな人で、巴里に着いてからも僧侶や尼僧が住むと同じ屋根の下にしば

## 五十七

らく寄宿して居て、よく私の下宿へも訪ねて来てカトリックに關した話をしたし、私も君の靜な寄宿舎を叩いたことも有つた。あの若い發心者を見るやうな宮本君も白耳義の修道院の方へ出發して行つた。フアルギエールの方には正宗君等と共に足立君が残り、私の下宿には河田君が残つた。

「あなたの下宿へは種々な人が尋ねて来るやうに成りましたね。」

と山本君は言つて、戯れにシモネエの下宿を村役場に見立て、私を「巴里村」の村長に見立てたことも有つた。私は澤木君からの便りをも受取つて、いよく君が南獨逸から伊太利の方へ動かうとして居る事を知つた。新しい古典主義の聲も君の方から聞えて来た。歐羅巴の旅の初には少くもあのカンジンスキイの紹介を國の方の雜誌に寄せた澤木君が古典に心を潜めるやうに成つて行つたことは、一見識と言はねばならないと思つた。詩人ギョエテは伊太利に遊んでから深く古典の影響を受けるやうに成つたとやら。そのことを私は思出して、準備に準備を重ねて居るといふ澤木君の伊太利の旅が君の將來に多くの影響を持ち來すであらうと想像した。

私の下宿でも、大學生のアリエス君はその年にソルボンヌの哲學科を卒へて同時にズルサイユの家の

方へ歸つた。アリエス君の部屋であつたところに、しばらく野口君が泊つて、そのあとへ河田君が入つた。私が食卓を共にする顔觸は河田君と若い獨逸人のセデエル君とであつた。其頃はシモネエの姪がリモオジユの田舎の方から出て来て臺所を手傳つて居た。ある晩、國の方の人が私の夢に來た。その人は私の舊い住居が信州の小諸の馬場裏にあつた頃に隣家に住んで居た伊東さんといふ人だ。私は芝居見物の心持を辿つて居て、これから見に行く『バアシファル』の脚本を手に入れたいと思つて居ると、不思議にも伊東さんが『バアシファル』を持つて居た。伊東さんはその脚本を恐ろしく大切に居て居て、容易に貸出さうとは言つて呉れなかつた。餘儀なく私がその場で寫さうとして開けて見ると、不思議にもその『バアシファル』は戯曲の西廂記でも見るやうな漢譯に成つて居た。急いで脚本を寫して、半分ほど寫し取つたかと思ふ頃に、『バアシファル』の開場の時間が既に迫つて來たことを感じた。私は伊東さんに強請るやうにして、無理やりに祕藏の脚本を借受け、それを懐にして劇場の方へ急いだ。何時の間にか私の前に卑しけな風體をした佛蘭西人があらはれた。その佛蘭西人は劇場の掛員で、私に命令するやうな語氣で、芝居を見物する前に手を洗へと言つた。その時も私は不思議に

思つた。手を洗つて芝居を見るといふことが有らうかと思つた。おまけに私は劇場の廊下の片隅にある洗面器の方へ連れて行かれた。やがて私は第一階の見物席の扉を押して入らうとした。扉の透間からは歌劇風な明るい舞臺が見えた。『バアシファル』の幕は既に開いて居た。そこへ見物席の案内人がやつて來て、私の示した切符をしらべて見て、この見物席は第十四階にあると言つた。その時も私は不思議に思つて、十四階の上とは何かの間違ひではないかと自分に言つて見た。私は一階づつ登つた。その階梯は危く恐ろしかつた。二階目には更に恐ろしくて、他の客の一人が危く滑り落ちさうにしたのを私は助けてやつたくらるであつた。斯様な危い階梯で降りる時には奈何するだらうなど、思ひながら、三階、四階と登つた。七八階目に辿り着いたかと思ふ頃に、案内人が私を追つて來て、容易ならぬ出來事が伊東さんの家の方に起つたことを告げた。あれほど伊東さんが大切に作る脚本を無理やりに私が持出したと言つて、伊東さんの家では喧嘩が起つて居ると云ふ話だつた。見ると、案内人も二挺の鑿を手にして居た。その一挺の鑿は今にも私を傷けやうとするものゝごとく見えた。私は案内人の手から鑿を奪ひ取るやうにして心も急ぎながら更に階梯を登つた。漸く十四階目に登りきると、

早芝居は終つたと見え、見物の中には歸りかける客があつた。面白をかしく吹いて来るやうな笛の音が私の耳に聞えて来た。その笛に眼を覺まして、私は芝居見物の夢であつた事を知つた。壁一重隔つた隣室には河田君のよく眠つて居るらしい頃であり、控訴院附の辯護士といふ佛蘭西人が寢泊して居る一方の部屋でも起出す音はしなかつた。私はまた半分夢を辿る氣がして、山羊の乳を賣りに来る男が朝早く斯の町を辿ることに氣がつき、その男の吹いて来る笛の音が部屋の硝子窓に傳はつて来るのを聞いて、しばらく自分の寢臺の上で耳を澄して居た。意識がはつきりとして来れば来るほど一年とすこしばかりの旅の末には斯様な夢を見るものかと思ひ、遠く國の方にあるものと斯の異郷にあるものとが夢にまで混り合ふやうに成つたかと思つた。私が寢臺を離れて窓の方へ行つた時は、幾頭かの山羊を引連れた男の姿もそれを呼留めて新鮮な乳を買はうとする人達も見當らなかつたが、町の空で遠く牧歌的な情調を傳へるやうな笛の音だけは聞えて居た。今更のやうに私は旅行者の位置に立たせられたことを感じて、早い朝の光を浴びたボオル・ロワイヤルの町を見直した。

## 五十八

隣室の河田君は河上君と同じやうに法科の教室を受持つ人で、河上君の専攻が主として經濟の理論であるといふに引かへ河田君の學問は農政經濟の方面であると聞いた。私が初めて逢つて見た河田君は助教といふ肩書で歐羅巴の旅に来て居る時で、趣味も廣く話も多い思想家肌の學者であつた。君を私のところへ紹介してよこしたのも獨逸に滞在する河上君からであつた。

河田君の部屋は食堂と私の部屋の間にあつた。其處は以前泊つて居た人達が思ひ／＼の話を残して置いて行つた場所でもある。窓一つあるその部屋へ行つて見ると、ゴブラン風な厚い織物の長い窓掛も、窓に寄せて置いてある机も、大寺、澤木、野口、それからアリエスの諸君が臥たり起きたりした頃のことを想ひ起させるに十分であつた。高いプラタマの並木の枝が私の部屋で見る

よりも近くその窓際に延びて来て居て、濃い葉の縁が何時の間にか七月の来たことを語つて居た。河上君等が泊つて居た旅館もその窓から見えた。青々とした葉裏の明るく透けて見える枝と枝の間を通して、向ふに古い旅館の窓々が望まれた。

「河上君も、よくそれでも彼様なホテルに辛抱したと思ひますよ。ほんとに河上君には御氣の毒のやうでした。懐郷病のお話などもよく出ましたつけ。お前が西洋へ行つたら、きつと懐郷病に罹る」と言はれて来たなんて、そんな話もありましたつけ。」

「そりや、あなた、西洋へ来て居るもので、多少なりとも神経衰弱に罹つて居ないものは有りませんよ。」

「文部省留學生の無用論といふお話も出ました。」

「まあ私共はこつちへ来て少し休ませて貰ふんですね。長い學問の旅ですもの、少しは息を吐かせて貰ふんですね。」

「新しい智識を求めらるなら、京都に居た方が餘程好い」なんて、そんなお話しも出ましたつけ。私な

ぞが國に居る時分は可成西洋のことを知つて居る積りでした。こつちへ来てから反つて西洋のことが言へなくなりました。」

「何と言つても一度は歐羅巴を見て置く必要は有りますよ。河上君だつて京都にばかり引込んで居た方が好いとは言ひますまい。時事に慨するから彼様いふ議論も出るんでせう。そりや、あなた、今日の日本にあるものは、みんな歐羅巴から歸つて行つた者が造り上げたやうなものですからね。」

河田君と私が斯様な話をして互に旅の心を比べ合つて見るのも、その部屋であつた。何かにつけて私達の間には河上君の噂が出た。朝に晩に顔を見て湯に行くにも公園を散歩するにも互に誘ひ合はせては出掛ける河田君のやうな好い話合手を得たことは嬉しかつた。河田君は獨逸の方で見たり聞いたりしたさまざまな旅行者の話をも持つて来た。私は河田君の口から驚くべく激しい懐郷病に墮ちたのを、胞の話をも聞いた。ある人は高い窓から飛んで死んだといふ。ある人は極度の神経衰弱に墮ちたのを、在留者仲間が憐んで、酒と女のあるやうな場處へ誘つて行つたことが有つた。突然その人は獨逸の女を見て泣き出したといふ。斯様な話ばかりでなく、河田君は國の方の政治家などが歐羅巴を見に来た

時の色々な細目に通じて居て、こつちを旅して歸つてから帝國主義を唱へる様に成つた平民主義者、親しく歐羅巴の文物に接してから頓に意氣の沮喪を感じるやうになつて晩年には全く振はなかつたといふ明治初年の名高い政治家の話などを旅の徒然に語り出した。河田君は繪畫にも趣味を持つて居て、巴里へ來てからも自分で旅のスケッチぐらいは描いた。君はその方面でもつと専門家の意見を聞いて見たいと言ふので、私は君に正宗君を紹介した。そんな釋で、正宗君はフアルギエールの方から私達二人をよく見に来るやうにも成つた。

## 五十九

ズトイユの田舎の方へ寫生旅行に行つた山本君からは二度も三度も繪葉書の便りがあつた。山本君は森田君等と一緒に掛けて行つて、次のやうな旅情を繪葉書の裏に書いて送つてよこした。

「想ひは、

馬による蠅のやうに。

想ひは、

空に消え入る麥の穂面のやうに。

想ひは、

百姓のながい／＼欠伸のやうに。

さて私の馬車はなほ明るい野を行く——」

これは田舎の印象か。村の宿屋からでも書いてよこした即興か。どうも私には左様軽く言ひ捨てたばかりの文句とは思はれなかつた。山本君には斯うした一面もあつて、熱い草から發散する息のやうに、みづから慰めて居るものが有るらしかつた。旅の難さ、遺瀨なさ、それに底の知れないやうな暢氣さ。山本君は其心の内部の景色をひろげて見せて呉れた。私達旅行者のすべてには又、斯うした文句に耳を傾けて居たいやうな、暢氣な所のあるのも争はれなかつた。

京都大學の神戸君は、河田君よりも後に巴里へ来て、私達の食卓の仲間入りをした。君は河上君や河田君の先輩にあたるといふ人で文部省からの留學でなしに、カンが記念の寄附金によつて歐羅巴諸國を旅して居た。河上君の居た旅館の同じ部屋が斯の教授の部屋で、河上君等が通つて來たと同じやうに神戸君もシモネエの食堂へ顔を見せた。七月も半ばに成る頃には、若い獨逸人のセデエル君も斯の下宿を引揚げて遽に國の方へ歸つて行つた。食卓での顔觸は、御相伴に席に就くシモネエを除いては、私達日本人三人だけ残つた。

ある日、河田君は私に、

『神戸さんが今日は奢ると言ひますが、何處でもあなたの行つて見たいと思ふところへ案内して下さい。』

斯う言ふので、私はまだ自分で訪ねる折のなかつたヴンサンヌの森のことを思ひ出した。序にベエル・ラセエズの墓地を訪ねたらばと言ひ出した。シモネエは私達が食卓で相談するのを聞いて居て、

『あなた方がお話しなさるのを傍で聞いて居るのは餘程面白い御座んす。ほんとに、日本語といふも

のは優しくて、鳥の囀るのを聞いて居るやうな氣がしますよ。』

と言つて笑つた。リモオヂユの田舎から來て居る主婦の姪は、アリエス君等が食卓に就いた頃の田舎娘と違ひ、何時の間にか巴里の風俗を學んでめつきり都會の女らしく成つた。この人はマアガレットと言つて、佛蘭西の田舎出の若い婦人らしく叔母のシモネエを助けてよく働いて居た。

やがて私達三人は連立つて出掛けた。産科病院前からヴンサンヌの森まで辻自動車を飛ばした。ヴンサンヌは巴里の要塞の外にある大きな遊園で、ブウロオニユの森と同じやうに昔の巴里の郊外の地勢をよく語つて居た。私達が元來た要塞の内へ引返してベエル・ラセエズの墓地へと向はうとする迄には、七月の日の光の泄れた森の樹木の中を可成乗り廻したやうな氣がした。貧しい町々を通過して、自動車は墓地の前に着いた。彫刻家バルトロメエの大作といふ『死者の門』は先づその設計と意匠とで私達の眼をひいた。十五六人ばかりの群像を配置した大理石の門が突當りの岡の下を飾つて居て、佛蘭西に名のある歴史的な人達の墓が岡の傾斜の右にも左にも並んで居た。その坂路に添ふて墓地を登るうちに、私達はある墓石の前に行つて立つた。

巴里で客死したといふ英吉利の詩人の墓石には、彼を敬慕する英吉利の一婦人がその墓を立てるといふ意味の言葉が刻んであつた。その墓のあるあたりから古めかしい禮拜堂の前へ出ると、遠く展けた巴里の市街を岡の上から望むことが出来た。

「佛蘭西風の墓地には色氣が漂つて居る。」とは河上君が残して置いて行つた言葉だ。死者を愛惜する佛蘭西人の情は人體の象を取つた石の彫刻となつて顯れて居るのも多い。先祖代々の墓ともいふべき小さな石造の祠のやうなものを多く見かける。其中には寫眞や花などが飾つてあつて自分等の國の方の佛壇を見ると殆んど變りが無いやうな氣もする。墓地は廣かつた。岡の地勢に添ふた樹木の多い區域が私達の行く先に展けた。猶深く分け入るうちに、私達は古めかしく物錆た一字の堂の前へ出た。男と女の二人の寢像がその堂のうちに靜かに置いてあつた。アベリアルとエロイズの墓だ。「戀ゆるゑにそんな悲衰と苦惱とを得た。」と佛蘭西の古い詩人フランソア・ギロンが歌つたのもあの二人だ。男は中世紀の哲學者であり神學者でありソルボンヌの先生であつたと言はれるし、女は學問のある尼さ

んであつたと言はれる。堂の横手には、斯の人達は終生變る事なき精神的な愛情をかはしたといふことなどが立派に書き掲げてあつた。訪ねる人も數多あると見え、古く黒ずんだ堂を圍繞く鐵柵の所には男や女の名まへが數知れず書きつけてあつた。柵の中には何の花とも知らない草花がいちらしくあはれけに咲き亂れて居た。

「彼様堂々と枕を並べた比翼塚といふものも、たんとは有りますまいね。」

と私は墓地を離れかけた時に、神戸君や河田君にそれを言つて見た。

「流石に、アムウルの國だ。」

と河田君も歩きながら笑つた。



七月も末になつて私は河田君等と共にアウストリヤ對セルビア開戦の布告を読んだ。

其翌夕、丁度山本君がファルギエールの畫室の方から私の下宿へ見えたので何となく町々のおだやかならぬ様子に心を引かれながら、連立つて巴里の大通りとも言ふべきグラン・ブウルヴァルの方へ出掛けて見た。その夜の辻々を警める巡查の物物しさと群衆の激昂とはカイヨオ夫人が解放當日のためと分つた。私達はあの政治的婦人が夫に助けられて出たといふ裁判所の暗い鐵門を辻馬車の上から見て通つた。一日は一日より町町の相の變りかけて行つたのは、それから間もなくであつた。不思議な底氣味の悪い沈黙は私の周囲を支配し始めた。私は食堂へ行つて神戸君や河田君と一緒に食卓に着く度に、互に不思議な顔を合せるやうに成つた。

四日ばかりかうした日が續いた。私は自分の部屋の窓へ行つて見る度に、驟雨のまさにこやうとする前のやうなシーンとした靜かさを感じた。アウストリア對セルビア宣戦の日から數へて七日目あたりには、日頃往來の人の多い並木の下に出歩くものすら少く、何となく町々も寂しかった。來るべき大きな出來事の破裂を暗示するやうな斯の不安な空氣の中で、カイヨオ夫人の噂などは何處へか没し去

られたやうに成つてしまつた。

私は食堂へも行つて見た。おそろしく儉約に暮して居るシモネエは燈火を點け惜しんで、薄暗い食堂の隅にしょんほり立つて居た。

『御覽なさい、あれは何かの前兆です。』

とシモネエは食堂の窓の側に立つて、黄昏時の空氣のために紫色に染つた産科病院の建築物を私に指して見せた。シモネエが煙のママガレットも臺所の方から來て一緒にその窓から血の色のやうな夕映を眺めた。

『戦争は避けられないかも知れませんが。』

とシモネエは私の前に兩手をひろげて見せた。

『御覽の通り、私共の國では誰一人として斯様なことに成らうと思つて居たものはありません。これでいよく戦争が始まらうものなら、それこそ全く不意打といふものです。あゝあゝ——憐れな佛蘭西——』

と復シモネエは言つて佛蘭西の婦人らしく肩を揺つた。一日一日と近づいて來た斯の低氣壓に加へて、一層私達の心を不安にしたのは各銀行の取付の噂であつた。昔佛戦争で苦い經驗を嘗めた巴里市民は争つて食料品を貯へやうとするとの噂すら傳はつた。

八月の一日に私は河田君と連立つて白耳義の方へ行く人を北の停車場まで送るつもりで下宿を出た。序に東の停車場へも立寄つて見ると、巴里を立退かうとする獨逸人若くは埃地利人が早そこに群れ集まつて居た。停車場の敷石の上へぢかに足を投出して汽車を待つ旅裝束の人達をも見かけた。中には私達のすぐ眼前で突然卒倒しかけた労働者風な男にも遭遇つた。その混雜を避けて北の停車場の方へ行つて見ると、そこにはまた荷物をかゝへた旅客、別離を惜む人々、泣き腫らした婦人の顔までが時局の急を告ぐるかのやうに見えた。その停車場内の掲示板の前に立つて、私達は佛獨國境の文通が既に斷絶したことを知つた。私は河田君と顔を見合せて、旅行者としての自分等が容易ならぬ場合に際會したことを思つた。

私達は急いで下宿へ歸つた。河田君も私も部屋に入つて國の方へ宛てた手紙を書いた。夕方に屋外へ

出て見ると、動員令が發表されて居た。それまで鳴を沈めて息を殺して居たやうな町の人達はいつれも屋外へ飛出して、三色旗を印刷した動員令、大統領の諭告、貨物輸出の禁令などを讀むために、天文臺前の廣場の附近に溢れるやうに集つて來て居た。何となく殺氣を帯びて來た町の空氣の中には忙しい人の歩調が私の胸を打つた。立つて夕刊を讀むものがあつた。號外を買ふものがあつた。多勢の婦女までが息をはずませながら其間を往つたり來たりした。僅か一週ばかりの間に、私は早こんな悲壯な動亂の渦の中に立つた。夜の十一時近くには雨が降り出して私の部屋の窓から外に見えるブラタアヌの葉も暗かつた。

巴里在留の外國人で立退きたいと思ふものは早く去れ、獨逸もしくは埃地利以外の國籍を有するもの

は在留を許すとのことであつたが、その時は既に戒嚴令が布かれ、動員の始まつた最中であつた。平和な巴里の舞臺は恐ろしい勢ひをもつて一轉した。私達は各自のことも心に掛り、神戸、河田二君と共に大使館を訪ねるつもりで先づ巴里の大通りの方面へ向つた。めづらしい暑さの年であつた。街路樹——殊にマロニエの葉の多くは七月の末に早枯れ死ぬほどの暑さであつた。思へばその暑さの中で戦争の序幕が開いたのであつた。私達は町々の並木の赤い枯葉を望みながら出掛けた。何となく殺氣を帯びた大通りを伊太利街からマデラインの古い寺院の前まで歩いた。戦勝を祈願するための大彌撒などがそこで行はれて居る時であつた。私達は三人揃つて歩くといふ丈けでもある心強さを感じたくらるで、更に凱旋門近くまで出た頃に、廣い街路を横切る佛蘭西龍騎兵の一隊に逢つた。町々の男や女は集まつて、『ブラボオ、ブラボオ』と狂氣のごとく叫ぶ聲を揚げながら、その壯丁の一行を見送つた。血を見ずには止まないやうな凄愴とした空氣がそこにもここにも溢れて居た。巴里在留の同胞一同のために取あへず臨時の團結を作らうといふ下相談が大使館であつたのも、その日のことだつた。私達は互に身を護ることを考へねば成らなかつた。

早獨逸軍の斥候が東佛蘭西の境を侵したといふ報知すら傳はつて居た。大使館に日本人一同が參集するといふ日には、私達は復讐ひ合せて下宿を出た。平素は何處のエトランゼエかと言つた顔付の男や女までが親しみを持つて自分等を迎へるやうに成つた。私はそれを通りすがりの婦人の眼でも讀み、呼びかける男の聲でも讀むやうになつた。どうかすると私達の側へ來て握手を求め佛蘭西人すらあつた。

『戦争が始まりかけたからと言つて、斯う急に日本人がもてるかと思ふと心細い。』

斯う私達は話し合ひながら、限なく敷きつめてある石造の街路を踏んで、まるで燒石の河原を踏む思ひをして、高層な建築物に反射する日の熱の中を出掛けた。乗合自動車は既に微發され、町には電車も稀になつた。地下電車さへ乗れるか乗れないか分らなかつた。荷馬車に乗つて通る婦人を見かけるほど、町の光景も變つて來た。

『何といふ暑さでせう。』

私は夫を言ひくく歩いて行つた。

大使館には羅匈區方面の諸君ばかりでなく、四五十人ばかりの同胞の在留者が集まつて互に身の上を氣遣ひ合つた。平素は顔を見たこともなく口を利いたことも無いやうな人達までが、其時は同じ胸の鼓動を覺えて、取りあへず臨時の團結を作ること、委員會を設けること、組を分けることなど互に心配し合つた。その日は私は高村、山本、正宗等の諸君の無事な顔を見て、日の暮れる頃に大使館を出た。一日一日と變つて來た町の相は物凄く身に迫るのを覺えた。稀に通る満員の電車も異様な光を投じて復宵暗に隠れて行つた。往來の人すらも稀であつた。私は神戸、河田の二君とアルマの橋の畔まで歩いて、そこで漸く一臺の空いた電車を見つけることが出來たくらるであつた。

召集された佛蘭西人の話をよく聞くやうに成つた。河田君が佛蘭西語の教師も出掛けた。シモネエの親戚にあたる人達も出征したとかとで、下宿へ戻つて見るとシモネエは姪のマアガレットを相手に食堂で悄然と私達を待受けて居た。

「争はれないものぢや有りませんか。」とシモネエは私に言つた。

「吾家に泊つて居た獨逸人がちやんと戦争を知つて居ましたぞ。親の許から手紙が來ると大急ぎで巴

里を立つて行きましたぞ。今思ふと、確かにあのセデエルは獨探ですよ。」

私は疑心に驅られた主婦の顔を見まもつたぎり、黙つて立つて居た。

「ホラ、この町を毎日のやうにうろつた變な婦人が御座いましたらう。皆さんで「カロロイン夫人」だなんて紳名をつけた婦人が御座いましたらう。どうも彼の婦人の様子がをかしい〜と思ひました。あれは偽の白痴ですよ。偽の婦人ですよ。白粉なんかをいやに塗けてると思ひましたが、今になつて考へると、あれは男の顔ですよ。それに彼の白い手袋の大きかつたことを御覽なさい。あれが婦人の手でせうか。」

シモネエは町を徘徊した白痴の婦人までも獨探にしてしまつた。私はマアガレットが顔を泣き腫して居るのにも氣がついた。彼女の兄も出征の途に上るであらうとシモネエは私に語り聞かせた。

ゾラの「ナ、」の終には普佛戦争のまさに始まらうとする當時の巴里を背景にして「伯林へ、伯林へ」と叫びつゝ、街路を急ぐ人々の光景が描かれてあつたと記憶する。私も遠い旅に來てその同じ光景を客舎の窓から目撃しやうとは思ひがけなかつた。獨逸人の商店は破壊され、巴里の城門も既に堅く閉ざ

れ、旅行は不可能となり、外國の爲替は一切支拂を禁止された。私達は早事實に於いて籠城する身にも等しい境涯にあることを感じた。西伯利線の斷絶と共に、故國からの音信も絶えた。

## 六十二

神戸、河田の二君も私も警察署へ呼ばれた。私達ばかりではない、巴里在留のエトランゼエは皆警察署へ出頭せよとの事で、私達へは大使館からも沙汰があつた。巴里の羅匈區とは第五區の別名で、僅か電車路一つ隔てた丈でも神戸君の旅館は第十三區の方にあつた。神戸君が別れてその方の分署へ出掛ける間に、河田君と私とは第五區の分署へ向つた。町々は動員の混雜の最中であり、獨逸の軍事探偵は毎日のやうに捕縛され、人々は血眼になつて熱い日の中を歩き廻る時であつた。巴里には無数の外國人が入込んで居て、其うち獨逸人の寄留者ばかりでも五萬人からあつたとは驚かれる。私達が分署へ

行つて見ると、毎日々々數百人の外國人が詰掛け／＼して、横町の片側に密集した列を作つて居た。波蘭人、露西亞人、伊太利人、亞米利加人、其他種々な國籍を持つた男や女が、學生も勞働者もいやしけの風俗の淫賣婦まで、一緒に／＼と分署の壁に添ふて並びながら、『ア、ラ、カアル——ア、ラ、カアル』と呼ぶ聲を聞いたばかりでも逆上せるやうな氣がした。一つの窓から一つの窓まで動くのに二時間も要つた。私達は四時間半も立往生して、漸く二つ目の窓へしか動く事が出来なかつた。後から／＼押して来る人達の中には恐ろしく高い背と臂の力を利用して皆の間へ割込まうとする女すらあつた。私は背は低い方だし、河田君とても餘り高い方では無い。どうかすると私の立つところから河田君が見えなくなることも有つた。私達は自分等の正當に占めた地歩を失ふまいとするより外の考へもなかつた程だ。到頭河田君も私も男女の列から拔出して、非常に疲れては下宿の方へ歸つて行つたが、そんな無駄にした日が二日も續いた。

英吉利が獨逸に對して宣戰を布告した翌日、復私達は分署側へ出掛けた。其日は朝の珈琲も飲まずに下宿を出た。九時から漸く開く分署の側へ三時間も前に行つて見ると、そこには早五六十人ではきか

ない程のエトランゼエが詰掛けて居た。私は河田君に番をして居て貰つて分署の近くに朝飯の代りに成るものを探しに行つた。ある店で食麴とバナナを求めて引返すと、私達の背後に来て順に立つ男や女もあつた。河田君と私とは慣れない朝飯を分署の壁の側で立ちながらやつた。

土の息も通はぬ石造の狭い道路が私の眼にあつた。一步出れば立派な並木や銅像などの到る處に見られる街路と裏合せに陰氣な町々のあることは、餘計に貧しい感じを起させた。こんなところへ来て立つて見ると、人は大都會に在る暗黒を思ひ、そこで餓える悲惨を思はずには居られない。こんな狭い横町のやうなところでも車道と歩道との區別があつて隈なく石で敷きつめてある。道路の修繕も行届かない場所かして凸凹した石の面が古く磨滅して居た。歩道は大抵一段高く町の兩側に造りつけてあるが、その邊は僅の人が並んで歩かれる程の狭さだ。丁度私達が列を作つた向側の石の上へ、何處の裏長屋から匂出して来たかと思はれるやうな婦人が腰を卸して、平氣で私達の方を眺めて居た。その邊には又、顔も衣服も汚れた子供が集まつて、石の上へ手をつき、戸の閉まつた空屋の方へ向けて蟻錘立の稽古をして居た。そろ／＼朝の掃除の始まる頃には向側の高い窓から絨氈の塵埃も落ちて來た。

胸の悪くなるやうなことばかり眼につく、分署の横手のところで、私は立ち續けた。背後の方を見ると、壁に添ふて並んだ人達が早分署の裏口まで續いて居た。二歩か三歩づ、先の方へ進むのを樂みにして、まるで私達は器械のやうに動いた。どうかすると背後の方から皆が押して來る度に、見張の巡查に追はれて、折角占めた場所を復多勢で後戻りしたりした。やがて私達は五時間も立續けた。脚は棒のやうに成つて來た。

『河田君、なんだか私はボンヤリして了ひました。頭腦が痛くなつて來ました。』

『意志が働かないから是ぢやまるで獸も同じです。西洋人でも穢汚い襟を着けてる奴も居ますね、帽子は破れてるし——下等な奴等が多くて氣持が悪い。』

『どうも押して仕様がな——この石の壁の方へ御寄りなさい、餘程樂ですぜ——』  
前の二日の苦しい經驗から私は分署の建物に接した場所を取つて、べたりと石の壁に寄り添ふことを覺えた。河田君は後から押して仕様が無いから押返して遣ると言つて腕を張つて居たが、そのうちに私の隣が少し空いたから早速そこへ河田君を招いて、二人でいくらか樂な場處に居た。私達は石の壁

を背にして並ぶことの出来るやうな位置に立つた。

「漸く三つ目の窓へ来ました。三日掛つて漸くこの窓のところまで漕付けました。」

と私は河田君に言つた。三日も通ふうちには大分知らない顔をも覺えた。エトランゼエはエトランゼエを見て、互に異なつた國籍や、職業や、それから境遇などを想像し、それをせめてもの心遣りとした。熱い、つれない日光は分署の窓框の上にも、私達の肩にもあつた。でも何となく秋の氣は通ひ、八月のさかりと言つても日本の立秋の日あたりを見る思ひをさせた。時には私は町の高い建物の間から遠い空のかなたに信濃の山の上で、も望むやうな雲を見つけ、その雲の高さを想像したり、雲形を考へたりして、それを一つの心遣りとしたことも有つた。

漸く三日掛りで私達は分署の石段を踏み、導かれて佛蘭西人の書記の前に立つことが出来た。尋ねられることは簡単なものであつた。出生の年月、土地、職業、それに巴里に留るか奈何か位のことであつた。書記は事務所風の机の上に私達の旅行券をひろげながら、ぢろ／＼と私達の方を眺めて、二人の簡単な人相書をも戦時の滞在許可證の中に書きこんで呉れた。Skawada 髪黒、日本人型、顎の骨尖れ

り。H. Shimazaki 身の丈低し。鼻に癖あり。

## 六十三

壯丁といふ壯丁は續々巴里を出發しつゝあつた。毎日のやうに私は其光景を下宿の食堂の窓からも、自分の部屋の窓からも望んだ。時には銃の筒先に小さな三色旗をかざした歩兵の長い列が電車路の並木の側に續いた。これは私の下宿の前がモン・バルナツスの停車場への通路に當つて居たからであらう。出征する兵士を見送るために停車場まで共に歩まうとする婦女も多かつた。十八歳から四十七歳迄の男兒は皆この戦争に参加することであつた。あらゆる家庭でこの急激な渦の中に卷込まれて行かないところはなかつた。この町の界限に並ぶ店の中で、三軒に一軒、五軒に一軒は閉まつて居るのを見て、亭主も奉公人も共に町を去つたことが相傳される。近所にある賣藥店の亭主も店を閉め

て出發した。私がよく煙草を買ひに行く所の町角の煙草屋の亭主も出發の仕度をして居た。例の「シモンヌの家」へ寄つて見ると、そこでも亭主が病氣揚句のシモンヌや細君を置いて近いうちに出發すると聞いた。

『コム、レ、ゾートル。』

四十幾歳にならうかと思える頭の禿けた亭主は左様言つて、私に兩手をひろげて見せた。そこでもここでも生還の期しがたく再會の期しがたい別離の抱擁や握手や接吻が交されて居た。一日は一日より動員の結果が眼についた。一切の人は國境の方へ向けて引去りつゝある大きな潮流の中にあつた。

獨逸方面の消息は最早全く絶えて了つた。伯林にある河上君、竹田君、生田君、ミュウニツヒにある澤木君、郡君などは奈何して居ることかと氣掛りで成らなかつた。大使館で聞く臨時の委員會へは私も委員の一人として出席したので、自分が受持の組の人達のことにも心に掛り、厳しく護衛されて居るモン・バルナツスの停車場の側を通つてファルギーエルを訪ねて見た。果してあの別荘跡には美術家仲間が集まつて、各自の身にふりかゝつた災難や旅の前途を案じて居た。遙々スエズを越て來て巴里

へ着いたばかりに斯の戦亂に際會したと嘆く人、警察署の混雜にカフス釦まで失つて殆ど一日食はず飲まずであつたと言ふ人、いづれも話は故郷の方の噂や、開戦の噂で持切つて居た。山本君は信州の方にある年老つた兩親のこと、正宗君は岡山に置いて來たといふ妻子のことを案じ顔に、この戦争の始まつたことが奈様に故郷の方の人々をも驚かしたであらうと噂して居た。理學士の福見君も見えて、日頃君が懇意にするレギイ教授の子息を停車場まで見送りに行つた話をした。あのソルボンヌの大學を卒へた有望な青年は私も教授の家で識合の間であるが、親しい家族や友人に見送られて停車場から出發する時には、まるで串談でも爲に行く人のやうに斯の戦争を遊戯視して居たといふ福見君の話もあつた。その人を知るだけに、斯うした話を聞くのも可傷いたはしかつた。

委員會は大抵毎週二日づゝ大使館の一室で開いた。そこへ行つて見ると、獨逸方面にある日本人の困るだらうと云ふことは故郷でよく想像されても、巴里にあるものゝ困つて居る事情などは本國の政府の方でも最初それを信じなかつたとの話もあつた。いづれは在留の日本人一同大使館に籠城するやうな時も來るだらう、第一今から食料品が缺乏するやうでは皆一つところへ集まつて粥でも何でも啜ら



ねば成るまい、斯様なことまでも皆の間に考へられた。北京籠城の経験のある石井大使は萬一の場合を心配して、そろ／＼伊太利米などを大使館員に買集めさせて居るとのことでもあつた。その席では少くも巴里に在留する同胞全體のことが分つた。百餘人の日本人の中には二十人近い軍人の在留することも分つた。私は又、通りすがりのいろ／＼な旅の同胞が斯の戦亂を避け感ふて居ることをも知つた。旅のあはれな話が多く出た。私は委員の一人から、試みに深夜のセエヌ河の岸を歩いて見たら凄惨な氣は身を襲ふやうであつたとの話を聞いた。

## 六十四

日本の開戦の噂は既にしば／＼巴里で傳へられた。戦争の記事で埋られた巴里の新聞紙に東京發の電報を見ない日は無い位であつた。西伯利亞經由線の斷絶以來、私達は半月近く故國の新聞を讀む事も

出來ずに居た。測り知り難い周圍の形勢を見て、取りあへず私は東京朝日宛に簡単な通信を書いた。何程私は其消息が無事に故國に届くことを祈つたか知れなかつた。

恐ろしい一時の混亂もや、沈まり、市場の秩序もや、回復し、停車場附近の警戒もや、寛かになり、不安ながらも佛蘭西國內の一部の旅行は出来るやうに成つた八月の中旬には、巴里の市中に残るものは老人と子供と婦女とだけであつた。道で行き逢ふ盛りの男はと見ると、大抵皆外國からの寄留者であつた。大風の吹き去つた後のやうな寂しさの中に立つて見ると、壯丁といふ壯丁を根こそぎ持つて行かれた巴里には毎日々々戦報を待受ける心配な心持が残つた。婦女や老人は皆首を延ばして國境の方から來る通信を待受た。町々の窓には三色旗を飾つて佛蘭西軍の勝利を祈つて居た。新しい報知が來る度に、私もちつとしては居られなかつた。部屋の壁へ行つては新聞と地圖とを見比べたり、兎角受太刀な佛蘭西側の行動をもどかしく思つたりした。

「普佛戦争のありました年も大變な暑さで、その年の冬はまた大變な寒さでしたから、あの戦争に行つたものは皆難儀を致しました。」

私の顔を見るとシモネエは斯様な話をした。この非常時には、佛蘭西人の内部に潜んで居たやうな好いものも悪いものも皆外部へ露出して來たと言つていゝ。夫を國境の方へ送つた女の中には巴里に居残つて働くものを多く見かけるやうに成つた。地下電車の改札口にも女が立つやうに成つた。私は普通の電車の中で、女が車掌の帽子を冠り、靴を肩に掛け、女に出来る丈のことは男の手を省いて代らうとしてゐるのを見て、健氣なる佛蘭西の婦人よと言ひたくなつた。羅馬舊教風な人々の信仰なども其時になつて私の眼につくやうに成つた。私はこの界限の寺院を訪ねてそれを感じる迄もなく、自分の下宿の主婦や姪などが夕方の食堂の窓の下に跪いた光景を見ても、そんな隠れた部屋の片隅にまで熱い祈禱の氣分を感じることが出来た。

委員會のある日のことであつた。私はすこし陽氣あたりの氣味で、何分大使館の方へ出掛ける氣力もなく、酷い暑さに苦んで居たことがあつた。時々部屋の窓へ行くと、狩集められた入營者の一團が熱い街路をよろめき通るのが眼の下に見えた。烏打帽子を冠り手荷物を提げた人達の揚げる行進曲も力の無いものであつた。有るものは唯、目の眩むやうな日光と、汗と、盲目的に前進する歩調と、唸る

やうな合唱とであつた。その日私は委員會の方から戻つて來た神戸、河田の二君を迎へて見て、君等が英國行を思ひ立つやうに成つたことを知つた。砲聲を聞く迄は巴里に踏留まらうと言つて居た河田君も到頭荷仕度を始めた。その晩河田君は遅くまで掛つて部屋にあるものを片付けて居た。夜の十二時頃に私が寢臺の上で眼をさますと、まだ隣室では河田君がゴト／＼音をさせて居た。壁一重隔て、それを聞いた時は實に心細い思ひをした。

日頃惡意にする佛蘭西人の家族も奈何したか。さう思つて、拂曉に雷雨の來た後の涼しい午前には私は下宿を出た。黄や紅の花が空しく咲き亂れて居る植物園の中を通つて、ギイ・ド・ラ・プロツスの町に住む年老いたレギイ教授の家を訪ねた。そこでは子息を一人迄も戦地の方へ送つたといふ話だつた。私はベチユウヌの河岸へ出て、日本美術蒐集家のオダン君の家を叩いた。オダン君もアルゼリイの殖民地の方へ戦争を避けて行つて居た。私は更にラベエの河岸に住む詩人リエーヴル君の家へも寄つて見た。リエーヴル君はまだ動員されずに居たが、近く母や姉を置いて出掛けずば成るまいとのことであつた。その日は私は河蒸汽でビョンクウルまでセエヌ河を下つた。戦時とは言ひながら岸のところ

く釣を垂れて居る人の楊氣さには少し驚かされた。ピョンクウルへ行つて、そこに住むモレル君の入營も翌日に迫つて居ることを留守居の家婢から聞いた。

八月の十六日には露領波蘭の自治が巴里で發表された。兎も角も白耳義は大勢を支へて居る、佛蘭西南部へ避難を思ふものが有るならば今だ、リオンへ向ふならば大使館でも相應の便宜を圖るとのことであつたが、前途の不安を恐れて皆旅行を躊躇した。神戸、河田君等の出發はその際であつた。倫敦へ避難した京都大學の仁保博士が河田君等のことを心配してわざわざ巴里まで迎へに來たことも、二君に取つて嬉しいおとづれであつたらうと思ふ。

十七日の朝、河田君等は仁保博士と連立つて北の停車場から立つた。瑞西方面から巴里へ歸つて來た東京大學の穂積君も一緒だつた。巴里に在留した美術家仲間では高村君がその一行に加はつた。

どうも委員からして左様皆逃出してはひどいといふ非難もあつたが何となく私にも巴里は危険に感じられて來たし、何事も手につかなかつたし、自分もこの都會を去つて佛蘭西の田舎へ行きたいと思ふ心が動いて來た。巴里はもう見て居られなかつた。

## 六十五

到頭私も巴里を離れることに意を決した。昨日は獨逸の大軍がナミュウルの要塞に迫つたとか、今日は白耳義方面で大戦が開始されるとか、左様いふ戰報を朝に晩に待受ける空氣の中にあつては、唯々市民と一緒になつて心配を分つの外はなかつた。私も周圍の事情の許すかぎり巴里に踏留りたいと思つたが下宿の主婦がリモオジュ行を勧めて呉れるので、これを機會に佛蘭西の田舎をも見たいと思ひ、およそ三四箇月ばかり滞在の豫定で出掛けやうと思ひ立つた。

動員令の下つた日から數へて三週間ばかり経つ頃には負傷した兵士が既に戦地の方から運ばれて來るやうに成つた。數日のうちに巴里を離れやうとして居た私は下宿を出て、日頃よく歩きに行くルユキサンブルの公園の方へ足を向けた。何時復旅の身に巴里を見ることが出來やう、もう一度巴里を見

得るの日は果して奈様な風に變つて居やう、そんな心持が私の胸に湧いて來た。その時になつて初めて私は心から斯の都を愛惜する心を持つた。戦時に際しての貧民救助のための廣告が出て居る町々を歩いて行くと、饑ゑた犬などが眼につく様になつた。多數の貧民は救護所の前に群がるやうになつた。そこでもこゝでも施與が始まつてゐた。

八月下旬の日光は急に射して來たり又急に影に成つたりして行くやうな日であつた。私は『シモンヌの家』の前を通つて小ルユキサンブルの並木の下へ出た。そこには最早黄ばみ落ちたマロニエの葉も見られた。鳩、雀、鳥に似た黒鳥、稀には蝶なども來る長方形な草地は青々とした天鷲絨のやうに刈込まれ、その草地の中央に立つ石柱、兩端に古く錆びた裸形の石像も相變らず休息の心地を與へた。自然と人工との巧に調和せられてさながら長い織物を見る様な花壇には黄や白や紅の花のさかりであつたが、訪れる人とても少く寂しげに見えた。二列の並木を通して花壇の向ふには、僅に黒衣の尼僧、老人、外國人などの通り過ぎるのを望んだ。その樹蔭から鐵柵を隔て狭い靜かな街路を隔てて、あだかも並木の奥に背景のごとく見える學校の建築物があるが、その窓々も閉まつて居た。その奥

の奥に見える建築物の石の柱、圓味をもつた前庭の植込などもしんかんとして居た。

斯うした場所が兵火のために蹂みにじられて灰燼の蒼と化し去るやうな日の假りにもやつて來るとしたら。私のやうな旅行者の胸にすらそんな杞憂が浮んで來るほど、周圍の形勢は暗かつた。私は少ルユキサンブルを通り抜けて本公園の方へ出て見た。元老院前の噴水池が眼の下に見える左側の石垣の邊りは公園の中でも私が好きでよく行く場所であつた。林を圍繞する石壇とも言ひたい垣の上には鼎形の石瓶に植えられた草花が蔓を垂れて居た。涼しい立木の葉蔭からは微かな風も通つて來た。その石垣の上に手を置く度に私は妙に旅らしい氣持に成つた。こちらの垣の下に芝生の斜面があれば向ふにも薔薇が植ゑてあり、こちらに石階があれば向ふにも獅子の石像があり、こちらに木製の大きな植木鉢があれば向ふにも圓い花園があるやうな、巴里に於ける唯一のルネッサンス式公園と言はるゝほど大きな様式を重んじた園内の設計と意匠とをその石垣の傍から望むことが出來た。私はそこで向ふの林の間に對立する女王や王妃の古い石像を數へることも出來た。十八世紀の佛蘭西の形見がそこに群をなして残つて居ることを想ひ見ることも出來た。向ふのマロニエの林も早赤黒く見えた。フロ

オベエルが女友であつたといふジョオジュ・サンの石像は隠れて見えない迄も、こんもりと繁つた樹木の上にバンテオンの圓い石塔と十字架とを望むことは出来た。青い外套を着て銃を肩にした守備兵の一隊が眼の下の花園の間を通つた。カトリックの尼に連れられて石階を下りて行く女學生の群も見えた。私が立つて眺めて居た石垣の近くには、十五六許りになる二人の娘が揃ひの水色の着物を着て書籍を開けて居た。そこ、この樹の下には二人三人づゝ集まつて戦時の寄附の衣服を縫ふ婦人もあつた。逢ふ人毎に私は心を引かれた。枯れ落ちたプラタマの葉を踏む音をさせて、公園内の林の間を萎れ勝ちに歩いて来る黒い平常服のまゝの女の連までが何となく私の心を引いた。私は薔薇の花園のある方へも行つて見た。その花園のさかりの頃には河田君を誘つて来て二人で旅らしい時を送つたこともあり、低い鐵柵の前に立つ自分の旅姿を河田君が寫眞機のレンズの中に納めて貰つたこともあつたが、最早深い薔薇の香氣もなく、紅く白く色の褪せたのがとろろくに残り咲いて居た。そこから古風な煉瓦造りの建築物の裏側が見えた。九つばかりの窓の間に高く並んだ胸像の裝飾が見えた。それがルキキサンブルの美術館だ。あの建築物も閉つて居た。

私は詩人エルレヌの石像の前にも行つて立つた。幽邃な芝生の中央に臺石を置いて、二重にも三重にも花輪を巻きつけたやうな草花が盛土の上に植てあつた。日の射つた石像の深い眉と額とは何時見ても強い感じを起させた。強く悲しんだ人が今も猶そこに悲しみつゝあるかの感を起させた。下には黄なヒアシンスが何かの微笑のやうに咲いて居た。

樹蔭に隠れた音學者シヨパンの銅像の立つあたりから、芝生の一つが見える公園の一區域は矢張私の好きな場處であつた。樹深く静かで薄日の漏れた草の上も、吹きたまつた落葉も、白樺の幹も、芝生の中央に立膝をした古雅な裸體の石像も、何もかも陰氣に青ざめて見えるやうな場所ではあるが好きは好きだつた。そのあたりにはまだ草木も青々として居た。緑葉は銅像のシヨパンの額を掩ふて居た。寂しい公園の内を歩き廻つて、やがて青々とした柔かい草地の展けた一隅へ出ると、町の空へがらん鳴り渡るやうな寺院の鐘が聞えた。戦時にあつて聞くと、その鐘の音までが特別な響きをもつて町から町へと傳はつて来た。四十餘年前巴里に籠城した人達は暗い穴藏のやうな地下室に隠れて鼠まで殺して食つたとやら。この都會に居残る人は奈何なるだらう、婦女は奈様な目に逢ふだらう、さう思

ふと普佛戦争の昔と同じやうな日が復来るだらうとは、考へたばかりでも恐ろしいことであつた。

## 六十六

何時の間にか私達の家番の亭主も見えなくなつた。同番地全體のアバルトマンの世話をして居たあの亭主も、もう好い年の隠居であつたが、細君と一人子息と開戦以來來て掛つて居る子持の女とを残して置いて戦地の方へ出掛けた。

私も既に臨時の委員を辭した。自分等の組の事は山本、福見二君に頼んで置いて行くことにした。山本君は森田君と連立つてファルギエールの方から私を見に来て呉れた。

「僕等はまあいゝとしても、獨逸に居た連中は困つたらうと思ふね。十人、廿人くらゐづゝ英吉利の方へ逃げたものが有つたさうだ。」

私はそれを言ふと、山本君は巴里に砲聲を聞く迄は踏留るといふ面持で、この戦亂を英吉利の方へ避けて行つた最初の人達の噂をして、

「高村の弱蟲め。」

と笑つた。山本君は又、入營するシモンヌの父親を見送つた話をした。君自身に荷物負ひながらシモンヌ母子と共に停車場まで送りに行つてやつたら、あの亭主は堅く君の手を握り熱い別離の接吻を妻子に與へて置いて出發したとのことであつた。山本君や森田君と私の間に出る話と言へば、互に無事な顔を見て前途のことを語るの外はなかつた。その中で私はビヨンクウルに住むモレル君の家族を見舞ふために河蒸汽でセエヌ河を下つたときのことを言出して、あの岸で釣をした人達の暢氣さには驚かされたと話した。

山本君は誰かの話を思ひ出したやうに、

「普佛戦争の時にも、巴里の釣好きは鐵砲の玉が飛んで來る中で釣つたさうです。玉に打たれてはよく死んだものが有るさうです。」

露西亞軍が東普魯亞に入つたといふ報知の傳はつた日には、私は一日荷造りで暮した。蟬の聲一つ聞かない町中でも最早何となく秋の空氣が通つて來た。部屋の壁に残つた蠅が來て旅の鞆に取りつくのも眼についた。私は出来るだけ手荷物を減らさうとした。書籍などは皆置捨て、行く思ひをした。せめてマウバツサンの旅行記一冊は鞆の中に入れておきたいと思つたが、それすら見合せた。戦争以來旅行も不自由になつた。旅客一人につき三十キロ以上の手荷物は許されなかつた。早くやつて來るリモオジュの方の寒さを豫想して自分の手に提げられる丈の衣類は成べく持つて行かうとした。

私の下宿でも半は引越しの騒ぎをした。シモネエとマアガレットとは先づリモオジュの田舎へ向つた。私が巴里を立たうとした前日は午後から唯一人で暮した。連日の疲勞が出て晝寝をした後に眼をさますと、餘計に家の内はがらんとして居た。若い獨逸人の居た部屋にも、食堂にも、河田君の居た部屋にも音一つしなかつた。控訴院附の辯護士といふ佛蘭西人も戦地の方へ出掛けたと見えて、その隣の部屋の方もひつそりとして居た。私は旅の鞆の側に腰掛けて、エルサイユの兵營に行く事を報じて來た

モレル君の手紙を思出した。その手紙には、「君の國が今度の戦争には吾儕の側に立つて呉れるといふことは嬉しい、吾儕は互に味方であると考へることも嬉しい。」としてあつた情意の籠つた文句を思出した。

「異人は感心だ。」

と私は言つて見て、置捨て、行く部屋の内を獨りで歩いて見た。斯の下宿に泊つて居たアリエス、セデルの二君が一度私を驚かすつもりで、アリエス君の方は主婦からでも借りた女の帽子を冠り女の上衣を着、セデル君の方は山高帽子に附髭まで附けて、まるで一對の夫婦のやうに腕を組合せながら斯の部屋の扉を叩いて入つて來た時の無邪氣な戯れ好きな二人の姿が私の胸に浮んだ。セデル君も私の部屋へはよく話し込みに來た人で、獨逸音でザイデルといふのが實は自分の本名であるが、それでは餘りいかつく聞えると思ふから、英國の旅以來セデルと呼ぶことにして居るといふ話などをさも心易げに私に語り聞かせたことも有つた。何事かある度にきつと私の部屋へ注進に來るのもセデエル君で、マアガレットが叔母シモネエの手傳ひとして初めてリモオジュの田舎から出て來た時にも

主婦の姪だと言ふから奈様な人かと思つたら彼様な髪の毛の赤い女か、あの赤さは人に嫌がられる赤さだ、あゝいふ髪の毛の女に限つて病氣に罹り易い、そんなことをわざ／＼私の部屋まで言ひに来たものだ。あの若い獨逸人は何かにつけて巴里にあるものに難癖をつけずには氣が済まないといふ風であつたが、しかしシモネエが疑ひ出しにやうに軍事探偵のつとまるほどの男とは私には受取れなかつた。兎もあれ、私はアリエス、セデルの二君と食卓を共にした當時のことを胸に浮べて見て、あの佛蘭西と獨逸との二青年がいつかは砲火の間に相見ゆる時であらうかと恐ろしく思つた。

私は町へ出て旅らしい夕飯をやつた。そこから引返して来て復自分の部屋に腰掛けた時は、窓のところに星一つ見つけた。巴里を立つ前の晩だ。短くとも故國の新聞紙宛に一回の通信をと思つたが、僅に私は東京の親戚や子供等に宛てた手紙を書くに止めてしまつた。その日の夕刊には英佛聯合軍が襲撃も功を奏しないでナムユウルの要塞は危いとしてあつた。佛蘭西側の新聞でそれほど不利な戦報を公けにしたのは初めて、あつたと思ふ。獨逸軍の前騎が佛蘭西國境のリールに顯はれたといふ突然な報知を読んだ時にも何程私は氣に掛つたか知れなかつた。戦報も次第に漠として来た。何事も直接な

記事のない新聞を買ふことすらあつた。夜の八時半頃に三色旗を立てた佛蘭西人の群が唱歌を歌ひながら電車路を通つた。窓からそれを望むも悲壯であつた。九時と言へば町々は早寂しく、燈火の数も減り、饑ゑた犬の鳴聲が何となく耳についた。私は旅の荷物の側に遅くまで獨りで腰掛けた。翌朝の早い出發を思つて其晩はろく／＼眠らなかつた。

## 六十七

私がセエヌ河に沿ふたドルセエ海岸の停車場へと急いだのは八月二十七日の頃であつた。リモオジュ行を約して置いた柚木、金山、足立、それから正宗の四君はいづれも兩手に提げられる丈の荷物を用意して各自の畫室から停車場に集まつた。斯の旅に出る前にも、私達は警察の分署へ許可を受けに行つたり、前の日から鐵道の切符を買ひに出掛けたり、いろいろな戦時らしい思ひをした。



私達は揃つて出掛けた。前の年の五月、私がマルセユからリオンへ、リオンから巴里へと向つた時は殆んど夜中の汽車旅であつたから、今度の車窓に映るものは初めて見るものゝみのやうな気がした。同行五人の旅も汽車の中を楽しくした。私は佛國中部の平坦な耕地や牧場やそれから森などをめづらしく眺めながら乗つて行つた。オート・井エンヌ洲に近づくにつれて我國の甲州や信州地方で見るやうな高峻な山嶽は望むことは出きない迄も、一年餘を巴里の旅窓に暮した身には久し振りで丘や谷の多い地方の空気を吸つた。時には途中の停車場で負傷兵を満載した列車にも逢つた。その列車が私達の車窓の側に停つた時に同室の佛蘭西人の婦人達が負傷兵をいたはつて、窓から金銭や果物を與へ、葡萄酒を分けて注いでやるなど、戦時らしい光景を目撃した。戦地の方から送られて来たそれらの負傷兵は白耳義方面の戦ひの激しさを事實に於いて語つて見せて居たかと思ふ。

やがて私達は巴里から七時間ばかりで行かれる佛國中部のリモオジュの町に入つた。北部の方から避難する人達や負傷兵で混雑する時とはいへ、私達五人のものはまだそれでも樂に腰掛けられて、三分位の遲着で済む汽車旅をすることが出来た。丁度出征する軍人を見送るために町の人達が停車場の

附近に群がり集まつて居る時であつた。私達のやうに毛色の異つたものが五人も一時にそこへ着いたことは、ひどく町の人達を驚かしたらしい。忽ち私達は右からも左からも顔を覗きに来るやうな男や女の群に圍まれてしまつた。その群集の中を分けて私のところへ聲を掛けに来る若い女があつた。マアガレットだ。一日先にこの田舎町へ着いて居た巴里の下宿の主婦は停車場まで姪をよこして呉れたのだ。多勢の人の視線が集まるので、出迎へに来て呉れたマアガレットは娘らしく顔を紅めたくらるであつた。私達は戦時の旅行許可證を構内に立つ番兵に示して置いて、停車場前の珈琲店に物見高い町の人達を避けた。

シモネエは斯の町はづれに住む姉の家の方で私達を待受けて居て呉れたが、まだ部屋の用意が出来ないとのことで、私達は停車場前の旅館にその日を送ることにした。食事にだけ来いと言つて、夕方にはシモネエの甥子にあたるエドワアルが使に來たので、私達五人は案内の少年と共に町はづれの家の方へ歩いて行つた。土地の子供等はいづれも眼を圓くして、エトランゼエの一行を迎へるやうに後になり先になりしてぞろ／＼私達に隨いて來た。

『どうして斯様に子供が随いて来るんだらう。』と正宗君は耐へきれないやうな調子で言った。

『巴里ぢやこんなことは無いねえ。』と言ふのは足立君だ。

『日本人がめづらしいんでせうか。』と私も言つて見た。

『でも、まだ石を投らないだけ好う御座んす。』斯う言ひながら柚木君は子供の群を眺めくゞ歩いて行つた。

旅慣れた金山君はあまりに子供等が煩く随て来るのを見て、どうかするとその子供等の中には後方から驅け抜けるやうにしては私達の顔を見やうとするものがあるので、わざと子供等の方へ面長な顔を突き付け、大きな眼の球を近く持つて行つて、

『ルギヤルデエ(御覽)。』

と佛蘭西語で戯れて見せた。

入口の底には葡萄柵もあり莢竹桃の花も咲いて居るやうな佛蘭西風の田舎家が私達を待つて居た。その入口で私はシモネエやマアガレットと一緒に成つた。シモネエの姉はマテランのお婆さんといふ人

であつたが黒い佛蘭西風の衣裳を着けた背の低い體軀を臺所の戸口のところに顯して私達を迎へて呉れた。シモネエが私達を一人づゝ引合せる度に、お婆さんは物靜かな女らしい調子で挨拶した。土地の子供の煩かつたことは、葡萄柵の近く窓のある食堂で私達が夕飯に有付いた時にも石垣の外から覗きに來るものが有るくらゐであつた。斯うした場所にも拘らず、停車場前に戻り、そこに一夜を送つてサン・テチエンヌ寺の塔を旅館の窓の外に望んだ時は、めづらしく私は鶏の鳴き聲を聞きつけた。この町は佛蘭西陶器の産地として知られて居るばかりでなく、六聯隊の所在地であるとか。兵營の喇叭の音も朝霧の中に聞えた。

## 六十八

佛國オート・井エンヌ州、リモオジユ町、バビロン道、そこがシモネエの姉の家のあるところであつ

た。部屋の支度の都合で、リモオジユに着いた翌日も私は他の諸君と共に停車場前の旅館に逗留した。そして食事だけバビロン道の方へ通つた。さういふことの使には何時でも少年のエドワアルが打合せに旅館まで来て呉れた。シモネエは姉の家の二階に二部屋しか無いと言つて、柚木君等のためにも適当な部屋を貸す家をと心配した。

巴里を見た眼でリモオジユを見ると、こゝは舊い城下とも言ひたい町だ。自分等の國のことにしたなら何となく松本あたりを思ひ起させる。サン・テチエンヌ寺は停車場前の旅館の窓からでも見える高い石造の寺院であるが、その前が丁度私達の通路に當つて居た。寺への坂路の角に、十字に彫に刻んだ辻堂のあることは羅馬舊教の國らしい思ひをさせた。Notre Dame de Preservationの文字が讀まれた。聖母マリアの像には香華が具へてあつて、體も縮み脊髄も踞まつた老婆が堂の横手で細長い蠟燭を賣つて居た。堂内の香華は思ひがけない蓮の造花で、金色銀色の花のかたちと言ひ葉のさまと言ひ佛教の寺院に見ると彷彿たるものであつた。戦地にある人の無事を祈るのか、辻堂の前の蠟燭の並びとほる火影には黒い着物のまゝ石段のところにはひざまづく年若な女をも見かけた。

午後に、私は正宗君やエドワアルと連立つて斯の辻堂の前から高い崖の横手へ出た。リモオジユの町を貫く街道は崖の横手で可成長い坂になつて町はづれの橋の方へ續いて行つて居る。驢馬に鞭を呉れて小さな荷馬車を驅つて行く在郷臭い女などが私達の眼にあつた。その街道がツウルウズと呼ぶ佛蘭西の國道であることを私達に話して呉れるのもエドワアルだ。私達はこの少年に誘はれて坂の途中から横手の高い崖の上へ出られる小徑を登つて行つた。

古い城址かとも見えるほど大きな礎の残つた遊園が崖の上にあつた。私達はサン・テチエンヌ寺を背後にして立つたやうな眺望の好い位置へ出た。耕作と牧畜との地たるリモオジユの町はづれはそこから見渡された。井エンヌ河は眼の下に流れて居た。

「伯母さん。」

とエドワアルが呼んだと思ふと、黒い着物を着たシモネエが私達の後から崖の道を登つて来て、石垣のところまで私達と一緒になつた。斯の働き好きな主婦は部屋の用意やら買物やらで私達のために奔走して居た。

「今私は一軒寄つて部屋を見てまゐつたところです。お連の方のお氣に入りますか、奈何ですか。何しろあなた斯の戦争でせう。皆さんがもう避難、避難で、どこもかしこも一ぱいなのでございます。」  
斯うシモネエは言つて、巴里からの避難者ばかりでなく白耳義方面から戦亂を逃れて来た人達が何程この町に入り込んで居るかしかないといふ話をした。この町が佛蘭西負傷兵のための收容地の一つであるといふ事實をもシモネエは語つて居た。

「こゝはなかく眺望の好いところぢや有りませんか。」

と私が言つたら、シモネエも久し振りで自分の故郷を見るといふ顔付で、

「なにしろあなた、斯様な古い古い町でございますけれど。」

「こゝは城址で、もあるんでせうか。」

「いえ、これはある人の邸跡です。これから河についてまゐりますと古い城址もあります。リモオジユといへば、それは古い歴史のある町なのでございます。」

シモネエはしばらく私達と同じやうに石垣の上に手を置いて崖の上から眺めて居たが、やがて用事あ

りけに私達の側を離れて行つた。正宗君とエドワアルとは遊園の内をあちこちと歩き廻つた。私は高い石垣に身を寄せながら國道に添ふて架けてある石橋や、驢馬に引かせて河岸の並木の間を通る荷馬車などを眼の下に眺めて居た。對岸にあるバビロン道も、マテランの家もその位置からは隠れて見えなかつた迄も、耕地の多い傾斜に並ぶ佛蘭西風な田舎家などを樹木の間に見望むことは出来た。此處へ来て立つて見ると私は胸一ぱいに好い空氣を呼吸する事の出来る静かな田舎に身を置き得たといふ心地がして来た。戦争は偶然にも巴里の様な大きな都會の響から暫く逃れ去る機會を私に與へた。

## 六十九

一行五人のうち金山君は英國に渡る考へで、二日ばかりをリモオジユ停車場前の旅館に送つた後、巴里を指して引返して行つた。正宗君と私とはバビロン道にあるシモネエの姉の家の二階を借り、柚木

君と足立君とはシモネエの世話で浅い谷一つ隔てたところにある田舎の方に宿をとつた。尤も柚木君等は食事だけに私達の宿へ見えて、島の中の近道を谷づたひに通つて来た。

巴里の方のことも心に掛つたが、まだそれでも私達があの都を離れて来る頃には百餘人の同胞が在留して居た。リモオジュへ来て落着くか落着かないに、私達は巴里の方の形勢が日に日に變つて行つたことを知つた。八月の晦日に山本君から受取つた便りには、英國行を思ひ立つものは今日のうちに巴里へ歸れとしてあつた。翌、九月の朔日にまた山本君から出た手紙を見ると、日附も何もなくて唯「急」とした文字が眼に着いた。急いで書いてよこしたらしい其手紙には、「形勢非なり。巴里へ歸ることを止めらるべし、必ず。森田、安井、長谷川等も英國へ逃れんとして不可能となれり。今夜大使館に行きたる結果、小生等の行動定まるべし。多分リオンに出發するならん。以下後便。」としてあつた。私達は山本君から同時に別の手紙をも受け取つた。

「<sup>巴里</sup>到頭巴里立退の幕となつた。既に佛國政府は他へ移つたらしい。大使館でも昨夜書類の焼捨てをやつて居た。昨日午後獨逸軍の飛行巴里市に六つの爆彈を落した。一つはガール・ド・リオンに、一つは

東の停車場に落ちた。他のはサン・マルタンのビュウロオを壊した。最早巴里包圍は免れぬらしい。敵の騎兵は八十キロメートルの處まで来て居る。線を曳いて英國と巴里との連絡を斷たうとして居るのだ。今日大使館から皆に宣言がある筈だ。昨夜一同集合して最終の相談をして、今日の具合で英國へ渡れなければリオンに一同出發する。今日のうちに兎に角巴里を出る。斯る譯で君等の荷物も無論われ／＼のものも、其儘置捨てることにした。あゝ巴里も、わが巴里も遂に獨逸の奴原に蹂みにじられるのか。小シモンヌが涙ぐんだのを見て巴里を離れるのは慚愧を感じる。僕には此處は旅の土だ。彼等には墳墓の地だ。感慨無量だ。」

この手紙の封筒には八月三十一日巴里出の消印が押してあつた。私はこの手紙を正宗君に見せて互に顔を見合はせた。

「兎に角、柚木君等にもこの手紙を見せに行つて來ます。」

と私は正宗君に言つて置いて、マチランのお婆さんの家を出た。そして柚木君等の泊つて居る家の方へ裏道づたひに島の間を急いだ。

柚木、足立の二君がリオン行きを決したのも斯の手紙を見たからであつた。二君は漸くのことと落着いた宿を断り、解いた旅の荷物を復取片付け、巴里への手紙を書き、一枚のリモオジュ土産の繪畫をつくる暇もなく、翌二日にはマテランのお婆さんやシモネエにも別れを告げてそこへリオン行の途に上つた。

残暑らしく堪へがたい日であつた。すべての物は黄ばみ汗ばんで見えるやうな日であつた。私は正宗君と二人で柚木君等を見送らうとして、シエルミニヤプラタアヌの並木の立つ町はづれの街道をボン・ナフといふ石橋へと取り、サン・テチエンヌ寺の塔の見える高い崖の側について例の石の辻堂の前へ出、田舎の町らしい凸凹した石造の道路の日に熱く焼き蒸された上を歩いて行つた。リモオジュ停車場で柚木君や足立君にも別れてしまつた時は、この不便な佛蘭西の田舎に私達二人だけ残つた。

## 七十

その翌日私達は巴里からの最終の報告に接した。それを讀んで羅旬區を中心にした二十一人の組のうち私達を除いたの他美術家仲間其他の諸君は思ひくにあの都を立退いたことを知つた。十一人は英國へ、一人は米國へ、二人は佛蘭西南方のニスへ、一人はリオンへ向つたことを知つた。デイエツプ行の列車も明日の朝の三時が最後だとか一步遅れ、ば籠城の外は無いとか言はれる中であつて、倫敦へと志した人々があるいはアーヴル經由か、あるひはブルターニュのサンモア經由かと、戦亂を避け感ふた光景がその報告で想像せられた。市街の夜の燈火が悉く消され、ブウロオニユの森には牛、豚、羊の群が籠城の食糧の用意に集められたといふ巴里を私達の組で最終に去つたのは、山本、藤川の二君であつたらしいことをも知つた。其報告の中には又、籠城を覺悟で残る人が四五人は他の組にある様子だとしてあつた。

九月三日は佛蘭西政府がボルドオの方へ移つたことを發表した日であつた。私達は喇叭を吹いて新聞

を賣りに来る女のある様な邊鄙なバビロン道に居てそれを知つた。日本の大使館も最早ボルドオの方かと思つた。

「正宗君、僕等は一體奈何なるんです。」

「まつこと困つたら、僕は荷物を脊負つて斯の國道を歩いて行きますよ。マルセエの方まで歩いて行きますよ。」

私達二人はこんなことを言ひ合つて諸方からの通知を待つうちに、デイエツプから英國に渡れなかつた金山君は百々瀬君といふ畫家と二人でリオンへ逃げやうとして切符を買ふために十時間も立通し、二日にリモオジュを立つた柚木君と足立君とは車掌さへ行先を知らない汽車に幾度か乗換へ六箇所の停車場で三時間あるひは六時間を待ち都合四十時間あまりも掛つて四日の朝に漸くリオンに入つたことなどを知つた。佛獨國境の交通斷絶以來全く消息を聞くことの出来なかつたミュウニツヒの澤木君が七日になつて漸く倫敦にあることも分つた。伯林の河上君、竹田君、夫から生田君なども同じく倫敦の方であつたらうと思ふ。その時になつて見ると歐羅巴へ來てから私の知るやうになつた同胞諸君

も殆どちり／＼ばら／＼に成つてしまつた。山本君でも、森田君でも、長谷川君でも、美術家仲間の多くは英國の方であつた。

七日の午後には巴里から逃げて來たマテランの家族が三人連で私達の宿へ着いた。マテランの細君は私達に二階の部屋を貸して居るお婆さんの實の娘で、少年のエドワアルはこのマテラン夫婦の二番目の息子にあつて居た。エドワアルの兄のアンリも両親と一緒に着いた。

「あなた方がリモオジュへいらした時は、汽車は七時間ぐらゐるものだつたでせう。どうです、私共は巴里から此處まで來るのに三十時間もかかりましたよ。」

斯う巴里から來たマテランの細君は私に言つて見せた。兵士の補充、食糧の輸送、負傷兵、捕虜其他を運ぶために汽車旅の混雜と不安と思ひやられた。巴里ばかりでなく北の國境の方からの多數な避難者は荷物列車にまで溢れて居ることであつた。

食用のための牛や羊を集め賣ることを職業として居るといふ赤ら顔のマテランも、肥つて愛嬌の好い細君も、巴里の下宿の方ではシモネエの許へ訪ねて來るのを稀に見かけたぐらゐる人達で、私がしみ

じみ口をきくのも今度初めてあつた。しかし斯の佛蘭西人夫婦をはじめマテランの家の人達が寄せて呉れた厚意で、正宗君も私も比較的安全な場所に身を置いた。旅の前途は言ふことが出来なかつたが、私達二人はしばらくこゝに足をとめておくことにした。私は井エヌ河の橋向ふにある郵便局まで行つて亞米利加經由の郵便物が出ることを確かめて来た。こゝからボルドオへ廻り、船便に積まれるとすれば、故國への便りも思つたより早く届かうかと考へた。倫敦電報其他で歐羅巴の形勢を知つた國の方の人々も奈様に心配して居るだらう。その考へから、私は東京朝日の山本松之助君宛に取りあへず巴里に在留した同胞の消息や開戦當時の巴里の模様などを書き始めた。それを二階の部屋靜かな窓の側へ持つて行つて書いた。蔓の延びて来て居る葡萄棚を越して窓の外にはパビロンの道が見えた。岡の地勢を成した牧場はその道まで迫つて来て居て、どうかすると赤い崖の端へ来る牛の顔が私の物を書いて居る窓の硝子に映つた。

## 七十一

「あなたは斯様な田舎が好いんですか。こゝには田舎の都會らしい潤ひといふものも少し、さうかと言つてアルタアニユほどの野趣もない。一口に言へば、こゝは平凡な土地ぢやありませんか。」  
斯ういふ言葉を足立君は私に残して置いて行つた。それにも關らず私はこのリモオジュに着いて停車場前の旅館の窓の外にサン・テチエヌヌ寺の塔を望みながら鶏の聲を聞いた朝から、もう蘇生つたやうな思ひをした。私は開戦以來の動亂の渦の中から逃れて来たといふばかりではない、過ぐる十五箇月ばかりの間休息らしい休息も自分に與へなかつたあの石造の街路を軋る電車と自動車と荷馬車との恐ろしいな響の中から、人を弱くするやうなあの密集した群集の空氣の中から、マウバツサンの言葉を借りて言へばあの凡俗な心づかいと儲舌との巴里から逃れて来た。この私に楽しい息を吐かせて呉れるやうな場處でさへあれば、假令そこが僅な石垣の側でも、あるひは僅な野菜島の間でも、私には澤山であつたと思ふ。況して私が見つけた石垣の側には白い薔薇や紅い夾竹桃の花などがさかんに香氣



を放つて居ただけから。私の歩き廻る野菜畠の間には梨や桃が既に熟して居たし、林檎の實もまさに熟しかけて居ただけから。

さすがにこゝも戦時らしかつた。働き盛りの男子は皆畠や牧場を去り、馬は徴發され、小屋も空しくなり、陶器の工場も閉され、商家も多く休み、中學や商業學校の校舎まで戦地の方から送られて来る負傷兵のための收容所となつて居た。しかし私は正宗君と二人で旅らしい心持を味はふに事を缺かなかつた。私達の宿から屋外へ出たばかりでも牛の群の飼はれる牧場がある。二頭立の牛が荷馬車を引いて行く後から木履を穿いた婦人などが通る。葡萄の葉は露にうるほひ、畠を耕す老人は戦地にある子を思ひ顔であつた。井エンヌ河は丁度私達が歩き廻りに行くに頃合な距離を流れて居た。岸の傾斜にあるポブリエの樹、佛蘭西の田舎風な赤い色の瓦屋根などは深い影を水に映して居た。あの河の水音を聞きながらマテランの家の方へ歸つて行く度に、旅らしい心持が私の胸に湧いて來た。

こゝへ來て見ると風俗の鄙びて居ることも想像以上であつた。リモオジュの町とは言つても、ボン・ナフの石橋を境にして私達の宿を取つた方は大字バビロン道とも言つて見たい程のところだ。私達が

マテランの家はその中でも見付に葡萄棚の造りつけてあるやうな家で、しかもその棚の用材が細くとも巖盤な鐵骨を使つてあるやうな家であるが、剛なぞの鄙びて居るにも驚かれる。自分等の國の方のことにしたなら、おそらく千曲川上流の川上八ヶ村あたりへ行かなければ見出せないかと思はれるほど、僅に二本の横木を溜の上に渡して、そこを剛としてある。リモオジュほどの町の片ほとりに斯様な在郷臭いものがあるかと奇異な思ひもした。丁度我國で言へば中山道や甲州街道あたりに似よりを見つけることの多い、すこし行けばサン・ラザアルといふ小さな村へ出られる佛蘭西國道に添ふた町はづれにマテランの家があつた。

巴里の方に居る私達の家番のおかみさんは倫敦出の河上君の葉書を廻送してよこして呉れた。倫敦が好い「隠れ家」であることは無事に獨逸から海を渡つて行つた君からの葉書にもあつた。私は同じ倫敦から出た河田君の便りをも受取つた。それには此處へ來て見ると戦争は何處にあるかといふほど静かだとしてあつた。こゝでは戦争を他にして詩を思ふことが出来るともしてあつた。私はこのうれしい書信を正宗君にも見せて、二人で英國の方に居る人達の噂をした。西伯利亞經由線の斷絶以來、私

達が國の消息を待つこともやがて四十日であつた。

## 七十二

并エンヌ河の音は日によつてバビロン道の左側にある牧場まで聞えた。私が正宗君やエドワアルと一緒に小高い岡の上に登つて遠い山を望んだのも、矢張その牧場の一隅であつた。私は河向ふの郵便局までづゝ故國宛の旅の通信を出しに行つたが、石ころの多いバビロン道まで引返して来て牧場の構内に入つて見ると、勉強家の正宗君が青い草地で畫作に取りかゝつて居た。その後には足を投出して眼前の風景と畫布とを見比べて居るのはエドワアルであつた。エドワアルは正宗君の畫作に興味を持ち始めて、岡の地勢を成した牧場の中の樹木から遠景に光つて見える町々の赤い屋根つゞきが畫面に取り入られるのを熱心に眺めて居た。リモオジュにある三つの古い寺院——その中でも對岸の右手に近く見

えるのがサン・テチエンヌ、中央に遠いのがサン・ピエル、左手の塔がサン・ミッシェルであるといふことなどを一々私に指して見せるのも、土地の事情に精しい斯の少年であつた。うしろまへに冠つた正宗君の軽い烏打帽子はしきりに動いて居た。それを背後から眺められるやうな位置に私も陣取つて、牛の踏み散らした牧場の草を藉いて見た。耳を澄ますと、并エンヌ河の流れる音が谷底の方から幽かに聞えて來た。その水音は急に遠く聞えたり急にまた近く聞えたりするやうな國の方の千曲川など、違つて、何時でも同じやうに聞えた。旅人の心を誘ふやうなその音は何となく私の耳について來た。

マテランのお婆さんは家の入口に近い臺所の窓のところに腰掛けて居て、私が屋外から歸つて行く度に窓から軽く首を振つては挨拶した。私はその窓の下にお婆さんと話し／＼立つて居るシモネエをもよく見かけた。そろ／＼仕事を片付けて牧場の方から歸つて來る正宗君がそこへ一緒になると、眼鏡をかけたマテランの細君までが窓から肥つた顔を見せて私達を迎へて呉れた。

「伯母さん。」

エトランゼ

と庭に立つシモネエを見かけて聲をかけながら、正宗君と連立って歸つて来るのはエドワアルであつた。エドワアルは正宗君の代りに油繪具の箱などを肩に掛けては歸つて来た。

『正宗さん、リモオジュのお土産がお出来になりますか。』

斯う手を揉みく聲を掛けるシモネエからして、久し振での歸郷を樂む人のやうに見えた。

『祖母さん、吾家の前の牧場が正宗さんの畫になりましたよ。』

とエドワアルが言ふと、お婆さんは窓から顔を出して癖のやうに首を振つた。臺所に働いて居たやうなマアガレットがお婆さん達の背後から顔を出すのも左様いふ時であつた。

巴里の下宿の方で見るやうな改まつた顔付のものはそこに一人も居なかつた。エドワアル兄弟が一緒になると、兄のアンリイは弟の髪を毛を撈る眞似して戯れるぐらゐるのことは、私達の見て居る前でもやつた。婚約の出来て居る人を戦地に送つたと言つて兎角萎れ勝ちなマアガレットも、伯母のシモネエが見て居ないところでは調戲かくひ半分エドワアルの耳を引張つて置いて、臺所の方へ逃げて行く位のこととは私達の前でもした。戦争のために偶然にも一緒に成れたやうな斯の人達の中へマテランが町から

でも歸つて來やうものなら、そこに見られるものは一層賑かな家庭の圖であつた。マテランはリモオジュの百姓が着る黒い労働服を上被のやうに着て居て、細君の方へ行つたり、お婆さんの方へ行つたり、すこしもぢつとして居なかつた。この質素な佛蘭西人の話は言葉に訛があつて、家中の誰よりも私には聞取りにくかつたが、笑聲はいかにも楽しかつた。

『ハツ、ハツ、ハツ、ハツ。』

とマテランはよく笑つた。

食堂は家の入口から左手の部屋にあつた。青い房の生りさがつた葡萄棚の下が直ぐ窓の外になつてゐた。しばらく私はその食堂の窓のところへ行つて、そこからバビロン道を通る田舎らしい風俗の人達を見て居ると、夕飯の支度に來たマテランの細君が私に聲を掛けた。

『シモネエに居た獨逸人があなた、ちやんと戦争を知つて居たといふぢや有りませんか。あなたもよく御存じなセデエ——あの男は獨探に相違ありませんよ。』

と言つて、マテランの細君は佛蘭西の女がよくするやうに小鼻のところへ人差指を宛行つて見せた。

「さあ、私には左様思へません、どうして彼様な人に軍事探偵などが出来るものですか。」と私が答へたら、そこへマテランもやつて来て、

「え、あちらは何と仰る。」

「どうして、そんなことの出来る男ではないとさ。」

マテランは食堂の入口に立つて、細君から斯の話を聞いて笑つた。

私が借りて居る二階の部屋は丁度この家の人達が集まる臺所の上に當つて居た。私は歩きづめに歩いて来た旅人が漸く宿屋に着いた時のやうな心持をその二階の部屋に味はつた。親しみのある燈火の前にやつとのこと私は自分を見つけたやうな氣もした。

## 七十三

九月の末まで待つうちに、ほつほつ國からの便りが来るやうに成つた。西伯利經由、もしくは横濱經由とした手紙などが巴里から轉送されて私達の手に入ったのは、おそらく亞米利加を廻つて着いたものであらう。三十日あるひは四十日も要つて来た郵便物を佛蘭西の田舎の田舎に居て受取るのは嬉しかった。しばらく讀むことの出来なかつた東京朝日と讀賣とがリモオジュへ来るやうに成つた時も嬉しかった。シモネエの話には、この町に集る多くの負傷兵の爲に毎度幾枚かの毛布を納めさせられたとのことであつた。こゝに有る殆ど凡ての公有の建築物は戦地から送られる負傷兵のために宛てられて居る有様であつた。

并エンヌ河も秋らしくなつた。ボン・ナフの石橋の附近にあるコントワアルは何となく橋畔の一小酒亭の趣があつて、私達のために珈琲などを温めて呉れる家であつた。私があつた橋のたもとを通る度に、子供らしい握手を求めやうとしては私の方へ飛んで来るのも其家の男の兒であつた。この兒は並木の下あたりで他の子供と一緒に遊んで居る時でも、私を見かけさへすれば必と飛んで来た。それほど私のやうな旅行者にも馴染むやうに成つた。その家のおかみさんといふ人も至極人柄なッモオジュ氣

質の婦人で、

「この邊の子供はさぞ煩いとお思ひでせう。どんなにあなた方がめづらしいのか知れません。まあ日本の方などを見るのは初めてだといふ人ばかりで御座いますよ。何でもリモオジユの陶器を調べに御座る方が一度見えたことが有るそうです。私の聞いて居るのはそれぎりです。ほんとに斯んな戦争でなければ、わざわざ皆さんがお出下さるやうな土地ぢや御座いません。」

おかみさんの言ふことは斯んな話ばかりでなく、マルセエユ方面から上つて来る佛蘭西の軍隊が好くこの家の前の國道を通るが、その軍隊の中に日本の士官を見かけたものゝあると言ふのは眞だらうかなどと私に訊いた。

「確かに日本の士官が通つたと言つて、この邊のものは皆さう申して居りますよ。それを見たと言ふものも御座います。」

とまたおかみさんが言つた。そして私がそんな町の人の噂を打消しても、おかみさんは半信半疑で居るくらゐであつた。

私はこの戦争が種々な流言を生んで居ることを知つた。一部の佛蘭西人の間に唱へられた日本出兵の噂がまことらしく傳へられて居たことは、こんな田舎の婦人の言葉の端にもあらはれて居たと思ふ。そればかりではない、私達の泊つて居るマテランの家の人を通じて、その事を私に尋ねて見やうとしたリモオジユ聯隊附の將校もあつたくらゐだ。その將校はマテランと知合の間であるとかで、バビロン道へ来て馬を停めた時に、マテランの家のものにその話をしたとのことであつた。

私は正宗君と一緒に并エンヌ河の岸へ歩き廻つて行つて、行先で戦時の秋らしい光景を見つけた。私達はボン・ナフよりも川下の方の橋の下まで岸づたひに歩いて行つて、水草の茂つたところへ出たことがあつた。そこに佛蘭西人の隠居が獨りで釣をして居た。私はその隠居の側へ行つて道を訊いて見た。するとその隠居は私達を珍らしさうに見ながら、

「いやこの道は通り抜けられません。しかし待給へよ、君等は日本人でせう。他の國の人なら決してとほしてあけることはならないんですが、君等が日本人なればこそ通してあける。そこは君、同盟側のよしみと言ふものぢやありませんか。」

と言つて、ズボンの隠袖の中にある鍵を私達に取り出して見せた。隠居は更に二本の釣竿をそこに置いたまゝ、私達に隨いて來いと言つて、水草の中のぬかつたところを先に立つて歩き出した。

「どうです、私は斯う見えても四十八歳ですよ。えゝ四十八歳サ、これで戦争が來年まで續かうものなら、私も來年は出なけりやなりませんよ。まあ今年だけは戦争に行かなくても濟んで居ますがね。」こんな心易い調子で話し、隠居は物の一町も私達を連れて歩いて行つた。ある垣根の木戸のところまで行くと、隠居は手にした鍵でその木戸を開けて呉れた。その時、私達はリモオジユの一方の町はづれにある靜かな道路へ出ることが出來た。

斯うした戦時らしい空氣の中で、時には私達はもつとすつと川下の方にある岸の林へ行つて、誰もこない草の上へ足を投げ出した。そこにはあをのけさまに寝そべることも出來る草の生えた緩慢な傾斜な地勢があつた。私はあの四時間も五時間も警察署の側に立ちつづけたやうな巴里の混亂から逃れて來たと言ふばかりでなく、佛蘭西の旅に來てからの初めての休息らしい休息をその井エンヌの河畔に見つけたやうに思つた。

## 七十四

やがて私は正宗君と一人でリモオジユの町はづれに暮して見ることも五十日あまりに成つた。マテランの家の裏にある畑には最早佛蘭西の青梨が枝から垂れ下るにも堪へないほどに熟して來た。すこし風でも吹いて梨の枝が揺れる日には、薄紅く色のついた新しい果實が音をさせて畠の中へ落ちた。あれほど煩かつた土地の子供等も何時の間にか私に馴染むやうに成つた。マテランの家の横手には耕作の手傳ひでもして暮すやうな夫婦が住んで居たが、その夫婦の子供までがまだ四つか五つかの年頃で私の名を呼ぶ事を覺えた。時には私は誰も人の見てないところでその子供を抱き上げて、マテランの家の裏手に伺つてある兎を見せに行つたり、畠に落ちて居る梨を拾つて呉れに連れて行つたりした。その小さな、髪の色も違へば瞳の色も違つた子供が自分の腕に抱かれて居るのを感じる時はかりは、

私も全くエトランゼエとしての身を忘れた。

私を友達扱ひにするやうな少年はマテランの家の附近にも少くはなかつた。朝晩の友達のやうなエドワアルは言ふ迄もなく、エドワアルの學校友達で、つい近くに住むシャンバニヨオルと言ふ家の少年などもその一人であつた。耳の長く背の低い、白い驢馬などを引出して来て私に見せるのもその少年であつた。あの驢馬は佛蘭西の少年の讀本にもよく出て来るやつて、子供の側に置いて見るに適はしい。それにあの驢馬の鳴き聲ほどおどけたやうに聞こえるものはない。私がパビロン道について井エシヌ河の方へ下りて行かうとすると、そこでも私は三四人の見知り越しな娘達に逢つた。一度私が繩飛びの仲間入をして繩を廻してやつた日から、その娘達は慣れて、

『日本人お遊びなさいな。』

と私を見掛ける度に聲を掛けた。

ある日も、私はその娘達の遊んで居るあたりを通り過ぎて、國の方へ書いた手紙を投函するためにもン・ナフの石橋の方へ歩いて行つた。ある家の門口に、食麵麩の片と乾酪とを手にして立つて居る子

供があつた。佛蘭西の子供がうまさうに食麵麩をかぢるさまは、あだかも國の方の子供が握飯でも頬張るのと少しの變りもない。國道の並木の見えるところまで歩いて行くと、例の橋畔の家の子供が飛んで来て私の手に取りすがつた。

私はその石橋の下まで降りて行つて見た。その邊は石の上で打つ砧の音のよく聞えるところであるが、岸には洗濯する女もあまり見えなくて、井エシヌの水が靜かに私の眼前を流れて居た。水邊に黄ばんだプラタアヌの立木の下あたりから河原の物干場へかけて、界限の子供が遊んで居るのが見えた。私もある子供を相手にして石投げをして遊ぶほどの心を持つことが出来た。私の拾つて見せた薄い滑らかな小石は水の面をかすめて河の中流の方へ渡つて行つた。夫を見た子供等は幾人となく私の側へ集つて来て、自分等にも水を切ることを教へよと言ひ出した。あるものは圓い小石を河原から見つけて私のところへ持つて来た。あるものは河の方へ向いて石を投げ試みた。そこにもこゝにも水を切つて遊ぼうといふものが出来た。その時私を左様した水邊の遊びが自分等の國の方の子供のすること、この土地の子供の知らないことかと思つた。

あまりに多勢の子供が揃つて石投げを始めたので、私も悪い事を教へたと気がつきながら——その邊は洗濯する女の集る場所であつたから——河原の砂を踏んでもと來た方へ引返へさうとすると、ふと私の側へ來て聲を掛ける少年があつた。

「すこし日本の方のことを私に聞かせて下さい。」

と少年が私の前に立つて言つた。見ると小學校の上の組の生徒か、あるひは斯の町にある簡易な商業學校の下の組の生徒かと思はれるほどの年頃だ。

「日本と佛蘭西とは何方が奇麗でせう。日本の方が佛蘭西よりはもつと奇麗でせうか。」

この少年の間には私も返事に困つた。

「そんなことは君、比べられないさ。君の國だつて奇麗なところもあり、左様でないところも有るでせう——日本だつてその通りでさ。」

「日本の海は奈何な色でせう——黄色でせうか。」

「どうして君、青色でさ——透きとほるやうな青色でさ——それは美しい海ですよ。」

と私が言つて見せると、少年はまだ見たことのない東洋の果の方を想像するかのやうに、

「あゝ透きとほるやうな青色か。」

と答へた。同じ國の方のことを訊くにしても海の色など尋ねる恫發さに、しばらく私はその少年の可憐な瞳に見入つて居た。

## 七十五

オート・井エンヌの秋は正宗君に取つても收穫の多い時であつたと思ふ。引續ぎく出來たやうな君の風景や静物の畫はマテランの家の二階の部屋の壁を一面に占領して居たぐらゐであつた。君の部屋の窓から見える町はづれの牧場もマテランのお婆さんが飽きるほど私達に勤めて呉れた島の青梨も、私達の友達であり案内者であつたやうなエドワアルが島の間に腰掛けた姿も、みな君の畫に入つた。あ



の山本君が考へ苦しんで思はしい製作も出来ずに居るやうな旅に比べると、正宗君はどしく畫筆を着けながら疑問を解いて行かうといふ風であつた。旅に来て私が懇意になつた畫家の中でも、山本君と正宗君とはそれほど氣質を異にして居た。東京の方にある蒲原君や野口君の噂をしたり、倫敦へ戦亂を避けて行つた高村君や山本君の話をしたり、時には夜遅くまで藝術上の談話に耽つたりして、田舎へ来てから私が唯一の親しい話相手であつたのも正宗君だ。二月半ばかり私達は田舎で暮した。斯の町へ巴里から避難して来た人達も大抵歸つて行つた。マルヌの大戦は概に敵軍の總退却に終つたし、青島陥落の報をも私達は斯の町に居て聞いた。最早田舎に居るも巴里に行くも私達が不自由に相違がないやうなことに成つて来た。こゝへ移つて来たシモネエやマアガレットが勤めて呉れるので、私も正宗君と一緒に巴里へ歸ることに決めた。

「私共の休暇ももう澤山で御座いますから。」

とシモネエがマアガレットを顧みて、伯母らしく手を揉みく言つた。

「そんなら私は一步先に出ます。こゝまで来た序にポルドオの方を廻つて見て來ます。あなた方は正

宗さんを連れて巴里の方へ歸つて下さい。」

と私はシモネエに話した。ポルドオまでは汽車で左程の時間も要らないと聞いたので、そこに私は大使館を訪ねて巴里の方の様子も尋ねて行きたいと思つた。

私達がリモオジュを去らうとした頃には、十一月中旬のはじめを迎へた。もう毎朝霜が来るやうに成つた。暖爐には薪を焚くやうに成つた。私は葡萄の熟するからやがてそれが酒に醸されるまで居て見た。斯の田舎で刺戟された心をもつて、もう一度あの巴里の空氣の中へ行かうと思つた。よく行つて草を藉いた牧場にも、赤い田舎風の屋根や建築物の重なり合つた對岸の町々にも、リモオジュ市全體を支配するやうなサン・テチエンヌの高い寺院の塔にも別れを告げて行かうと思つた。二度とこんな佛蘭西の田舎へ来て見る機會があらうと思はれなつた。

この田舎で私が旅の心を慰めたことの一つは種々な性質の子供と懇意に成つたことであつた。その中には、マテランの家の前を通る娘達が栗拾ひに行くと言つて私に聲を掛けるばかりでなく、林の方から拾つて來たのを私に分けて、

「日本人、栗をおさがり。」

と言つに呉れたものもあつた。私はあの可愛らしい娘達にも別れを告げて行かうと思つた。あの娘達とは年齢も違ふが、ボン・ナフの橋畔の家へ行つて私が腰掛ける度に側へ来てよく戯れた二三の女の子供もある。私は小さな菓子袋を十文がとこ奢つたのが始まりでその小娘達が橋畔の並木の下に落ちて居るブラタヌの葉を集めては私のところへ持つて来るほど慣れた。小娘の性質にもいろいろあつて、あるものは直に私の側へ來たし、あるものはなか／＼用心深くて私の側へ寄るのを氣味悪さうにしてゐるものもあつた。

「みんな好い兒ですね。丁度あなた方と同じ年ぐらゐな子供を小父さんも國の方に残して置いて來ましたよ。この小父さんはそんなに恐いものではありませんよ。」

と私が言つて見せたら終にはその小娘達は私に歌を聞かせるほど親しく成つた。『パトア』と稱へるリモオジュの方言で出來た俚語の一節をそれ等の邪氣ない子供の唇から聞いた時に、思はず私も涙が迫つた。いよくリモオジュを去る時が來て見ると、別れを告げて行きたい馴染の子供はあそこにもこゝ

にもと思ふほどあつた。

## 七十六

リモオジュの停車場まで私を送つて來て呉れた正宗君とエドワアルとに別れてからは、獨りの旅となつた。

初めて私がリモオジュへ入つた日に一行五人で土地の人達に圍繞かれた時のことを思ふと、今度はそれほど煩はしさもなく、改札口のところ立つ警戒の兵士に警察署で裏書して貰つて來た戦時の通行券を示したのみで事が足りた。私がこの町へ來た時は、丁度戦地へ出發する人々が送られたり負傷して來た兵士が迎へられたりするその混雜の中へ着いたのであつた。今は停車場の附近に群り集まる熱狂した男女を見ないといふばかりでなく、巴里の脅かされるやうな危険も過ぎ去つて、戦争の状況

が漸く持久的なものに變らうとすることを語つて居たかと思ふ。やがて私の乗つた汽車はリモオジュの町はづれを通り過ぎた。私は一語の別れの言葉も残さずに斯の町を立去るには忍びない氣がした。二月半の滞在は短かつたとは言へ、可成<sup>かたじけなく</sup>楽しい氣の置けない時をそこで送つて来た。歐羅巴へ来てから以來のことがしつくりと纏まつて考へられたのもそこであつた。井エンヌ河よ。さらば。汽車の窓からあの河も見えなくなる頃は、秋雨も歌んだ。

遠い異國のことは想像も及ばない、とある人からの手紙の中にも書いてあつた。もし斯うした場合に私はそれらの人達と旅を一緒にすることが出来たらばと思つた。ビスケエ灣も近しと聞く佛國の西部へ、葡萄を産する温暖な地方へ、その日あたりを想像しつゝ、行く時の心を互に語り合ふことが出来たらばと思つた。私の心はしきりに國の方の友達や知人の方へ行つて、一緒に斯の旅らしい心づかひを分かち、同室の客を眺め、思ふさま國の言葉を出して談したり笑つたりすることが出来たらばと思ひながら乗つて行つた。何程多様な光景が私達周圍には起りつゝあるだらう。何程多様な印象が日々の記憶から忘れ去られて行くだらう。もし夫等の人達と一緒に窓際に腰掛け、秋雨あがりの後の黄ばんだ雑木

林を眺め、白樺、樺、栗などの立木を數へることが出来たらばと思つた。その間から展げて見える丘の上には最早深い秋があたかも忍び足で過ぎ去りつつあるかのやうにも感じられた。時としては線路に添ふた石垣の上に野生の萩かとも見まがふ黄な灌木の葉が落ちこぼれて居て、自分等の國の方の東北の汽車旅、殊に白河あたりを思ひ出させた。その葉の色づいたのはアカシヤの若木であつた。枯木を満載した貨物列車が幾臺となく窓の外を擦違つて通つた。『軍用』とした貼紙を見て戦地の方へ送られる秣<sup>まき</sup>と知つた。兵士等の飲料に宛てられるらしい葡萄酒の大きな樽も續々貨物列車で運ばれて居た。

## 七十七

佛國中部の田舎を汽車で旅して見て一番眼につくものは牧場であつた。もし是が連があつての旅だと

すると、豫てミレエの畫などで御馴染になつて居た無数の牧場を車窓から眺めたばかりでも、種々な話かして見たいだらうと思つた。バルビゾンあたりのことは知らないが、あの田園畫家によつて描かれた羊飼や、編物をしながら牧場を歸つて行く田舎娘は可成恠しい感じがするではないか、其様な話が出るだらうと思つた。ずつと以前に私は國の方で、伊豆の天城を越して下田へ旅したことがある。あの時の連は、田山君、蒲原君、それから武林君であつた。彼様いふ連が欲しいと思つた。『どうです、蒲原君、こゝにもまた牧場があります、林檎がまだ枝に残つて居ます、あの木の下には黄色いのが澤山落ちて居ます、』さういふ話をして見たいと思つた。もしそれが出来たら、私はあの烏帽子ヶ嶽の山麓の方にある牧場の話などを持出したであらう。あの邊は、それは奥山で、山鳩の啼いて居るやうなところだ。あの邊の牧夫の生活と言へば炭焼か山番を思出させる。すくなくも私には羊や牛でも飼はうといふ場所はすつと寂しい奥山か、遠く人里を離れた谷間へ持つて行つて考へたいものであつた。ところが斯の佛蘭西の田舎へ来て見ると大分それが趣の異なつたものであつた。ここには牧夫といふ特別な生活を營むものも居ないのでないか。我國で麥島や野菜島に接して多くの桑島がある

やうに、こゝの牧場がある。牧場とは言つても、こゝでは田や島のやうなものである。ある意味から言へば、こゝの牧畜は我國の養蠶に似て居る。丁度我國の農夫が島へ行くやうな親しみをもつて、この人達は牧場へ通つて居る。さう考へると、秋雨あがりの日の映つた林の間にも、丘の傾斜にも、村落の附近にも、無数の牧場を眺めて行つた私は丁度桑島の多い上州や信州あたりの地方を旅するに似て居る。『見給へ、田山君、この邊の草は柔かだね、ワイルドな感じが少いね、』と牛羊を牧するに適した草地を窓の外に指して、一緒に旅らしい心地を語り合ふことが出来たらばと思つた。全く見知らぬ西洋人と三等室に膝を突合せて氣味悪くも思はない迄に、漸く私も旅慣れて來た。自分等の國のことにしても東北線は東北線、甲州線は甲州線で客の種類がおのづとあるやうに、驛々で昇つたり降りたりする人達も地方らしく思はれた。車中で朝飯をやる連中もあつた。食麵麩に乾酪を添へてむしやくやつて居た。慣れて見れば汽車中で握り飯に澤庵を添へて食ふと變りがない。中には靴の中から冷い炙肉を取出して食麵麩と一緒に嚙つて居る女もあつた。

## 七十八

オート・井エヌを離れ隣州のドルドオニユへ入つて、コキユといふ小さな停車場を通過した。線路の路切の傍に立つて信號旗を示して居るものは大抵婦人であつた。驚くばかり赤い眺望が私の眼に映じた。精しく言へばそこには何程の色彩があつたか知れない。唯全體を支配して居る調子のひどく變つて見えたのに驚かされた。農家の屋根の赤いのも美しく見えた。我國の草薺のかはりに、こゝのは素焼の赤瓦だ。栗の林も枯々として居て、齒朶の枯葉の赤ちやけたのが多く眼についた。赤土をならした耕地には淺々とした緑が流れて居たが、それは麥の芽かと思つた。

島は戦時らしく淋しかつた。私がリモオジユに居た頃に最早幾朝となく霜が來た。ところ／＼の耕地には手廻しの後れた人達と見え、鋤の道具を牛に引かせて仕事を急いで居る年寄の夫婦があり、短い袴を着けた女が獨りで島に出て土を掘りながら激しく働いて居るのを見かけた。麥の熟する八九月を

主なる收穫時とするこの土地にあつては野面のいそがしい時は疾くに過ぎたのだらう。働き盛りの農夫が戦地へ去つた爲であつたらう。それにしても島に人を見ることは極稀であつた。私は行く先／＼の牧場に放たれて居る十四、十五頭の赤牛や羊を數へて行つた。田舎の汽車旅らしいことは、ある停車場から一緒に乗合せた在郷の女衆を見ても左様思はれた。その人達は蓬けた茶色の髪を無造作に束ね、帽子も冠らず、日に焼けた手をして、村から召集されて行つた兵士達の噂を心配顔にして居た。さうかと思ふと、新聞で包んだ籠に鶏を忍ばせ、それを客車の中へ持込んだ女もあつた。私達の室では、鶏が鳴き出すといふ奇觀を呈した。その女は幾羽も翅繋ぎにしてあつたのを籠から掘み出し、自分の腰掛の下に捻込んで、黙つて居るといふ様子をした。西洋は西洋なりに、なか／＼えらい手合も居ると思つた。ある小さな停車場で汽車が停ると、めづらしく葡萄酒を窓の外へ賣りに來る女もあつた。それを茶碗に注いで客に勧めるなども、斯うした田舎でなければ見られない圖であつた。

ペリギユウで乗換へてからは、何となく西部の佛蘭西を指して旅する心持が浮んで來た。ボルドオ行の三四の婦人とも乗合せた。その中でも五つばかりになる女の兒を連れて居た婦人が其娘を膝にのせ

私に腰掛ける席をつくつて呉れたが、その言葉づかひを聴き面ざしを見るにつけて、西方の歐羅巴的な心持が浮で来た。室には乗客も多くなり、召集されて行くらしい兵士も多数乗込んだ。中には葡萄酒に酔つて大聲で歌つたり喋舌つたりする兵士もあつた。戦時となれば斯ういふ狼籍も寧ろ可傷られ、時には喝采された。列車の片側の廊下のやうに造つてあるところへ出て、時々私は窓の際に立つた。奈何してその邊の田舎には斯う人家が少いだらうと思ふ程、岡の上に立つ百姓家などがほつん／＼としか眼に入らなかつた。私はあのピサロオの描いたやうな田園の光景を何程窓の外に見つけていつたか知れない。しかしその邊は歩いて通つて見たら随分退屈するだらうと思つた。佛蘭西の田舎を描いた畫家も多くある中で、あのピサロオの畫にはその特色が實に好くあらはれて居ることに想ひ到つた。次第に平地が多くなつて来た。ポブイエーといふ小さな停車場を通る頃には、枯々とした葡萄島を見た。ポルドオも近くなつて来た、と傍に友達でも居たら言ひ合つたことだらう。地味も變り、人家も多くなり、青々とした野菜畑すら見えるやうに成つて来た。ジロンド州へ近づくとつれて、村々の感じも違つて来た。ポブリエの並木の續いた長い平坦な街道の兩側にあるものは、一面の葡萄島と野菜

島とであつた。葡萄島にはまだ落ちない葉を見るやうにすら成つた。

暗くなつてガロンヌ河を渡つた。平時は左程も要らないといふ路程に十一時間も要つた。汽車の窓々を通して暗い空に無数の燈火を望んだ。そこがポルドオであつた。

## 七十九

是程楽しみにしてやつて来れば、それだけでも澤山だつたと言はねば成らない。私には西方佛蘭西を想像して来た楽しみがあり、そこまで動いたといふ楽しみがあつた——ポルドオで私を待つて居て呉れたものは二日とも降り續いた雨ではあつたが。

ポルドオのサン、ジャン停車場前の旅館ではせめて一回の通信を國の方へ送りたいと思つた。何だかリモオジュあたりから見れば日もいくらか長いやうで、陽氣も餘程暖かで、同じ十一月の雨でも明るい

やうな気がした。何がなしに私は國の方へ旅の便りをしたいと思ふ心が動いて、旅館の一室で紙を展  
けて見たり、部屋の内をあらと歩いて見たりした。やゝ單調ではあつたが汽車の窓から望ん  
で来たポルドオ附近の平野がまだ私の眼にあつた。畠に栽培する葡萄は棚といふものなしに、桑畠の  
桑の若木ほどに幹丈も低く造つてあつて、それが見渡すかぎりあの平野に連続した感じのめづらし  
かつたことなども書きつけたかつた。斯のポルドオの旅館に来て獨りて雨を聴いて居る心持も書きつけ  
たかつた。高く吊した部屋の電燈は物書くには暗く、食堂には人が話し込んで居て、ついその出来  
なかつたのは残念であつた。戸川君から以前聞いた話に、西洋の旅館は寝るだけだと言はれたことが  
あつたが、来て見ればほんとに寝るだけだ。茶や梅干を運んで来るではなし、着物を疊んで呉れるで  
はなし、中位の家には浴場の設備もない。一風呂入つて来て宿屋の襦袢で夕飯の膳に向ふやうな、室  
内的な趣味には乏しい。さういふところは實に簡單だ。殺風景に思はれるほどだ。しかし斯様な停車  
場前の旅館らしい家でも、大きな嚴重な意匠を施した木製の寢臺が部屋の真中に置いてあつて、ぶく  
／＼とした毛蒲團などが暖かさうに掛けてある。敷布から小枕に掛ける布までが清潔にしてある。『な

んにもお構ひは致しません、そのかはり寢道具だけは吟味してあります、こゝでゆつくり休んで行  
つて下さい。』とその寢臺が私に向つて言ふやうに見える。大味と言へば大味だが、そこに歐羅巴風な  
生活の本質の一端が感じられないでもない。枕頭の壁の上には小さな海の畫が掛つて居た。それは模  
寫か何かであつた。殺風景な部屋の内にあつて其様なつまらない額が光つて見えて、海に近く来た旅  
の心さへ浮んだのは不思議であつた。

巴里の様子も心に掛り、蕭々降る微雨の中を電車で大使館の方へ行かうとして、途中戦時らしい光景  
を目撃した。新に戦地の方へ出發しやうとする歩兵の群が列をつくつてポルドオの町を通つた。古い  
市場の前あたりは男女の見送り人で満たされて居た。灰色が、つた青地の新服を着けた兵士等の胸に  
は黄や白の菊の花が挿され、銃の筒先にまであの花が翳されたのを見た。夫や兄弟や、あるひは情人  
を送らうとして、熱狂した婦人がその列に加はり、中には男の腕を擁して搔き口説きつゝ行くもの、  
あるなども反つてその光景を悲壯にした。

## 八十

佛蘭西政府と一緒に引移つて来た人達、アカデミーの連中、其他多數の避難者で、ボルドオは賑ふ時であつた。葡萄酒の産地であり商業の町であるといふ斯の土地に似た古風な港町が何處か自分の國の方にもありそうで、一寸思ひ出せなかつた。灘とか堺とかに比べるのも果して奈何あらうかと思つた。取りあへずバアヴ・デ・シャルトロンに大使館を訪ね、巴里の方の様子を聞き、正宗君から頼まれて来た用事をも果し、一月半程前から爲替も組まれるやうに成つた事を知つた。なにしろリモオジュあたり引籠つて居ては一向に巴里の様子も分らなかつたが、大使館附の武官もそこに居合せて、獨逸軍の一部はまだ巴里から四五十里位の距離に留つて居るものゝ、周圍の形勢から考へて巴里の危険なやうなことは萬々有るまいとの話であつた。大使館も寂しさうに見えたが石井大使はじめ、夫人、令嬢などの無事な顔を見ることが出来てうれしかつた。

「巴里を出る時はなか／＼えらかつたがね、こつちへ来てからはそれほど用も無しさ——まあ君、斯いふ時には本でも讀むんだね。」

石井大使は斯うした調子の心易い人だ。私は菊池君にも逢ひたかつたが、丁度君は胃をいためて引籠つて居る時とかで、君を大使館に見ることの出来ないのは残念であつた。

通りすがりの旅客を除いては、ボルドオに避難した日本人は極稀のやうであつた。私の聞いたところでは日本銀行から来て居る青木君一人ぐらゐるものであつた。名高い牡蠣の養殖法を調べに來た水産講習所の妹尾君といふ人が居る筈だと思つて尋ねたら、同君も既に斯の町を去つた後であつた。

雨は降つたり止んだりして居た。美術館も閉されて居る時であつたが、特に頼めば番人が案内して呉れて、近代の繪畫と彫刻の部だけを見ることが出来た。斯うした港町にも兎に角相應な美術館があつて、藝術が土地の飾りとなり、葡萄酒問屋の亭主等までそれを尊重するといふ氣風は羨やましいと思つた。館内所藏の繪畫が町の寄附でなければ個人の寄附であることにも心を引かれた。訪ねるものも少い美術館の一隅に年若な婦人が一人腰掛けて「諾威の十月の夕」と題した濱邊の畫の模寫をしきりと



やつて居た。試みに斯の館内でどれを代表の作に押すかと尋ねて見たら、その婦人はコロオの『ダイアナの浴み』こそ自分はこゝでの傑作と信じるが、マアセル・バセエの描いた劇詩人リシュバンの肖像も評判のものであると私に語つた。西班牙の空も遠くないと聞く斯のボルドオまで来て私の好きなゴラスケスを見る事が出来たらばと思つたが、そんな願ひは別としても、カリエールの肖像畫やロダンの彫刻の前に立つた事は出来た。中でも私は四枚許りあつたドラクロアの作の前に一番長く時を送つた。同じ歐羅巴にある藝術にも東洋人としての私は入り易いものと入り難いものがある。ドラクロアの藝術の如きはその入り難いものゝ一つであると思ふ。それにしても、あのセザンヌなどが求めて行つた足跡を辿つて見やうとするものにと取つてドラクロアを閑却することは出来まい。そんなことをいろいろと胸に浮べながら、やがて復た秋雨の降る町へ出た。

サン・タンドレは美術館に近く古いゴチック風の塔の見える寺院であつた。そこへも行つて私は暫時腰掛けた。リモオジュのサン・テチエンヌ寺を見た眼には内部の建築に於てもひどく見劣りがした。中世の形見に残つた塔も戦時に有用な機關となり、そこに無線電信の假設備らしいものが可成大仕掛

にしてあつたといふ以外に、特にその古い寺院に就いて思ひついたこともなかつた。丁度私がそこを出ようとする頃は大雨りであつた。雨を避けて寺院へ馳込んだ親子三人連の婦人があつた。さすが頼も豊かに西方の佛蘭西婦人の感じがあつた。その血色は多感で、快活であつた。

雨の中をジャルダン・ビュブリックへと訪ねて行つて見ると、白鳥の靜かに浮ぶ古池の畔には黄ばんだ柳の葉がまだ深い秋を語り、枇杷の葉に似たマグノリアの濃い緑も生々として居た。そこにも西方の空をしのばせるものがあつた。

## 八十一

荷船何十艘、帆柱何十本、河口の雨と空氣と煙との中に大船の碇泊する光景を前にして、暫時私はイ十八世河岸の一珈琲店に居た。ボルドオを去る日の午後、例によつて警察の届を済まし、もう一度

大使館を訪ね晩の九時には巴里の汽車に乗る積りであつたが、ガロンヌ河の見えるところでしばらく時を送つて行かうと思つた。

葡萄酒の樽などの幾つとなく並んだ物揚場の多い河岸通であつた。右にはバスチイドの石橋が見へ、對岸には同じ名の古い寺院の塔も見えた。水による交通の便も多いと見え、青く塗つた汽船の煙筒、白い黒い帆柱、帆綱、風にひるがへる旗、そのごちやくとした河口には何程の物があると數へ盡すことも出来なかつた。眼前を動いて行く小舟もあつた。濡れた三色旗を立て、荷船を引いて行く汽船もあつた。大した降りでもなかつたから、私は外套のまゝ、珈琲店の外に出してある椅子に腰掛け、雨に濁つたガロンヌ河の水を眺めて居た。ボルドオでは毎年十一月あたりを霖雨の季節とするやうに。丁度私はその季節に來合せたのであつた。雨量の多い日本のやうな國柄から來たものに取つて、何程この雨は懐かしいか知れない。假令私は海まで行かず、名高いボルドオの牡蠣の床も見ず、海岸の腐蝕を防ぐ爲に植えてあるといふ赤松の林を見ず仕舞に歸つても、東京の隅田川にも比べて見たいガロンヌ河を前にして寂しい雨を聽いて行くといふだけで満足した。

つか／＼と私の傍へ來て握手を求める男があつた。見れば大分上機嫌のやうだ。

「君は日本人でせう。」

とその男が言ふから、左様だと私が答へたら、先方は酒氣の廻つた覺束ないほどの語氣で、

「佛蘭西の一労働者が寄せる厚意を受けて呉れますか。」

さう言ひながら私の手を握つて置いて、またよろ／＼と雨の降る中を歩いて行つた。凡そ一時間許りも私はその河岸に居た。時とすると雨が揚がつて、對岸に見える工場の赤屋根には薄く日が映つた。ちぎれた雲の間を通して日本の方で望むやうな青い空の色を見つけることもあつた。

私の泊つた停車場前の旅館は殺風景ではあつたが、極氣の置けない家であつた。珈琲店を兼ねたその食堂はいそ／＼と立働くおかみさん、亭主が戰場の方へ行つてしまつてから若いおかみさんだけでは重しの利かないやらな給仕、物食ふ田舎風の客、召集されて行くらしい兵士、時々顔を見せる地廻り風な男、それからそこへ來て酒飯む人達の中心となつて唇る氣取つた娘——一人として私に戦時の旅らしい思ひをさせない人は居なかつた。

ポルドオの旅のスーヴニールとしては、大きな柘榴を二つほど手に入れた。それは西班牙から来たものであつた。實際西班牙の柘榴の見事で、甘かつたことは、あのセルヴァンテスやエラスケスの生れたといふ國の方のことまで附添へて自分の子供等に語り聞かせたらばと思ふ程であつた。その外皮には石のやうな頑固な力があり、古い茶器のやうな光澤があり、内部には紅い寶石にも勝る美しさがあつた。あまり氣に入つたから二つまで食つてしまふのは惜しく思つて、一つはポルドオに居る間自分の部屋の枕許に置いて見た。柘榴に添寝も旅らしかつた。西の歐羅巴の空に生立つ樹木の生命の結晶かとも言ひたい驚くばかりの大きな柘榴。

十一月十六日の晩に私は夜汽車で巴里へ向つた。

## 八十二

再び巴里を見るのは何時のことかと思つて出て来たあの都の方へ、もう一度歸つて行く自分の心持は可成樂みでもあつた。獨逸軍の飛行機がしばしば飛んで來る頃には巴里人も随分瘦我慢を言つたが、奈何いふ冷い風があの都を吹廻して居るだらう、今度歸つて見たら幾人の同胞に逢へることだらう、と思ひやつた。夜行列車にはポルドオの町の人らしい父親に連れられてある専門學校へ入りに行くといふ兄弟の二青年と乗合せ、車中の無聊を慰めた。私と差向ひに腰掛けて居た青年はしきりに國の方のことを聞きたがつて、私の住居は日本の何處にあるかといふことなどを尋ねた。

## 『東京?』

とそのポルドオ生れの青年は眼ををしゃやかして、地理書で讀んだ日本の都の名が私の口から出た丈でもめづらしいといふ様子をされた。その青年は更に斯様なことを言出した。何處の土地にもその土地のものには特別な呼び方がある。例へばポルドオの人はポルドオレエ、リオンの人はリオンネエ、リモオジュの人はリムウザンと呼ぶやうに。それと同じやうな意味で東京の人は何と呼ぶかと私に尋ねた。

『東京ツ子といふ言葉がありますよ。その中でも純粹な町の人達のことは、江戸ツ子と呼んで居ます』

『よ』

と私が話し聞かせたら、青年は江戸ッ子といふ言葉を一つ覺えたといふ風に喜んで、佛蘭西人らしい發音の仕方です。『江戸ッ子、江戸ッ子、』とめづらしさうに繰返した。

『なんですか、君もその江戸ッ子ですか。』とまた青年が私の顔を見て言出した。

『どうしまして。私は子供の時分から東京に住みましたが、江戸ッ子ではありません。私は山國の方の生れのです。』

斯う私が答へると、青年の傍に腰掛けて居た佛蘭西人は父親らしい調子で自分の子息に向つて、

『え、あちらは何處の生れだと仰る。』

『山國の人ですとさ。』

この子息の答を聞いて、父親は私の方を見ながら點頭して居た。

窓の外は暗かつた。車中のもものは皆疲れて來た。眠らうとしたが碌々眠られなかつた。

やがて汽車の中で夜が明けかゝつた。時々私は窓際へ行つて見た。黒い大きなものゝ影は、あれは『葉

ニヨ』だ、麥島があるのだ、と見て行くうちに、暗くてよく分らなかつた遠い雲の端が紅く光つて來たのを望んだ。あそこに杜がある、こゝに牧場がある、と言ふことが出来るやうに成つた。野は僅かに眠りから覺めかけたばかりで、岡の立木も半ば夢を見て居た。何もかもまだ朝の床の上にあつて、眼を覺ましたまゝ、休息の姿勢で居るかのやうに靜かであつた。

夜は次第に私からも離れて行つた。そこいらが白々と明けて行くにつれて、何となく自分の心持もはつきりとして來た。日の出だ、と汽車の窓から望んで見ると、地平線の彼方には朝靄が深く立籠て居て、その間から太陽が紅く見え始めた。寢不足で身體はぞくぞくして居た時だから、まだそれほど輝かない朝日を眞面に見て行くといふことも嬉しく、眼を放さずに居ることも出來た。次第に圓い全體の輪廓が顯れて來た。あだかも遠く銅盤を懸けたかのやうに成つた。車室の隅に疲れて黒い毛皮の外套にくるまつて居た婦人まで立つて美しい日の出を望んだ。調子を破つた音樂のやうな飛躍が感じらるゝと共に、太陽は一氣に地平線を離れて行つた。私はもつとよく見ようと思つた。私の眼は痛くなるほど太陽を追つた。何といふ眩暈しい光彩と、さかんな精力と、野蠻な舞踏とが私の凝視を拒んだ

らう。終にはどうしても眼を放さずに居られなくなつた。車中の人々はいづれも争つて窓を開け、射し入る日光に接したり、清い空気を吸はうとしたりした。

朝になつて反つて氣の緩んだ人達は互にいくらかでも寢て行かうとした。私も一眠りして、眼を覺ますと、その度に巴里が近くなつて來たことを感じた。朝らしい空もその度に光つて來て、高く低く浮ぶ雲の群まで色彩をかへて居た。窓の外の近くには白々とした霜を見た。それをところ／＼の人家の屋根に見て行つた。

巴里の近郊は概して平坦な地勢だ。二層或は三層の建築物から出來た小さな町が幾つとなく散在して居た。心持の好い朝で、何を眺めても眼が覺めるやうであつた。前の年の五月マルセエユから乗つて來た時にも左様氣づいたが、禽鳥の類の少いのは物足りない氣がした。どうして斯の邊には斯様に鳥が居ないのだらうと思ふ程だ。ほんとに小鳥一羽啼かなかつた。斯うした心持の好い朝に、早起きの百舌の一羽も飛出して呉れたら、日本の十一月のやうな氣もするだらうに、とさう思つた。近郊からだん／＼巴里の城塞の方へ近づいた。建築物の趣なども何となく變つて來た。リモオジ

ユあたりで見て來た鄙びたものが堅牢な意匠となり、二層三層の高さが五層にも六層にもなり、城廓のやうに聳えた建築物と建築物との間には積重ねた煉瓦の断面のあらはれたのが高く望まれるやうに成つた。朝の八時頃に、私は二月半振りで巴里に入つた。

## 八十三

ドルセエ河岸の停車場前に客を待つて居た辻馬車の馬丁が私の方へ馬を引いて來た。私はボルドオの方から汽車でその停車場に着いたばかりの時で、自分の兩手には旅の荷物を提げて居た。

『天文臺前まで。』

と馬丁に聲をかけて置いて、荷物と一緒にその馬車に乗つた。晴雨兼帯とも言ひたい黒光りのする革の高帽子を冠つた馬丁の顔を見ただけでも、二月半振りで巴里の地を踏み得たといふ心地がした。ま

だ朝の八時頃のこと、石の街路を踏んで行く馬の蹄の音と共に、辻馬車らしい鈴の音が聞えて来た。私は車の上で、冷い街路に響くその鈴の音を聞きながら、右を眺め左を眺めして乗つて行つた。佛蘭西中部の田舎から西のポルドオを旅して来た私の眼には、町々は早全くの冬景色であつた。並木も枯々として居た。私は思つたよりも寂寞とした巴里に來たことを感じた。

巴里に入つたのは、それが二度目の時だ。天文臺の方角を指して馬車が動いて行けば行くほど、車上の私は親しみのある町の方へ入つて行つた。もう古いサン・ゼルマンの通りへ來た、もうオデオンの劇場の附近へ來た、と獨りで言ふことが出來た。やがて馬車がルエキサンブル公園の側を通りぬけて、天文臺前の廣場へ出た頃、私は車の上から馬丁に聲を掛けた。そこを左へ曲つたところが私の下宿のあるポオル・ロワイアルの町だ。私が兩手に提げられるだけの荷物を提げて開戦當時の巴里の混亂を田舎へと避けたのはその町からであつたが、あの時の不安な心持から言へば、もう一度自分の下宿を見得る日のあるか奈何かも覺束ないくらゐであつた。八月の末から十一月の半ばまでを田舎で暮し、マルヌの大戦もリモオジュの方で聞いた後で、馴染の深い産科病院の建築物の見える町へ歸つて

來た。

馬丁は並木の枯枝の下あたりで馬を停めて、私の荷物を下宿の方へ運び入れて呉れた。入口の階段を上つたところに住む家番のおかみさんは私を見ると部屋から飛んで出て來た。籠城同様の思ひをしてずつと巴里に居た人達の心はおかみさんの顔にもよく讀まれた。私はそこに無事を祝した。郵便物の廻送で毎々面倒を見て呉れた禮をも述べた。聞けば召集されて行つた亭主も無事、留守居する子供も無事だとのことであつた。

變らずにある自分の下宿を見るのも嬉しかつた。主婦のシモネエや、その姪にあたるマアガレットは私より一日後れてリモオジュを立ち、私より一日早く巴里に着いて居た。シモネエの話で、あのリモオジュのバビロン道を引揚げて來た一行の中には、正宗君の外に、少年のエドワアルも一緒であつたことを知つた。取りあへず私は自分の部屋へ行つて見た。二月半ばかり留守にした間に、えらい塵埃で、そこいらにある物は下手に觸られない程であつた。置捨てる思ひで残して行つた書籍や荷物などはその中で私を迎へるやうに見えた。部屋の窓へも行つて見た。暗い巴里の冬が最早並木街へやつて

来て居た。往來の人も稀であつた。向ふの産科病院の古い建築物、町角の珈琲店、それから神戸君や河上君がしばらく泊つて居た旅館の窓、何もかも眼に浸みだした。

隣室もひっそりとして居た。控訴院附の少壯な辯護士ですつと以前からその部屋を借りて住んで居た佛蘭西人は戦争になつてから召集されて行つたぎり宿の主婦のところへ音も沙汰も無いとのことであつた。ノルマンデーあたりの生れの人にも見るやうな佛蘭西人で、背も南方の人よりは隆く、好ましい人物であつたが、あの辯護士も奈何したらう。召集されて行つて行方の知れなくなつてしまつた人は何程あるか知れないといふことを聞く。隣室を寢泊するだけに充て、居たあの佛蘭西人は、降つても照つても毎朝事務所の方へ通ひ、夜になると廊下を踏む靴音をさせては歸つて来たことを私は忘れずに居る。主婦も姪もまだ前の日に歸つて来たばかりの時、私の下宿では引越の日のやうな騒ぎをして居たが、その混雑の中で私は隣の空虚な部屋をも覗いて見た。凄惨な戦争の記事を読むにも勝る恐るべき冷たさがそこにあつた。その冷たさが壁一重隔てた自分の部屋の極く近くにあつた。辯護士の残して置いて行つた蔵書や古い雑誌の類がそつくり其儘になつて居て、半分ほど開いた窓から薄

日の射し込んで来て居るのを見るのもさびしかつた。

主婦の姪は胸から膝の下まである綿の前掛を掛けたまゝ、私の留守中に國から届いた新聞や雑誌や小包を食堂の方から運んで来て呉れた。

『大變な塵埃ほこりぢやありませんか。』

と私が自分の部屋を見廻して言ふと、マアガレットも恐ろしいものでも見るやうに手を振つて、

『これでも叔母さんと二人で昨日は一日掃除に掛つて居たんですよ。漸くこれまでにしたところですよ。ほんとに、何といふ塵埃ほこりでせう。』

と言つて部屋の扉を閉めて行つた。國から届いたものの中には、八月の初あたりに着く筈の新聞雑誌や、ある人々から送られた小包が長い日数をかけて、よくそれでも失はれずに自分の留守に届いて居たと思ふものもあつた。

午後正宗君が訪ねて来た。シモネエ等と一緒に巴里へ入つた正宗君は、もう私も歸つて居る頃だらうと言つて、下宿まで見に来て呉れたのであつた。私達二人がこのポオル・ロワイアルの町でもう一

度顔を合せることの出来たといふのも嬉しかった。早速私は正宗君から頼まれて居た用事をボルドオの大使館の方で果して来たことを言出した。この正宗君の話で、リモオジユからリオンへ分れて行つた柚木君や足立君が既に巴里に歸つて居ることも分つた。藤田君のやうに、すつと巴里に残つて居た美術家のあつたことも分つた。

「どうです。出やうぢやありませんか。一緒に町を見に行かうぢやありませんか。」

私は正宗君を誘つて下宿を出た。そこいらの町々が奈様な風になつて居るかを知らなかつた。日頃よく煙草を買ひに行く店が町角にあつたから、取りあへず寄つて見た。その亭主は片脚失ふほどの負傷をして戦地の病院の方に居るとのことであつた。煙草屋のおかみさんは棚の上にある黄や赤の紙の袋に入つた佛蘭西の巻煙草を私達の前に取出しながら、その話をした。

私達はサン・ミツシエルの通りまで行つて、例の『シモンヌの家』へ寄つて見た。その家族に起つた變化も私達を驚かした。シモンヌの父親は白耳義方面の戦場へ向つたぎり行方不明であつた。

「さあ、捕虜にでも成つたものかと思ひますよ。いくら手紙を出して見ましても、さつぱり吾家へは

便りがありません。」

そこのおかみさんは珈琲店の帳場のところに立つて、兩腕を胸のあたりに組合せながらその話をした。シモンヌも變らずに居て、私達を見ると親しげな握手を求めに來た。この娘も父親の身上をひどく案じ顔であつた。私達は挨拶のしやうもなくその小さな珈琲店を出た。

非常な恐怖が過ぎて行つたやうな寂しさは町々を支配して居た。私は正宗君と連立つて長いサン・ミツシエルの通りをセエヌ河の方へと歩いて行つて見た。外國人といふ外國人は去つてしまひ、多くの市民も避難し、ほんとに僅かの老人と婦人とだけがあの通りを歩いて居た。

「こんなに巴里が寂しくなつて居やうとは思ひませんでしたね。」

思はず私はそれを正宗君に言つて、日頃人通りの多かつた並木街の跡を眺めく歩いた。私は數へるほどの人にしか行き逢はなかつた。

「リオンの連中が歸つて來た時は、これよりもつと寂しかつたさうですよ。」



シャトレエの廣小路まで行つて見た。そこまで行くと、いくらか巴里らしい人の往來が見られた。私達はセエヌの河岸についてサン・ルイの中の島へと橋を渡り、そこから古いノートル・ダムの寺院の裏手が望まれるところへ出た。冷い石の建築物、黒い冬の木、それらは巴里へ来て見る冬らしい感じであつた。石垣の下の方に並んで釣をして居る黒い人の影も寒さうであつた。セエヌも寂しさうに流れてゐた。

## 八十四

今は自分等が巴里にある極僅かの日本人の中の二人が、そんなことを思ひながら正宗君に別れて、私は下宿する町の方へ引返して行つた。まだ私はボルドオの方から着いたまゝの旅の服装で町を出歩いて居た。荷物も部屋に置いたまゝにしてあつた。その旅の中での旅らしい心持で下宿の入口の前まで

戻つて、壁に添ふた階段を昇りかけると、幾層かあるアバルトマンの上の方から螺旋狀の欄をつたつて降りて来る個々の佛蘭西人に逢つた。同じ建築物の内の屋根裏にでも住んで居るらしい人で、撞木杖を力に跛をひきくその階段を昇つたり降りたりするところを私もよく見かけたことはあるが、いぞ先方から聲を掛けられたこともなく、私の方で挨拶したためしもなかつた。その佛蘭西人が私を見ると、降りかけた階段の途中で撞木杖を脇に挟んで、

『ムツシユウ。』

とめづらしく挨拶して通つた。おそらくその不具な人も、家番のおかみさん達と同じやうに籠城同様の思ひをしてずつと巴里に残つて居た仲間であつたらう。私のやうなエトランゼエが斯の町に歸つて來たのを見るさへ心強くめづらしく思つたのであらう。

下宿の廊下から裏側に見えるクウル（内庭）も何となくひつそりとして居た。そこにも避難した人達が多いと見え、閉まつて居る窓の方が多かつた。

その日の夕飯前に私は食堂の方へ行つて見た。私の部屋で望めない天文臺の一部がその食堂からは望

むことが出来て、もしこれが平和な時ならあの圓い行燈のやうな石塔につく燈火も私を迎へて呉れるやうに見えたらう。初めて私が巴里に着いてシモネエに宿をとつた晩から、異郷の旅らしい感じを與へられたのも、あの塔の燈火だつた。食堂の窓々には厚ほつたい窓掛の布が暮のやうに引いてあつて、そこから何も望めなかつたのは、それだけでも戦時らしい怪しい氣がした。

「隣の部屋の前士も奈何しましたらう。」

「ドロオメエさんですか。今日は戦地へ手紙を出して見ました。今迄に私のところへ便りが無いから、多分あの人も戦死したのかも知れません。可哀さうに。」

「もし左様だと、惜しい人ですなあ。」

私は隣室の佛蘭西人のことで、シモネエとこんな言葉をかはして居た。シモネエは白い敷布を取出して食卓の用意をしながらその話をした。マアガレットも臺所と食堂の間を往いたり來たりして居た。その時、私は町で見て來たことを宿の人達に話さうと思つて、

「さう言へば、この下に私のよく煙草を買ひに行く店があります。その主人は戦地で負傷して、片

脚失くしてしまつたそうです。私はサン・ミッシェルの通りの小さな珈琲店へも寄つて來ました。そこも正宗さんや私のよく行く店です。どうでせう、その主人は白耳義方面へ向つたきり行方不明だそうです。」

「これが戦争でございますよ。」

さう言つてシモネエは両手をひろげて見せた。丁度そこへマアガレットも臺所の方から來て斯の話を聞きながら皿を拭いて居た。

「ほんとに、これが戦争でございます。」

とマアガレットも伯母の言葉に調子を合せて、戦地の方に働いて居るといふ彼女の兄や婚約のある人の身の上を氣遣ひ顔であつた。

下宿する客でその食卓に就くものは私一人ぎりだつた。食堂の出入り口の上には、東京の有島君が残して置いて行つたといふ油絵の額の變らずにあるのが私の眼についた。私はその靜物畫に斜に對ひながら腰掛けて、シモネエやマアガレットの勤めて呉れた熱いスープにありついた。

朝になつて見ると、ポルドオあたりよりは陽氣もずつと寒かつた。普佛戦争のあつた年の夏は非常に暑くて其年の冬はまた非常な寒さであつたから皆難義した、と宿の主人から以前に聞かされた言葉は耳について居た。私は開戦の當時に河田君等と共に羅旬區方面の在留者の委員として一週に一二度つゝ大使館へ通つた頃の暑さを思出して、おそらくそれに比例する寒さを待受けねばなるまいかと思つた。巴里の冬の表象のやうな紅くてしかも輝かない太陽がもう朝靄の間に望まれた。でも、日の光が次第に私の部屋へ射し入つて、壁にまであたつて来た時は嬉しかつた。私は窓から冬の町を眺め眺め半日荷物を片付けて暮した。國から持つて来た和服の袖の綻びたのまでが、最早一年半ばかりになる自分の旅を語つて居た。

ふと私は頭の上の方で聞き覚えのあるピアノの音を聞きつけた。階上に住む師範學校の教師の娘達が復た曲のおさらひを始めて居るのだ。一年半の月日が経つうちには、床を歩き廻る小娘達の靴音などがなんとなく違つて来た。それにしてもあの教師の家族達は矢張夜番のおかみさんなどと同じやうに巴里に居残つて、恐ろしい思ひをして来たのだらうか。私は直ぐにそれを思つて見た。その思ひ做し

のせいかして、娘達の指先から流れて来るやうな幽かなメロデーは、丁度あの僞僞の佛蘭西人の挨拶と同じやうに、この旅の身を迎へて呉れやうにも聞えた。

塵埃、塵埃で、私の手は土でもいぢつたやうに荒れた。私は部屋を片付けたり荷物の仕末をしたりした後のからだを洗ひに町まで行つて来た。入浴のついでに、リラへも寄つて来たが、あの珈琲店にすら人は少なかつた。

第二の旅の季節が何となく私にやつて来たのも、リモオジユの田舎へ出掛けた頃からであつた。私はあの耕作と牧畜との地たるオート・并エンヌで刺激された心をもつて、もう一度巴里生活を試みるつもりで歸つて来た。ファルギエールの畫室の方にすつと一人で残つて居たと云ふ藤田君に逢つて聞いたところによると、一時はこの都も獨逸軍の包圍を覺悟し避難者のためにあらゆる汽車を開放したとか。麵麩などは誰にもたゞで呉れたと云ふ。多くの市民は乗るものもなく、皆徒歩で立退いたとも聞いた。それらの人達が夜の街路に續いて、明方まで絶えなかつたとも聞いた。

## 八十五

リモオジュの旅行から歸ると、取りあへず私は國の方の友達へも無事で居ることを知らせたいと思ひ、英吉利の方へ戦争を避けて行つて居る河田君等にも巴里の様子を書きたいと思つた。ボルドオの方を廻つて見て来た佛蘭西部の明るい空はまだ私の眼にあつた、やゝ單調ではあつたがガロンヌ河流域の一帶の平野、見渡すかぎり連続した葡萄島、それ等のものを汽車の窓から望んで行つた私はあのボルドオのサン・ジャン停車場前の旅館の二階で、しと／＼降る秋雨の音を聞きながら、せめて一回の通信を國の方の新聞紙宛に送りたいと思つて、ついそれも出来ずじまひに引返して来てしまつた。あの心持を私は巴里まで持續けて来て居て、自分の部屋の机の上でそれも果したいと思つた。部屋ではもう暖爐を焚いた。私がリモオジュを發つて来る頃にはあの田舎も毎朝の霜で、バピロン道のマテランの家でも暖爐に太い薪を焚いた。それがまた、いかにも田舎らしいと思つて見て来た。あ

の田舎家の二階へ薪を抱へて暖爐を焚きに来て呉れたマアガレットは、巴里へ移つてからも石炭や炭團の入つたバケツを私の部屋へ提げて来て呉れる。つましく暮す巴里の家庭で龜の子形の小さな炭團を使用しないところはないが、その積重ねたのが自分の部屋の暖爐にも赤々と燃えて居るのを見ると、復たこれを焚く季節が来たかと思はれる。

多くの旅行者を見るに、外國を旅行するほどの同胞はいづれもよく動いて居た。私のやうに下宿も取りかへずに、すつと一つところに留つて居るものは極少なかつた。これも私としてはいくらか他の人達と旅の仕方の違ふところから来て居たし、心易い語學の教師の家に近く住んで佛語の稽古を勤みたいと思ふところからも来て居た。唯、私の願ひは自分の國を旅行すると同じ心でありたかつた。外國を旅するといふ特別な心は持ちたくなかつた。偶然にも戦争の與へて呉れた機會に、巴里から逃れるやうにしてリモオジュの旅に出掛けて行つて見ると、あのオート・并エンヌの田舎では實に些細な事が私の心を慰めた。私が二月半ほど暮して来た田舎家の二階は、寢臺の枕もとの壁の上に古びた黒い木製の十字架の掛つて居るやうな部屋であつたが、そんな羅馬舊教の國らしい飾り一つ見つけたゞけで

も私の心は慰んだ。あの寢臺の前には何かの毛皮も敷いてあつた。豚の腸詰屋の亭主を仲好しの友達に持ち、マテラン自身にも牛や羊の賣買を職業とし居る佛蘭西人の家庭に、部屋には過ぎた毛皮の敷いてあるのも不思議はなかつたが、私はあの獸の爪の附着した毛皮の上にとつかと腰をおろし、靴ばきのまゝ、板敷の床の上に自分の足を長く延して見た。あんな些細なことにすら私は慰められた。あの田舎家では、正宗君と二人でよく果實の澤山植えてある裏庭の畠に隠れて、生りたての桃や梨の香氣を嗅いで來た。私は日本の子供がするやうな「ネツキ」を少年のエドワアルに教へて、畠の隅の林檎の木の下で一緒にあの遊びを樂むほどの心持にさへ成れた。どうかすると、リモオジュの町はづれを流れる井エンヌ河の水音があの田舎の二階までかすかに聞えて來た。歐羅巴の旅に來てから以來のことが私の胸にしみじみと纏まつて來たのも、さういふ時だつた。この調子だ。さう思つて私はリモオジュの旅から引返した。それに、いくらか自分でも旅慣れたと思つて嬉しかつたことは、全く知らない西洋人と汽車の三等室に膝を突き合はせて氣味悪くも思はないまでに成つたし、ボルドオの旅館の方では獨りで知らない人の中にも寢て來た。二月半の田舎行はいろいろな意味で私のために成つた。私

はもう二度と以前のやうな無聊に苦しめられることは懲りて居た。

國の方から届くなつかしい便りの中には、斯う書いてよこして呉れる人もある。思ひがけない歐羅巴の戦争は毎度新聞紙上で承知して居る、さだめしそちらでも驚いたことだらう、しかし千載一遇ともいふべき斯の好機會に巴里にあることは羨ましいと。斯ういふ便りを讀む度に、ほとく私は返事のしやうに困つた。さう言つてよこして呉れる人こそ羨ましかつた。兎に角、動員當時の混雜、市民の狼狽、あの頃の騒ぎを思ふと、自制に自制を重ねて斯の非常な時に處して來た佛蘭西人も随分努めたものと言はねばならない。動員令が下ると共に大統領が巴里市民に與へた諭告は徹頭徹尾市民に抑制を説き勧めたものであつた。ジョツフル將軍の公報が佛蘭西一流の多辯を避け、どこまでも謙遜に、所謂東洋的簡潔をもつて書かれてあることも人の知る通りだ。八月以降、巴里の新聞紙も殆んど戦争の記事で埋めらるゝ有様ではあつたが、私の下宿でも主婦が取つて居るマタンのやうな通俗を旨とした新聞紙の紙面にすら、實際あまり挑發的な文字が用ひてない。戦時以來、ボアリユウといふ言葉が流行つて來た。ボアリユウとは髻の延び放題に延びた人を意味するとかで、戦地の方に勞苦する兵士

等を呼ぶための親しみのある言葉として用ひられた。マルヌの大戦で巴里を危急から救つたジョッフル將軍などはボアリユウの中での大ボアリユウではあつても、あの將軍のことを軍神と呼んだ佛蘭西人のあることは聞かない。こゝには戦時に際しても何かの瑞兆のやうな靈鳥一羽飛出したといふ噂もない。見るもの聞くものが實に有りのまゝだ。そして痛々しいほど沈んで、しんみりとして居た。

斯の現實的な、ちつと制へに制へやうとして居る佛蘭西人の精力は、私ごときエトランゼエの身にも迫つて來た。丁度私はある恐ろしい悲劇の中へ飛込んで、自分が何の役割を勤めるではない迄も、早くこの悲劇が終を告げればいゝ、終を告げればいゝと言つて、絶へずそのことを念頭に置きながら動いて居る人に似て居た。何人も解決を急ぐことの出来ないやうなところに、この大きな悲劇の痛々しさがあつた。

『日露戦争の時は何年かゝりましたらう。』

よくそれを私はリモオジュの田舎の人からも聞かれ、この下宿の主婦からも聞かれる。

『戦地の方ではもう冬營の用意です。』

といふシモネエの言葉を聞きすて、下宿を出て見ると、いかに言つても町は寂しかった。

大きな潮の引いて行つたやうな界限の町には、日頃あつても氣のつかない古びた珈琲店の暖簾や人も少い共同腰掛などが眼についた。落葉し盡したブラタヌの並木は一層町々に空虚な感じを與へて居た。リモオジュを見た眼でもう一度巴里を見ると、私はそこいらを行き過ぎる人々の風俗にも可成いろく／＼な田舎を見つけるやうになつた。縞の風呂敷のやうな布を冠つた婆さんこそ見當らなかつたけれども、あの田舎の町はづれで大低の女が水汲にも洗濯にもあるひは用達にも穿いて出る靴がはりの深いスリッパは、巴里に奉公する家婢たちの風俗にも見られる。厚い藍色の仕事衣を着て、驢馬の曳く小さな馬車で村の方から來る人達が、あれが佛蘭西の田舎の旦那衆かと思つて見て來たが、あの鄙びた風俗は巴里の小さな珈琲店に働く人達にも見られる。巴里の家屋と言へば、以前は石で造つたものゝやうにばかり私も考へて居た。今度歸つて見ると、リモオジュの田舎にあつたやうな多くの塗家を發見した。現に私の下宿のある建築物がそれだ。尤も塗家とは言つても、耐火家屋で、石質に近い感じを失はずにはあるが。

私は町々を見直すやうな心持でもつて天文臺あたりまで歩き廻りに行つて来た。ふと、ある賣藥屋の横手で、人通りも少い往來にすこし腰を曲めたまゝ動かずに立つて居る女の後姿を見かけた。しばらく私もそこに足を停めて立ちすくんでしまつたが、しまひには自分で自分を笑はずには居られなかつた。こんな寒空に、往來で尿する女をめづらしく眺めるといふのも旅だと思つた。

## 八十六

「早く英吉利を引揚げたまへ。この痛切な巴里を味ひたまへ。」

倫敦にある河田君からその後の巴里の様子を尋ねてよこした時に、私はこれを葉書の中に書いて送つた。遠慮のない旅行者同志なればこそ斯様なことも言へたし、一方には河田君が歐羅巴に居る間に、せめてこの巴里でもう一度一緒にになりたいとの話もあつたからで。町々がいくらかづゝの賑かさを

増して行つたのは、やがて十二月に入つてからのことであつた。

最早包圍以前の巴里のやうに、あそこでもこゝでも貧民のための施與があるといふやうな光景が眼につくではなく、饑えた犬の鳴聲などが町の空に聞えて来るではなかつた。全くあの一頃のやうに昨日はどこの要塞が危いとかが今日は敵の斥候がどこに顯はれたとか言つて、毎日毎日戦報と佛蘭西の地圖とを見比べてはその事ばかり案じ暮した心地はなかつた。最早あの當時のやうな巴里ではなかつたが、でもさすがにこゝで迎へるのは戦時になつてからの最初の冬らしかつた。戸別訪問に忙しげなカトリックの僧侶は行衛不明の兵士の多いことを語り、寒さうに町に行く學校通ひの子供も戦地の方にある父兄を案じ顔であつた。ワアル・ドグラスの陸軍病院は塔のある禮拜堂を正面にして、この界限で古い石造の建築物の一つだ。時とすると水を打つたやうにひっそりとした戦死者の葬式が狭いサン・ジャックの通りからその禮拜堂へと續いた。この留守居の都で、佛蘭西の婦人の働き出したことは著しく私の眼について来た。三軒に一軒、五軒に一軒は戸の閉まつて居た店で、ほつ／＼復た商賣を始めたところもあつたが、さういふ店の帳場に腰掛けるのが留守を預る婦人であるばかりでなく、雇は

れて働くものゝ多くが婦人であつた。

斯の戦時らしい町の空氣の中で、私の下宿の近くにも女ばかりで店をやつて居る洗濯屋があつた。そこは普通の洗濯屋でもなかつたから、自分等の國のことにしたら洗張り屋といふ方に近かつた。その店は主に婦人を顧客として居たが、頼めば何でも引受けて呉れて、男物の外套や手袋から襟飾の洗濯までして呉れた。私が下宿の近くにそんな店のあることを知つたのも、儉約な巴里人の生活の一端はそんなところにもよく顯はれて居ると思つて來たのも、長い外國の旅が自分に教へたことだ。それにして國を出る頃にはまだ新しかつた自分の服を洗濯して着るやうになつたかと思ふと、さういふ店から届けて來た冬衣の着心地も身にしてみた。

巴里に歸つた當座、私は毎日正宗君を見た。正宗君も寂しいと見えて、日に一度づゝはフアルギーエルの畫室の方から私の下宿へ食事のために通つて來た。

正宗君が高村君や森田君と同時に佛蘭西へ入つたのは、あれは戦争の始まる四ヶ月程前に當る。私が巴里で知合になつた美術家仲間のうちでも、正宗君は顔觸としては新しい方の人であつた。その正宗

エが今度シモノエの食堂で一緒になる頃には大分もう旅に揉まれて見えた。一體、正宗君は新を求めて止まないやうな熱心な性質の人で、畫作の苦心は絶えず念頭を去らずにあるかと見えたが、さういふ性質の人にはめづらしいほど交際の廣いところもあつたし、人の氣のつかないやうなことにもよく氣がついた。それに友達思ひだつた。倫敦の方にある山本君の噂、高村君の噂、澤木君の噂、郡君の噂、それから河田君の噂などがよく私達二人の間に出た。周圍が寂しければ寂しいだけ、遠く離れて居る同胞の旅行者が戀しかつた。何と言つても互に手を引き合つて異郷の空を旅して居るやうな人達の事は、ひとりで私達の胸に浮んで來た。ルーヴルも、バンテオンも、ルキザンブウの美術館も、さういふ建築物は一切堅く閉ざされて居た。私達のゆつくり見たいと思つて居たやうな名のある繪畫や彫刻はどれも深く隠されたまゝの時だつた。唯、諸方の寺院とナボレオンの墳墓とだけが開いて居た。ある日、私は正宗君を誘つてノオトル・ダムの方へ出掛けて見た。せめてあのゴシック風な古い石造の建築物の内では時を待つて來たいと思つたからで。それに、リモオジユの方で見て來たサン・テチエンヌの寺院にも思ひ比べたかつたからで。



「山本君も英吉利の方で奈何して居ませう。シモンヌの阿爺のことを聞いたら、さぞ驚くでせうね。」こんな話をしながら出掛けた。シモンヌの家の前を通る度に、私達はその小珈琲店の母子を見舞ふことを忘れなかつた。相變らず亭主は行衛不明のまゝで、音も沙汰もないとのことであつたが。

ノオトル・ダムへ行く道は、亡くなつてまだ間もない人のことなどをも自然と私の胸に想ひ起させた。それは正宗君の知らない人ではあつたが、私の旅には縁故の淺くないやうな氣のするモレル君のお母さんだ。私があのお婦人の死を聞いたのはまだリモオジュの方に居る頃で、自分等の國の方の孟蘭盆に譬へて見たいやうなツツサン（佛蘭西にある死者の祭）に先だつ數日前であつた。私はあのズルサイユの兵營に自轉車隊附として働いて居るといふモレル君の留守宅から出た通知狀が巴里の下宿の方を廻つてリモオジュに届いたことを覚えて居る。それにはあのお婦人の遺骸が巴里のベエル・ラセエズの墓地に葬られるといふことが認めてあり、子息さんのモレル君をはじめ親戚一同の名前がその下に精しい親戚關係と共に列記してあつたことを覚えて居る。例へば、亡き人の姪のだけそれ、亡き人の義理ある兄弟のだけそれといふ風に。あのお婦人が大きな戦争の空氣の中で、しかも寒い十月の末

に病み倒れて行つたといふことは一層その死を痛ましく思はせた。

何故私がこんな亡くなつた人を惜しむかと言ふに、佛蘭西へ来て一番最初に私を迎へて呉れたのがあのお婦人であつたから。實際モレル君のお母さんが私のやうなエトランゼエのために心配しているくゝな手引をして呉れたり、紛れやうのない異郷の沈黙から私を勵ましたりして呉れたことは、西洋の婦人とも思へないほどであつた。私がいづらかでも純粹な佛蘭西人の家庭に入つて見ることの出来たのは、皆あのお婦人の手引だ。この悲しい戦争が一日も早く終りを告げることを心から願つて居る、といふ意味の言葉で結んだセエブル出の手紙はあのお婦人から貰つた最後の消息であつたが、それをリモオジュの旅に居て讀んだのはまだ私には昨日のことのやうな氣もして居た。私はよくさう思つた。知らない土地の人達の中でも一番多く自分のことを考へて居て呉れたのは、矢張一番最初に私を迎へて呉れた人であつたと。そこまで力を落して居たとは私も正宗君には話さなかつたが、あれだけ頼りになる佛蘭西人はもうこの旅には見出せまいかとも思つた。

丁度日曜だつた。町々はさびしいと言つても、いづらかの人があつた。ボルドオの方で西部の佛蘭

西の女の豊かな頬を見て来た私の眼には、行き逢ふ巴里の婦人のどの人の顔色も悪く見えた。

## 八十七

巴里に来た旅行者でノオトル・ダムをほめないものはない。あの古い寺院の立つ中の島あたりからセエヌの河岸へかけての風物を眺め見たもので、自然と人工とを調和する佛蘭西人の才能に感じないものはない。全く、ノオトル・ダムは巴里にあるゴシック建築の中の最も代表的なものであらう。しかし私達の様に東洋から来た旅行者があゝいふ硬質な石造の建築を味ふ心を持つことは一寸容易でない。同じ石の美を味ふにしても私達は兎角それを自然石の方へ持つて行きたい。自分等の國の方の古い庭園にあるやうな自然石の美は全く歐羅巴人には知られて居ないやうな気がする。こゝでは私達の踏んで行く道路の設計にも、セエヌ河にかゝつた橋の意匠にも、これから訪ねやうとする寺院の建築

にも、石といふ石の用材に冷靜で組織的な人工の加はつて居ないものはなかつた。

正宗君と私とは寺院の入口の扉を押して入つた。重く響ける扉の音からして何となく私達の氣持を變へさせた。午後の彌撒の終りかける頃で、戦友の無事を祈り顔な佛蘭西の軍服着た負傷兵までが婦人の參詣者と共にその日の儀式に集まつて居た。しばらく私達は大理石の水盤のあるあたりに立つて、古めかしく物寂びた堂の内へ響き渡る巨大な風琴の樂音や、男女の合唱の肉聲に耳を傾けて居た。そのうちに儀式も終りかけたので、私達は高く暗い石柱の間を靜かに歩いて見た。堂内に香ひ満ちたやうな没藥と乳香の薫りは何時の間にか私の心を誘つて、リモオジュに居た間よく訪ねたサン・テチエヌヌの寺院の方へと連れて行つた。あのサン・テチエヌヌのゴシック風な建築の内部で見て来たやうな彩色した硝子窓はこゝにもあつた。しかも今度巴里に戻つて来て見ると、こゝにある硝子窓が特別に光つて見えて来た。暗い靜かな石柱の下あたりに立つて見上げると、高い窓々へは仄かな日光が射して来て居る。それが彩色した硝子に描かれた聖者の像などを明るく見せ、紅色や綠色の寶石を鑲めたかのやうな中央の大きな圓形の窓は殊に深い沈んだ色彩に輝いて居た。リモオジュの寺院の方で見

て来たものが美しいと思つたら、こゝにあるものは更に美しかった。

「おそらく巴里にある最も美しいもの、一つは、このステインド、グラスだ。」  
と私の心が自分にさゝやいた。

私は巴里に多くある羅馬舊教の寺院を好むといふではない。唯斯うした清らかな感じのするのを好ましく思ふ。あのリモオジユの岡の上にあつたサン・テチエンヌも忘れられない。それには隠れた「人」の努力が感じられる。その努力から斯うした古い寺院の活かされて居ることが感じられる。どうして澱み沈んだ羅馬舊教の空氣の中には堪へがたいほどのものが多い。年老いて病身らしい佛蘭西の婦人の掌などに撫でられる聖母マリアの像といふものを見ると、まるで自分等の國の方の「おびんづるさま」にそっくりだと思はせるやうなものさへある。ノオトル・ダムノートルダムの寺院を出てから、私は正宗君に言つた。

「前にはそれほどにも思ひませんでした、いろいろ他の寺院を見て來ると、矢張ノオトル・ダムの好いことが分りますね。」

正宗君もうなづいて居たやうであつた。

歸りがけに私達はサン・ミツシエルの河岸に立つて、二人して訪ねて來たノオトル・ダムの方を振り返つて見た。セエヌ河に臨んで立つ錆び黒ずんだ石の建築物はそこに大寺院としての側面を見せて居た。あそこに私達が内部から見て來た禮拜堂の窓の小さなものがある、あそこに中央の圓形の窓の大きなものがある、と指して言ふことが出來た。その側面には美術史の研究に精しい澤木君の以前私にゴシック藝術の一特色として注意して呉れたのが、あだかも巖壁に附着する石の贅積のやうに望まれる。何世紀かの間に増建し増建したやうな低い石室も後方の横手に望まれる。そこには僧侶も住むかと思はれた。全體として見て、自分等の國の方の寺院の境内にあるやうな山門といふべきものもなく、離れた鐘つき堂もない。高い塔から本堂まで塊状を成した一團の建築物に纏められて空に聳え立つて居るのを歐羅巴風の寺院の姿とする。こゝへ來て見ると、今迄私達は巴里にあるものを羅匈民族の教養といふやうな開化した方面からのみ見ようとばかりして、ゴオル人の血を示した野性の方面から見ることを割合に粗略に考へて居たと氣づくやうにも成つた。あの幹に幹を並べ枝に枝を重ねた深い林の中へ

でも入つて行くやうな寺院の内部の構造こそ羅甸の精緻を思はせるものがあるけれども、全體として離れて見たゴシック風の巖疊な建築には幾百年の風雨に耐へて来たやうなゴオルの氣魄の宿つて居ることを感ずる。私達がリモオジユの田舎での滞在は短かゝつたとは言へ、巴里を見る上にいろ／＼役に立つことをも思つて来た。私はこの歐洲文明の中心とも言はるゝ大都會に意外に野趣の溢れて居ることを一々持出して見るまでもない。眼にあるノオトル・ダムが、いかに羅甸的で、同時に又いかにゴオル的であるかを知れば足りる。

地べたから直ぐに生えて居るやうなとは、正宗君がノオトル・ダムの建築を評した畫家らしい言葉だ。あの高い眺望の好い石塔の上の位置から冬の巴里を望むことが出来たら、とは思つたが、戦時以來登ることをも許れなかつた。私達は元來た道をシモンヌの家まで引返して行つて、そこで珈琲を温めて貰つた。

羅馬舊教の國ともいふべき佛蘭西に来てから、これまでもう私もあちこちの寺院を訪ねて見た。あの一切の裝飾が人の心の奥を象徴したやうな寺院の内部に見つけるものは、暗いところに三本づゝ並んでとほる長い蠟燭でも、消えそうで消えない常夜燈の紅い光でも、何となく私の心を誘はないでもない。あの巖窟のやうな石壁や石柱の間に漂つて居る靜かな空氣も、亦旅に疲れた私を休ませないでもない。どうかすると私は珈琲店へ行つて休むかはりに寺院へ寄つて休むやうな、そんな旅人らしい氣輕な心でもつて、人氣の少い堂の内に腰掛けて來ることもある。そして自分の周圍に、默禱に餘念もないやうな二人の佛蘭西の婦人を見かけることもある。しかしこれは單なる休息のためとか、旅の好奇心を満足させるためとか、さういふことの爲ばかりでもなかつた。私には、佛蘭西近代の作家で修道院へ行かうとしたユイスマンスのやうな人の生涯を忍びたいといふ心があつた。近代の生活の中にあつて苦しく鋭い修道者のやうな心を持つたものは『ラ、カテドラル』の作家ばかりでもないといふことを考へ合せて見たかつた。羅馬舊教の寺院の方へでも自分の足が向く度に、あのユイスマンスのこと、それからカソリシズムのやうな他力の信仰に趨くものも少くないといふ佛蘭西の新人のことなどが何時でも私の想像に上つて來た。

旅の空でいろ／＼な話を私のところへ残して置いて行つた同胞の中には、まだ年若な宮本君といふ人

もあつた。宮本君は若い思ひつめたやうな心から、修道院へ入るつもりで戦争前に國から来た人だ。君は巴里に着くと直ぐ出迎への僧侶に導かれ、身につけた金銭も僧侶に預け、その人の經營する寄宿舎に入つた。いろいろな學生や尼僧などの居るその寄宿舎へ私を連れて行つて見せて呉れたのも宮本君だ。ナボレオンの墓から遠くないフランソワ・ザンエーといふ寺院で日毎にあるコオラスは巴里の最もすぐれた宗教樂の一つだといふことを話して呉れたのも宮本君だ。羅馬舊教の寺院には所謂「十字架の道」が何等かの形で必ず表はし掲げてあるといふことなどを私に話して呉れたのも宮本君だ。政教分離以來、羅馬法皇直轄の下にある修道院といふものは最早佛蘭西にはなかつた。宮本君は白耳義にある修道院を目ざして戦争の始まる前に巴里から立つて行つたが、それぎり私は消息を聞かない。あの宮本君も奈何して居るかと思ふと、氣にかゝつた。

寒い／＼日があつて来るやうに成つた。午後からいくらか寒氣がゆるんで、好い日あたりを樂めるやうな日があるかと思ふと、その翌日はまたルキサンブルの公園にある噴水池も凍りつめるほどの日が来た。もう冬籠りだ。國の方に残して置いて来た子供等も無事だらうか、そんなことを思ひながら

私は暖爐に近く机を置いて自分の仕事に親しまうとした。

旅費を節する必要から、私は語學の教師に一時間二法ほどしか拂へなかつた。それも戦争前までは殆んど毎日のやうに通つて居たが、今度巴里に歸つてからは一週に三日とした。そして自修の時を多くした。私の教師は、オクダアヴ・ミルボオの『小間使日記』の話でも出ると一概に惡寫實として顔をかめるやうな老嬢ではあつたが、教へ方は親切で、ときばきとして居た。で、私はこの教師に就いて語學の知識を習得することゝ、自分で讀みたい書籍を讀んで見る事と、それを全く別々に考へた。新しい學藝に浸つて行く悦びがあればこそ、私も種々な旅の不自由を忍ぶことが出来た。

戦時以來、羅匈區界限にある多くの本屋が店を閉めてしまつたことも不便を感じさせた。私は小山内君の巴里に見えた頃から、サン・ミッシェルの河岸に好い本屋を一軒見つけて置いた。そこは佛蘭西象徴派の諸詩人に親交のあつた出版業者レオン・ヴニエーの遺した店で、エルレエヌの『宗教詩集』と題したものにユイスマンスの序文を添へた出版物などが一寸飾窓を覗いた丈でも私の眼につくやうな家であつた。私が小山内君に頼んで東京の有島君に届けて貰つたエミール・ベルナルの『セザン

マの回想」などもそこで出版した本だ。今度巴里に戻つて来て見ると、その店は閉まつて居た。これ一例に過ぎなくて、主人から店員まで戦地の方へ行つてしまつたやうな書店は何程ある知れなかつた。でも私はよくさう思つた。巴里のあらゆるミユゼエを訪ふことも出来ずに居るやうな正宗君等の不便に比べたら、まだ、自分は読みたいと思ふ書籍をほつ／＼探して来ることも出来るではないかと。丁度私は大潮時の海の泥の中をこねて、學問や藝術の波の置いて行つた貝でも尋ね廻る人に似て居た。旅に来てから懇意になつた佛蘭西人の家族もその後どうして居るかと思つて、あちこち見舞に行つて見ると、ビヨンクウルのモレル君もゾルサイユの兵營附で無事に働いて居ることであつた。モレル君は僅かの許された時を得て自動車で家族を見舞に来ることもあるそうだ。二時間ばかりの間に忙しく家族の人々と食事をして、また自動車でゾルサイユをさして急いで歸つて行くさうだ。マダム西街に住むニゼット・ジュバン女史は老いた伯父さんと二人で靜かに寂しく暮して居たし、植物園に近いレノイ教授の家では年若な兄弟の子息さんを二人まで戦地の方へ送つて、教授も夫人も子息さん達のことを言ひ暮して居た。

ラベエ河岸のリエーヴル君は軍用の自動車掛りだつた。リエーヴル君は巴里の市内で働いて居た。夕方になると青黒い蓋を掛けた輸送用の自動車が幾臺となく私の下宿の前を通るやうに成つた。あの自動車を飛ばして行く兵士の中に新バルナツシアン派の詩人も混つて居るのかと、眼をとめて見るやうに成つた。

## 八十八

ある日、私の部屋の外で扉をこん／＼と軽く叩く音をさせるものがあつた。私は部屋に籠つて國の方の新聞宛に旅の通信などを書いて居る時だつた。

「お入り。」

と言つて何気なく扉を開けて見ると、食堂の方に居た主婦が客を案内して來た。

「アリエスさんがお見えてでございます。」

と言ひ入れるシモネエの聲からして私を驚かした。

アリエス君はソルボンヌ大學の哲學科を卒へた後、ヅルサイユの生家の方へ歸つて居た人だ。私が隣室に宿泊して居たのは、まだ河田君が獨逸からも見えない前で、丁度河上君や竹田君が産科病院前の旅館からこの下宿の食堂へ通つて来る頃のことだ。戦争が始まらなくとも二度と逢へそうには思はれなかつた同宿の好みのある佛蘭西の青年を迎へ入れて、互に握手をかはすといふだけでも私にはうれしかつた。まして町の空のこんなにひつそりとした、訪れて来るものもすくないやうな時だ。

「君はもう疾く<sup>はやく</sup>に戦地の方へお掛けかと思つて居ましたよ。」

と私が言つて見たら、アリエス君は短い訪問の時の佛蘭西人がするやうに帽子を膝の上に載せ、外套も着たまゝで、

「それは君、斯ういふ理由からでさ。私の父も、私の兄も、戦争に行つて居ます。佛蘭西では一家族の中に二人戦争に行くものがあれば、それ以上、出るには及ばないと成つて居ますからね。」

この言葉を聞いて、私はアリエス君の父さんが相應な位地の軍人であることを思出した。

「しかし、私も戦地の方へ出掛けるつもりです。遠からず義勇兵として出掛けるつもりです。」

とアリエス君は附けたした。この非常な時に際會した佛蘭西の青年が留守などを守つてばかりは居られないと云ふ調子で。

下宿の主婦は客を欺待顔に、珈琲を入れて臺所の方から持つて来て呉れた。下宿ではめつたに斯ういふことをしなかつた。餘程主婦の機嫌の好い時とか、餘程めづらしい客でもある時とかに限つて居た。その珈琲の盆でも、盆の上に敷いた布でも、古い珈琲茶碗でも、アリエス君にはお馴染の道具だつた。このアリエス君の顔を見ながら、主婦が心づくしの珈琲などを一緒にやつて居ると、ひとりでに私の胸にはセデエルといふ獨逸の青年のことが浮んで來た。今こそ敵味方に分れて、この下宿の人達に言はせるとあの青年も憎むべき獨逸探だが、以前食卓を共にした頃にはアリエス君と二人でよく戯れた。あの獨逸の青年も奈何したらう、とは私ももう口に出せなかつたし、アリエス君の方でも言はなかつた。

「でも、以前から見ると、君も話すやうに成つた。」とアリエス君が言出した。

「どうしまして、言葉の不自由なのは困つて居ます。やればやるほど、むつかしく成つて來ます。」

「ほんとに君も以前には黙つて居ましたね。」

「そりや、用だけはいくらか足せるやうに成りました。子供の時分から覺えた言葉でなけりや、とてもこまかい感情は表はせません。話すより讀む方が、まだしも私には樂なんです。」

その時、アリエス君は笑つて、暖爐の側に置いてある小さな書棚の方へ立つて行つた。

「へえ、エレミール・ブウルジユの『鳥啼き花落つ』なども有りますね。こんなに君のやうに本ばかり飾つて置いても、讀まなくちや仕方がありませんまい。」

とアリエス君は笑ひながら言つた。その調子には思つた通りのことを言はうとするやうな、愛らしい書生肌があつた。

「まあ追々と讀んで見ますサ。旅に來ると、君、さう思ふやうにも讀めませんよ。それに私の語學の力では。」

「それもさうです。」

「さう言へばアリエス君、この通り佛蘭西には物を書く人が澤山ありませう。その中で、君等のやうな若い時代の人達は奈何いふ人を押すんですかね。」

「それこそ思ひくです。人おのゝ好むところが有りますからね。しかし、私は四人の大家を擧げることが出来ると思ひます。すくなくも四人の名は。」

戦争を外にして、私達は可成デリカな問題に觸れて行つた。一家を成した人達ともちがひ、アリエス君などは無造作に斯ういふことを話して呉れて、嬉しかつた。アリエス君の口からは、先づアナトール・フランスの名が出て來た。モオリス・バレス、アンリイ・ド・レニエーそれから最後にシヤアル・モオラスの名が出た。

「一寸待つて呉れたまへ。今私が話したレニエーは詩人として、なく、散文家として、すよ。」

このアリエス君は誰でも擧げるやうな名ばかりを私に數へて呉れたやうな氣がした。もとよりそりそ



これらの人達はそれ／＼佛蘭西の精神を代表して居るには違ひないし、殊にバレスやモオラスが戦時以來の働きは私も多少知らないではなかつたが、アリエス君のやうな青年の口からは私はもつと新しい人の名を聞いたかつた。そこで今度は私の方から試みに切出して見た。

「ロマン・ロオランのやうな人を君はどう思ひます。」

「さあ。」とアリエス君は両手をひろげながら肩を揺つた。「ロマン・ロオランも『ジャン・クリストフ』の第一巻を出した時は評判でした。あの人には少し獨逸的などころがあります。あそこが、われ／＼佛蘭西の青年には物足りないところですよ。」

私はまだこの他には二三の人の名を擧げて尋ねて見たが、さういふ新人の噂になるアリエス君は肩を揺つた。そして自分には何とも言へない様子をした。

私に佛蘭西の四大家を數へて見せたアリエス君がシャアル・モオラスの名をあげたのは無理もないことだつた。この青年が心を寄せて居るのも所謂古典の精神に根ざしたやうな新しい思想であつたから。私はアリエス君に何程の教養のあるかもよく知らなかつた。しかし大學を卒へてまだ間もない年頃の

人でありながら、兎も角も一個の見解を立て、下手にさう迷つてゐないやうな、その頼母しさの見えるところに感心した。

遠からず戦地の方へ出掛けるといふアリエス君は、同じ大學の卒業生でもこの戦争を遊戯視し、まるで串談でもしに行く人のやうに出征の途に就いたといふ青年などとおもしろい對照を見せて居た。その日、アリエス君はモオラスの著述の中から二三の代表的な書目を私に擧げて見せたりなぞして、別れを告げて行つた。ソルボンヌ大學の構内にある古い禮拜堂には巴里での好い宗教樂が聞かれる、折があつたら訪ねて行つて旅の徒然を慰めよ、そんな言葉をも私のところへ残して置いて行つた。

私はアリエス君を送り出した後、あゝいふ青年が私淑するモオラスとは奈何な人かと想つて見た。

「彼は獨創的な設立者ではない。彼の勇氣と資性とは、あだかも佛蘭西の國王が地方を集合せしむるに、種々の思想を集合した。彼は總括者だ。しかし、コントや、ル・ブレエや、テエヌや、ルナンや其他の著述家の後を受け、十九世紀の齎した積極的效果を證したものは彼である。その積極的傾向、ニイチエ等によつて説かれたる哲學的見地が、若き時代の人々に認識せられたることに疑ふ可くもな

い。是、ベルグソン及びゼエムスと諧調を成すものである。」

斯うモオラスに就いて書いた人もある。その文學運動は同時に政治運動であつて、シャトオブリアンの無政府國よりも、ミシュレエの民主國よりも、サント・ブーヴの王國を提唱するやうな主張に基いたものであるといふことは想像せられる。私はそうした主張が何程佛蘭西の若い時代の人々を動かして居るやもよく知らなかつた。しかしこの佛蘭西で、熱い綜合の決果は王を求めるところまで行つたといふ主張そのものよりも、憚らず信んずるところを言ひ行はうとするその勇氣に感心した。

斯う思つて見て來ると、この旅に來てから私の知合になつた佛蘭西人で、一人として同時代に満足して居るものはないかのやうに見えた。私に勤めて呉れるものでも一人一人違つて居た。モレル君はバレスの書いたものを、リエーヴル君はレニエの最初の時代の詩を。ニゼット・ジュバン女史は佛蘭西人を父親に持ち、日本人を母親に持つて、十四五の歳まで神戸で育つたやうな人であるが、この人はまた私にダウルモンの書いた物を勤めて呉れた。成程、佛蘭西にも新しい女はあります、ニイチエなどがそれらの人達によつてしきりに言ひ囃られて居ます、しかしあのニイチエによつて説かれたやうな超人の

思想が何程それらの人達に理解されて居るでせうか。」と女史は私に話して呉れたこともある。私は自分の周圍を見廻して、つくづく一つの國の知り難さを思つた。私の方で尋ねたいと思つたことで、あのアリエス君の答へられないのは無理もないと思つた。同時代の事が言へないのは、何處の國も同じだ。

## 八十九

十二月の半ばになつて日本の大使館も佛蘭西政府と一緒にポルドオの方から移つて來た。巴里の市民の元氣づいたことは全く眼に見えるやうであつた。國立劇場のコメデイ・フランセエズにも負傷兵を慰めるための『マチネエ』などがめづらしく催されるほどになつた。斯うして町では日に／＼いくらかづゝの賑かさを増して行つた頃に、私はまた倫敦の方から歸つて來た高村君を迎へた。

『巴里に居る時は、一枚でも多く自分の氣に入つた畫を作りたいと思つて居ました。研究より外には

何もありませんでした。ところが倫敦の方へ行つて見ると、一枚でも多く賣れる畫を作らうと思ふやうに成りましたよ。それだけの違ひがあります。』

こんな土産話をする聲も、實に久し振りで聞く思ひをした。

戦時の降誕祭も近づいた。國を出てから二度目の年を斯の客舎で越すかと思ふと、旅はますますさびしく成つて行くやうな氣がした。しきりに國の方の子供のことが思ひだされた。私の下宿でもまだ好い客がなかつた。食卓に就く度に、私の合はせる顔はシモネエとマアガレットの二人ぎりだつた。その頃はもう正宗君も私達の食堂へは通つて來なかつた。

『そりや誰でもないなら、お客様がなくも有りません。今日も部屋を見せて呉れと言つて來た女の方もありました。でも素性の知れないやうな人にうっかり部屋は貸されません。巴里はさういふところで御座いますから。』

斯ういつて見せるシモネエの話には、有島君が巴里の留學時代にこの下宿に居た頃の噂や、煙草好きなセルビア生れの女の客の噂や、瑞典人、波蘭人、土耳其人、其他諸方の國から來てシモネエの客と

なつた人達の噂がよく出た。シモネエがまだ若かつた頃にはバルザックの小説がよく流行つて、彼女も好きでそれを讀んだといふ話や、巴里は開けたところのやうでも娘の二十五になるまで小説を讀むことを禁じてあるやうな昔氣質な家庭があるといふ話などが出た。時には私はこの食堂で、リモオジュ以來馴染のマテランや、子息のエドワアルを見ることもあつた。シモネエはまた羊や牛の買ひ集めに年中あちこちと飛び歩いて居るといふマテランの噂を私にして見せて、

『およそ仲の好い夫婦と言つても、マテランくらゐのはめづらしう御座いますよ。それは仲が好いんで御座いますよ。私なぞの見て居る前で、抱くやら、可愛がるやら。』

こんな話が僅かに食卓を賑はした。巴里の方で見るマアガレットはお伯母さんの前にびりぐして居るやうな娘だつた。あのリモオジュの田舎家の食堂で正宗君や私の見て居るところでも、目上の人達さへそこに居なければ、こつそりエドワアルの耳を引張つて置いて臺所の方へ逃げて行くやうな、あゝいふマアガレットの表情はここでは見られなかつた。

やがて雪は町へ來た。毎年の例として町では暮の贈答品の賣り出しのある頃になつた。店々の飾りつ

けもその年はさびしかつたが、サン・ミツシエル通りの女房具屋などにクリスマス向きの書籍を見に行つて、雪のある街路を引返して来た時はひどく靴が濡れた。兎角私は足から風邪を引き易かつた。自分の部屋に籠つて居て獨りで暢気に食事の出来るのも、さういふ風邪を引いた時に限つて居た。私は下宿の人達が臺所の方から運んで呉れるリモオジュ風の田舎の料理を自分の机の上に置き、寛濶な和服の着心地などを楽しみながら、獨りで炙肉の香気を嗅いだり、しなびた林檎の皮をむいたりするのを旅に疲れた時の何よりの慰めとした。私はよく風邪を引いた。部屋で食事がしたくなると、風邪を引いた。これにはシモネエやマアガレットも不思議に思つたかも知れない。その暮は部屋の寢臺の上で、眠りがたい冬の夜を送ることが多かつた。

## 九十

到頭、巴里で二度目のノエルを迎へた。ノエルとは佛蘭西でいふクリスマスだ。前の年サン・ミツシエルの通りに立つた年の市の賑に比べたら、その暮は實にひっそりとしたものであつた。でも一冬に一度の祭らしく改まつた顔付をした町の子供等を見るにつけ、私は國の方へ残して置いて来た自分の子供等のことを思出し、どんなに皆大きくなつて旅にある自分のことを言ひ暮して居るだらうかと思ひやつた。

斯うした土地に来て見ると、子供にのみ話せるやうな些細のことで、しかもその些細なことに土地の特色のよくあらはれてゐると思はれるやうなことは、かすくゝある。あのバアクの祭の紅い玉子、それからこのクリスマスの祝ひの靴などは、國の方の子供に話したいと思ふものだ。年の暮に、靴に入りきらないほどの郵便物を肩に掛けて私達の部屋にやつて来る巴里の配達夫のことも、子供に話しかせたい。

## 「郵便。」

旅行者としての私達が、國からの便りを待たびた後で、その配達夫の聲を聞きつける悦びは、丁度子

供のところへクリスマスプレゼントを貰つて来るといふサンタ・クロースでも迎へる悦びに似て居る。私達は待たびた郵便物を受取るかはりに、來年の曆などを買はせられる。旅行者に向つて露骨に年の暮の祝儀を請求するのは巴里の配達夫だ。こんなに私達のところへ來るサンタ・クロースは、子供のところへ來る爺さんほど無邪氣ではない。しかし、あの長い髯をはやした佛蘭西人の配達夫が暢氣さうな顔付で、私達の署名を求めると部屋まで入つて來て、來年の曆と一緒に書留の郵便物を靴から取出すところは、どう見てもお伽話中の人物と言ひたいものゝ一つだ。

國を出る日から、私は何か旅の話でも書きつけて自分の子供に送りたいと思ひ立つて居た。さびしい旅はついで子供の讀物などを試みたこともない私にこんな心を起させた。クリスマスでも來る頃には殊にその心が動いた。たゞ、あれもこれも思ふばかりで、その十が一をも果せないのは、外國にある旅行者の境涯だ。町に出て見ると、『好いクリスマスを祝ひ、併せて新しい年を祝ふ』とした年賀兼帯の繪葉書などが眼につく。私はさうした繪葉書の中でも自分の子供に向きさうなものを見立て、僅かにそれを旅の紀念として、國の方へ送るぐらゐることゝめてしまつた。

やがて新しい年が來た。正月の元日には、私と正宗君とは下宿の人達と一緒にマテランの家へ招かれた。心易い佛蘭西人の家での年とりと呼ばれたことは正宗君にもめづらしかつたらうし、私に取つてもめづらしかつた。

## 九十一

私の下宿では主婦もママガレットも招かれて行く支度をして、私達より一步先にマテランの家の方へ出掛けた。私が正宗君と連立つて電車で東の停車場前まで乗つて行つたのは、靜かな元日の午前のことであつた。門松一つ立てた家の見當るでもない土地柄でも、さすがに東の停車場前の廣場あたりに年始廻りらしい町の人達の右に往き左に往きするの眼について、正月といふ氣分が浮んで來た。私達二人は停車場前で更にバンタン行の電車に乗りかへた。

リモオジュの旅以来懇意になつたマテランの家族はバンタンの城門に近いユウジイン・ジユマンといふ町の方に住んで居た。牛、羊、豚などの大市場の前まで乗つて行くと、やがてそこは電車の終點地で、私達はめつたに行つたことの無い巴里の町はづれへ出た。獸肉を食用の主なものとする斯の土地にあつては、私達は巴里の魚河岸の附近へでもやつて來たやうなもので、しかもその市場の規模は外観だけでも可成大きなものといふ氣がする。市場の前に續いて行つて居る街路の眺めは又、何となく東京の新宿あたりを想ひ起させる。牛や羊の賣買を職業にするといふマテランが斯うした市場の近くに住む理由もうなづかれた。

マテランの家では例の赤ら顔の主人を始め、眼鏡をかけた愛想の好い細君や少年のエドワアル兄弟が私達を待つて居て呉れた。應接間と食堂とを兼ねた部屋で、私達はシモノエやマアガレットとも一緒になつた。

「ほんとによくお出下さいました。今日は叔母さんもマアガレットと一緒に、こんなうれしいことはありません。」

斯う言つて細君が私達をもてなして呉れるところへ、シモノエは奥の部屋の方から年老いた姉を連れて來た。一同親戚の間柄らしく客に行つたものまで帽子を脱いで寛いで居る中で、このマテランの家のおばあさんのみは黒い佛蘭西風の帽子を冠つて私達のところへ挨拶に來た。相變らず物靜かな調子で好ましい感じを與へるのも、このおばあさんであつた、斯うして集まつて見ると、あの開戦の當時、リモオジュのバビロン道の田舎家に避難した連中は一人残らずそこに顔が揃つたわけだ。

「お母さんもう年をとりましたし、リモオジュの方にある家は人に貸しまして、今では私共でみんな一緒に暮して居ますよ。」

と細君は言つた。

マテランは正宗君と私とを食堂の窓の方へ誘つた。巴里の要塞に近い町の空がその窓から見えた。マテランは早口な上に、言葉の訛りが多くて、折角もてなし顔に話しかけることも私達には解りかねることが多かつた。でも、この家の位置がビユット・シユウモンの公園に近いこと、ついそこへ出るともうバンタンの城門の見られること、牛や羊の市場が見たくばいづれまた自分が案内しやうと言つて

呉れることなどは解つた。そして、その訛りの多い言葉がいくらかでも私達の方へ通じる度に、マテランはさも愉快らしく笑つた。

『ハッ、ハッ、ハッ、ハッ。』

このマテランの笑聲も私達は久しぶりで聞く気がした。そこへも細君がやつて来て、窓の外に見える町々の屋根を私達に指して見せ、巴里包圍の今少しで始まらうとした前の年の八月には砲聲がその窓から聞えたことを私達に語つた。

『エドワアル、お前は部屋へでも御案内したらよからう。』

斯う言ふのも細君だ。私達は馴染の少年に案内されて、おばあさんの部屋へも行き、マテラン夫婦の部屋へも行き、エドワアル自身の部屋へも行って見た。寢室の扉まで開け放して私達のやうな客にさへ隠すところのないのが佛蘭西人のもてなし振だ。私達は部屋々々を見て廻つた後、廊下から食堂の方へ引返さうとして、臺所に立働く細君から聲を掛けられた。

『まあ、私共の狭い臺所を見て下さい。あなた方は都會の不自由なこともよく御存じでいらつしやる。』

斯う細君が言ふと、そこには客に行つたマアガレットも手傳い顔に立つて居て、細君の話を引取つて笑つた。この人達の間には、何かにつけてリモオジユの田舎の噂が出た。

その日の馳走は、年とりとは言つても、自分等の國の方でするやうな格式めいたことは少なかつた。私達は柳箸のかはりにフォークやナイフを手にし、屠蘇のかはりに葡萄酒を汲みかはし、橙酢だいごすの牡蠣や鳥の炙肉やで新しい年を祝つた。その日は正宗君も國の方のことを思出し顔であつたが、私としても思出すことが多かつた。

『私共のアンリイも今年から兵營の方へまゐりますよ。』

『まあ、見てやつて下さい。あれも今年は十八歳ですが、まだこの通りな子供です。』  
食卓に居並らぶおばあさんや細君から、こんな話を聞くのも戦時の正月らしかつた。アンリイといへば、弟のエドワアルとは僅かに一つ違ひぐらゐに見えた。そんな少年でも斯の大きな戦争には参加しなければ成らなかつた。どんな若い兵隊が出来るかといぢらしくも思はれた。

食後に、私達はエドワアルに案内されてパンタンの城門まで出て見た。巴里の外廓を取りまく要塞は

長く續いて来て居て、新たに施したらしい城門前の防禦的な工事が私達の眼にあつた。バンタンの郊外の平坦な地勢はその邊から枯々と望まれた。私達が要塞の附近からも一度マテランの家まで引返して行つて、城門前で見て来た工事の話を主人にすると「ムツシユウ。」と言葉に力を入れながら、マテランは片手で私の肩を押へて、あの工事に就いては随分いろ／＼な噂がある、敵を眼前に控えて巴里市の危急が傳へられた時にすらそれだ、といふ意味のことを語つた。マテランは片手を自分の隠袖の中へ差入れて、あだかもある不正なものをこつそりその隠袖に忍ばせるやうな手付をして見せて笑つた。

「佛蘭西人の中にも、さういふ人がありますからねえ。」  
とマテランは低い聲でその話を私にした。

## 九十二

マテランの家族に逢つて忘れがたいことは、いかにも佛蘭西の百姓のわだかまりのない性質が感じられることであつた。私は自分の下宿に歸つてからも、その事を胸に浮かべた。私の部屋の書棚にはリモオジュ土産の民謡がある。それは私があつた頃、エドワアルに頼んで買求めたものである。私はその民謡をマテランの家族に結びつけて見ることさへ楽しみに思つた。

La Jimousina.

Chanson

en

Potuei.

リモオジュの方言でつくつた唄のかす／＼が斯うした表題のもとに集めてある。

『女の百姓に』とか、『野の一日』とか、それからまた『冬』とかの唄はどうかすると百姓の子供の口

エトランゼ



にも上るもので、エドワアルはわざ／＼私のためにその方言の唄の文句を普通の佛蘭西語に書き直して置いて呉れてあつた。

濃い霧で町の空も暗いやうな日がそれから續いた。時としては町々の屋根に近い空の一部に淡黄な光のほのめきを望み、時としてはめづらしく明るく開けた空に桃色の雲の群を望むやうな日があつても、また／＼暗く閉ぢ籠められた心持で暮しがちであつた。あの灼熱の色に燃えて、しかも凍り果つるといふ太陽は、北極の空を想像するまでもなく、巴里に居てしば／＼見られるものだ。寒い雨の來る晩などは、遠く離れて居る國の方の友人等の名前を呼んで見たいと思ふことすらあつた。

避けやう／＼とした旅の佗しさが復た私のところへ襲つて來るやうに成つた。黄なミモサの花や、小さな水仙のやうなナアシスに僅かに春待つ心を慰める正月の十日頃になると、いつの間にか私は濃い無聊に包まれてしまつた。私はそれに低氣壓といふ名をつけたが、どうかするとその恐ろしい低氣壓は半月も續くことがあつた。

## 九十三

その年の二月は殊に長い思ひをした。きびしい寒さも絶頂に達したかと思はれる頃には、しばらくシモノエに同宿した郷司君を瑞西の方へ送り、再度巴里の客となつた郡君を復た倫敦の方へ送つた。開戦以來全く消息の絶えて居た宮本君が白耳義の修道院を逃れて英吉利の方へ渡り、もう一度巴里へ歸つて來たのにも逢つた。

やがて三月を迎へるやうに成つても、まだ／＼私は冬籠りの有様から脱けきることが出来なかつた。ある日、六頭の馬に曳かれた砲車の列が私の下宿のあるポオル・ロアイアルの町を通つた。一砲車ごとくに彈藥の函を載せた車が八頭の馬に曳かれてその後から續いた。街路に集まつて斯の光景を見る市民の中には、一語熱狂した叫び聲を發するものもない。いづれもみな靜肅な沈黙を守つて馬上の壯丁を見送るもののみであつた。斯の光景は何を語るものであつたらうか。戦時の空氣はそれほど濃い沈

鬱なものと成つて来て居た。私は水を打つたやうな、しーんとした町のさまを眺めて、數月前よりは一層胸を打たれることがあつた。暮の淋しいクリスマスを送り、正月を送り、一日は一日より斯の空氣の中へ浸つて行つた。はげしい亢奮と動搖との時は過ぎて、忍耐と抑制との時がそれに代つて居た。斯うした町の空氣の中で、十七歳ばかりの青年の群に町で行き逢ふほどいたゞしい感じを起させるものはなかつた。それらの青年は皆學生であるらしかつた。普通の服に革帶を締め、腕章を着け、脚絆を巻きつけ、銃を肩にし、列をつくつて、兵式の訓練を受けるために公園の方へ行くのであつた。中にはまだ若々しい聰明な面ざしのものをも見かけた。彼等はいづれこの戦争に参加しようとして居る若者達だらう、自分等のことにしたら短い袴を着けて友達と一緒に學校へ通つて居た年頃だ、さう思つて、私はよく町中に佇立みながらその群を見送つた。

『マテランの家のアンリイですら今年には兵士になるんだから。』  
それを思ふと、漸く青年期に達したばかりのやうな、身體もまだろく／＼出来て居ない、若い兵士を町で見かける度に、ひとごとゝも思はれなかつた。

丁度英吉利の新軍が續々海峡を渡りつゝあるといふ報知の傳はつて来る頃であつた。巴里の市民は又、近い將來に、オスタンドからアルサス・ロオロンに亘る長い戦線に獨逸軍の襲撃が何等かの形であらはれて来ることを豫期する頃でもあつた。あまりの息苦しさに、私は村上君と連立つて、サン・ゼルマンの長い並木町をセエヌの河岸まで歩いて見たこともあつた。あのモオバツサンの作物などに書いてあるサン・ゼルマンの古い通りは私が好きでよく足の向く道だ。そこはもう割合にさびれた町で、モオバツサン時代の繁華はグラン・ブウルヴァルの方に移つたといふが、私達はそのさびれた町を味はうとして歩いた。ルーヴル宮殿の古い建築物やチュレリイ公園の石垣が對岸に見えるセエヌの河岸へ出た。河の流れも何となく霞んで見え、岸へ立つマロニエの並木も芽ぐみ、寂しい戦時の冬らしく萬物は凍り果てた斯の歴史的の都へも、漸やく春が近づいたかと思はせた。

巴里の町には響がある。東京の町には響がある。巴里の町にも響は無いではないが、あの東京の方で聞く勇ましい鬨賣の聲や、花賣、辻占賣の聲や、四季折々の物賣の聲にかぎらず、車夫は聲を掛け、按摩は呼んで通り、押して行く荷車の前後にまで響があつて、下町の空氣の濃いところになると流行唄、假白づかひ、廣告の口上、飴屋の歌、其他數へきれないやうなあの朝晩の賑かさに比べると、ここにはあれほどの響はない。全く東京の町は響で満たされて居るやうな氣がする。そのかはり巴里は響だ。人の代りに器械や馬の働く響が石づくめの町の空に搖れて来る。

この響はおそろしく私の耳について来た。のみならず私はこの響を聞いて居ると、つく／＼國の方の遠さを思つた。もし私に佛蘭西語を修める樂みもなく、日に／＼延びて行く言葉の芽をつけて行くやうな樂みもなかつたなら、其の年のやうな冬の無聊には私は耐へられなかつたかも知れない。自分の部屋の窓へ行つて、灰色の光線の射して来て居るところで、東京の柳田君から繪葉書のはしに書いて

よこして呉れた『寂寞懐君』といふ言葉などを私はよく胸に浮べて見た。冷い感じのする窓の硝子を通して望まる、町の空は暗いとは言つても、早なんとなく春めいた紅味を含み、遠い建築物の屋根や煙筒も霞んで見え、底温い三月になつたことが自然と感ぜられなくてもなかつた。さふいふ日には、殊に春待つ心が浮んで来た。

ふと、喇叭卒を先に立てた佛蘭西の歩兵の一隊がゴブランの方から進んで来た。久し振りで聞く軍隊の相圖の笛の音が私の耳に入った。この歩兵の一隊は町の側に來て足を休めて行くところであつた。冬枯のプラタメの並木の下あたりは、寄せ集めた銃や肩から下した背囊で埋められた。騎馬から下りて休息する將校等も見えた。窓から眺めると目の下に見える兵卒等の軍帽を包んだ紺色の布や、防寒用の新服から、一番先に私の胸へ来るものはその汚れた感じで、風雪の勞苦が思ひやられた。町々の婦女は出て、争つて斯の兵卒等をねぎらはうとした。葡萄酒を奮發する町角の珈琲店のかみさんがあれば、パン菓子を皿に盛つて行つて勤める菓子屋のかみさんもあつた。私も部屋にじつとして居られなかつた。急いで帽子を冠り、階段を下りて、この人達の中へ混らうとした。夫や兄弟や従兄弟のこと

を心配顔な留守居の婦女、子供、それから老人が休息する兵卒等の間を分けて、右にも左にも群がり歩いて居た。思はず私も自分の洋服の隠袖から日頃好きで燻す佛蘭西の紙巻煙草の袋を取り出し、側に居た五六人の兵卒にそれを勧めた。

## 九十五

旅人よ。足をとめてよ。お前は何をそんなに急ぐのだ。どこへ行くのだ。なぜお前の眼はそんなに光るのだ。なぜお前はそんなに物を捜してばかり居るのだ。なぜお前はそんなに齷齪として歩いて居るのだ。

旅人よ。お前はこの國を見ようとしてあの星の光る東の方からはる／＼とやつて来たのか。この國にあるものもお前の心を満たすには足りないか。

旅人よ。夕方が来た。何をとお前は涙ぐむのだ。お前の穿き慣れない靴が重いのか。この夕方が重いのか。それとも明日の夕方が苦しいのか。

旅人よ。なぜお前は小鳥のやうに震えて居るのだ。假令お前の命が長いく／＼艱難の連続であらうとも、なぜもつと無邪氣な心を持たないのだ。

旅人よ。足をとめてよ。この國の羅馬舊教の季節が来て居る。お前も来て主の受難を記念する夕方に憩へ。お前に食はせるパン、お前の飲ませる水ぐらゐは、ここにもあらうではないか……………

私がこれを書きつけて見た頃は、やがて三月の下旬のはじめで、カトリックの國でいふ『バツション』の日を迎へて居た。私はこんな旅の寢言を紙に書いて、正宗君がシテエ・ファルギエールの畫室の方から見えた時に、君に贈つた。

そのうちに、溫暖い雨がやつて来るやうに成つた。来るか来るかと思つて、斯の雨を待侘びた心地はなかつた。私は五箇月も前から——旅の冬籠りの間——唯それはかりを待つて居たやうなものだつた。

かういふ私の周囲には何があつたらう。佛蘭西國境の山地寄りの方では塹壕が深く積雪のために埋められたとか、戦線に立つものゝ霜凍を救ふために毛布を募集するとか、さういふ勞苦を思ひやる市民の心がその日まで續いて來た。開戦以來、五六十万の佛蘭西人は既に戦死してゐるとの話だつた。この戦争が終る頃に満足な身體で巴里へ歸つて來るものは少なからうと言ふ話だつた。私が町で行き逢ふ留守居の婦人でも老人でも子供でも、やがて來る新しい春を待つて居ないものは無いやうであつた。寒苦、寒苦——この避けがたい戦争の悩みの中で、世界の苦の中で、草木の再生がやがて自分等の再生であることを願つて居ないものは殆んどなかつたらう。

前の年に比べると、並木の芽出しもすつと後れた。ブラタヌの木などはまだ冬枯そのまゝであつた。漸くマロニエの芽がほつ／＼ふくらんで來た。しかし日は餘程長くなつて來た。空も明るくなつて來た。最早暖爐もなしに暮せた。一雨毎に私は春の來ることを感じた。あらゆる草木が活かへる中で、やがて來る若葉の世界を待つのも樂みだ。あの白い蠟燭を立てたやうなマロニエの花が若葉の間に咲いて、冷い硝子窓からも、石の壁からも、春の焔が流れて來るのは最早遠くはなからうと思はれた。

## 九十六

誰か部屋の扉を叩く音がする。何時から懸念にするともなく私の許へ來るやうに成つた一人の外國人がある。日がな一日寂寞に閉される思ひをしたり、訪れて來るものも少い旅の窓に國の方のことを案じ暮したりして、煤けた壁も慰みの一つに獨りで時を送るやうな折には、きまりでその外國人が扉を叩きに來る。そして私の前に朧掛け椅子を引よせ、そこに腰掛けて、しみ／＼とした調子で私の話相手に成つて呉れる。

「これが君の子供から送つて來たお清書かね。細いペンで書いた字ばかり見つけて居て、こんなに大きく書いた字を見ると、不思議な氣もするね。」

こんな調子で私に話しかけるのも、あのエトランゼエだ。

私は國の方に居た頃、露西亞のゴルキイの短篇をある雑誌で讀んだことを思ひ出す。それにはある少年が獨り身の婦人に頼まれて、その婦人に又頼みにされたといふ男に代つた手紙を幾通となく書いたといふ話を思ひ出す。無邪氣な少年は婦人の言ふまゝに、知らない男の代理を勤めくした。ところがその男は、實は婦人が假想の情人であつて、そんな手紙を遣取りすると考へるところから、僅かに孤獨を慰めて居たのだとしてあつた話を思ひ出す。丁度、私のところへ話し込みに来るエトランゼエがそれだ。何時の間にか私はそんな人物を自分の相手として、それによつて旅の朝夕を慰めるやうに成つた。

こんなことを書きつけたら、人は笑ふだらうか。旅はそれほど私を空想的にした。慰め難い無聊と、信じ難いほどの無刺激とから、私は全く外界に縁故もなければ關係もない自分を見つけることがよくあつた。そして、寝る道具から顔を洗ふ道具から便器まで具へつけてあるやうな室内で、どうかすると物食ふこと、眠ることより外に自分を慰める方法もなくなつて、晝飯が濟めば夕飯の時の來るのを思ひ、夕飯が濟めば早く寢臺に上る時の來るのを思ふやうな、そんな自分を見つけることすらもあつ

た。何といふ苦い晝寢をこの旅で味はつたであらう。さういふ私の側へは、あのエトランゼエがやつて來て居て、否でも應でも私はその話し相手に成らねばならないやうな氣がした。そんな外國人が遠く國を出て來た時の航海の道連れにあつたでもなく、マルセエユの港の方で私を待ち受けて呉れたでもないが、行けるだけの旅を行かうとする間には、そんな人物を友とする氣にもなるものかと自分ながらあはれに思つた。

『さびしさに居るものは、さびしさを主とす。』

と言つた昔の人もあつた。旅にある私をさびしがらせに來るのも、私の孤獨が生んだあの幻影だ。ある日も、私はルエキサンブウリの公園を一廻りして來た。あの公園内の草地の一角に、前の年の夏あたりからある臺石の据付が仕掛けてあるのを見て置いた。その邊は公園内と言つてもサン・ミッシェルの通りに接したところで、ジョオ・ジュ・サンの石像のあるあたりに近い。誰かの像でもあの臺石の上に置かれるのか、と思つたら、いよく出來上つたのを見ると白い大理石の碑だ。

『スタンダールニ獻ず。』

として、その下にあの佛蘭西の文學者の生死の年號が彫つてあり、碑の裏面には『愛』をはじめ『羅馬の散歩』、其他の著書題目のみが並べてあらはしてあつた。ゆかしい石碑と思つて引返して來ると、下宿には例のエトランゼエが私を待受けて居て呉れるやうな氣がする。さういふ石碑一つでも、私はそれを見つけた時の旅人らしい歡びを分けずに居られなかつた。

ある日も、巴里郊外にあるモレル君の留守宅を見舞ひに行つて、セエヴルの橋のたもとから電車でセエヌ河の岸を歸つて來た。一大樹園の感あるエリゼエの附近からコンコルドの廣場、テユイルリイ公園の石垣の側、ルーヴル王宮の窓の下を通つた。黒い並木の幹の見える對岸の建築物の間を通して、向ふのソルボンヌの丘の方には古い寺院の尖塔を望んで來た。あの邊はまるで石の建築のオーケストラだ。層々相重なる諧調の結晶だ。全體として見た灰白な町の感じも好い。電車から下りて、サン・ミッシェルの石橋の上にかゝると、ノオトル・ダムの寺院の古塔が桃色の夕日に染まるのを見た。私は今更のやうに佛蘭西人の建築的才能と傳統を重んずる冷靜な意志とを思ひ、尊敬と羨望の念を禁ずることが出来なかつた。

「やつぱり違ふなあ。」

と私は下宿に歸つてから獨りでそれを言つて見た。さういふ場合に私の側へ來て、私の内にも外にも居て、私の言はうと思ふことをよく聽いて呉れるやうな氣のするもの、あのエトランゼエだ。

## 九十七

國を出た當時、東京の蒲原君はある雑誌の上で私に饒別の言葉を寄せて呉れたことがある。その中に、『創作の材料を探しに行くといふやうなことは自分は願はない、何一つ土産はなくともいふ、唯さういふ歐羅巴の空氣の中に居て多少なりとも自己に刺激を受けるといふことがあつて欲しい、』といふ意味のことを讀んだ時は、さすが蒲原君だ、好いことを言つて呉れたと思つた。あれは私に取つてありがたい言葉であつたと思ふ。さう言つて呉れる東京の友人の心持が思はれたり、歐羅巴へ來てから以

來のことがしみじみと胸に浮んだりするやうな折には、その旅の心を私はよくエトランゼエの前に持つて行つた。

自分の影法師のやうでもあり、外からこつそりやつて來るものゝやうでもあり、斯うした長い旅の途中に隠れ潜んで居たものゝやうでもあり、私がエトランゼエを迎へ入れる心持は一寸説明する事が出来なかつた。唯、感ずることが出來た。あだかも暗夜の實在を感じ得られても、それを説明する事の出來ないのに似て居た。私は正宗君や高村君に笑はれるのを恐れて、ついぞこんなことを誰にも口外したことはない。しかしエトランゼエはよく私の側へ來た。私もまた、あの外國人の前では何でも言へるやうな氣がした。

「随分君も黙つて暮してゐるね。さう君のやうにむつかしく考へるからいけない。それでは反つて話が出来なくなる。間違つたつて、何だつて、そんなことは君、かまふものか。どしどし話すがいぢやないか。文法などに拘泥する必要はすこしも無い。現に君の國の言葉を見給へ。君の國には文法といふものが無い。それでも言葉は立派にあるぢやないか。君のやうに黙つて居るから、旅が苦しくな

るよ。」

こんな風に、エトランゼエは私に物を言つて見せて呉れる。全く、この旅に來てから最初の一年ばかりといふは、私も佛蘭西人の中に黙つて暮したやうなものだ。『今の自分は夜の鳥のやうに無言だ、』と書いて、亡くなつたモレル君のお母さんに笑はれたこともある。いくらかづゝ私の耳があいて、下宿の食卓で一緒になる人達の言葉が聴取れるやうに成つてからも、私の方からは思ふやうに話せなかつた。私は自分の言はうと思ふことを先づ英語で思ひ出して、それを佛蘭西語に譯して見るやうな二重な手数をかけた。時には發音だけが佛蘭西語でも、その實、英語で間に合せて居て、下宿の主婦などをごつかせることがよくあつた。こんな話の下手なものが外國人ばかりの中に混つて、どうして十分な應酬が出來よう。異邦人の悲しさには、私はたゞ髪の色を異にし皮膚の色を異にし眸の色を異にするといふばかりで、どのくらゐの嘲笑を耐へて來たか知れない。私を客とする下宿のシモネエでさへどうかすると巴里の眞中で迷ひ子になつたといふ支那の紳士のことなどを引合に出して、私にからかふやうな口吻を泄すことがある。これは必ずしも異人種の確執とばかりは言はれない。多くは日常生活



活の退屈から来る。さういふ場合に私達の取り得る方法は、先方を怒らせない程度でそつくりその嘲笑を先方に返してしまふことである。ところが串談の一つも言へないやうな私の覺束ない佛蘭西語では、とてもその腹癒せは出来なかつた。沈黙あるのみだ。

私がエトランゼを友とするやうに成つたのも、どうかしてこの沈黙から紛れよう／＼と努めた結果かも知れない。私は獨語を言つて居るのか、それとも相手に聽かせるつもりで物を言つて居るのか、その差別すらもつけかねた。

その時になつて見ると、私の旅の心も可成深かつた。假令私の話し得る範圍はそんなに狭い不自由なものでも、新しい言葉の世界は日に／＼私の前に展げて來た。矢張自分は少年時代から英語を修めて置いた甲斐があつて、何程こんな時の助けになるか知れないと思つた。よく私は自分の旅窓から巴里を望んで見て、一つの大きな倉庫に譬へたことがある。この倉庫を開くには、どうしても言葉だと思つたことがある。どうやらその鍵が私の手に入りかけて來た。例へばルナンだ。あの佛蘭西の學者が書いた名高い『基督傳』は私などの青年時代から馴染に思つて居た本だ。上田君、平田君、戸川君、

友達ばみな若つかた時代に、私達は一冊の英譯の『基督傳』を引張り合ふやうにして互ひに讀み耽つたものだ。どうだらう、あの舊い馴染の本が單獨な基督の傳記ではなくて、實は『基督教起源史』中の一巻であると知つた時の私の驚きは。これは一つの例に過ぎない。私はミシユレエも知らずに佛蘭西へ來たほどの初心なものだ。そのかはり私の學び方は自由で、自分の詮索を妨げられるやうな先入主となつたものもなかつた。

讀まう／＼と思つても讀めなくて藏つて置いた佛蘭西書で、復たそれを取り出して見ると何時の間にか讀めるやうに成つた時ほど私に取つて嬉しいことはなかつた。その新しい歡びに浸つて行く思ひで、私はブウルジェの『現代心理論集』を開けて見た。ユウゴオからフロオベールにいたる時代の多くの佛蘭西人が自國に失望した心は、實に佛蘭西革命の悲惨な結果に胚胎するといふ。より好き社會を實現しようとして企てられた舊い社會の破壊は、意外な影響を人の心に及ぼした。多くの佛蘭西人は自國に失望して、遠い國外へと憧憬の心を馳せた。獨逸へ、英吉利へ、西班牙へ、亞米利加へ、印度へ。斯うして佛蘭西國境を越えて行く人の心が時代の文藝に反響せずには居なかつた。これが佛蘭西のエ

キゾオチズムであつて、遠い支那に關する著述などが未だ曾て東洋を見たこともないやうな佛蘭西人によつて書かれたのもその時代であるといふ。あの『現代心理論集』にはその邊の消息がいろ／＼に傳へてある。

斯うしたことが分りかけて來ただけでも、私はそれを亡くなつたモレル君のお母さんなどに結びつけて見て、すくなくぬ興味を覺えるやうに成つた。この旅に來て私が懇意にするやうになつた僅かの佛蘭西人の中でも、一番最初に私を迎へて呉れたあの老婦人の奈何なる人であつたかは、その時になつてはじめてはつきりと私に見えて來たやうな氣がした。日本から渡來した古風な金糸の繡のある布で長い窓掛を造つてあつたのも、あの老婦人の居間だ。『日本といふものは私に取つて空想の郷でしたらね、』と言つたことのあるのも、あの老婦人だ。ビエル・ロチといふ人の腕に日本の刺青のしてあることまで知つて居て、それを私に話し聞かせたのも、あの老婦人だ。あれほど濃い異國趣味を持つた人にゴオチエ夫人のやうな友達があり、その人の姪にサランソンさんのやうな日本最良の婦人があるといふことも、漸く私には不思議でなくなつて來た。

見て來ると、こゝにも『時』の動いた足跡には争へないものがある。遠い異國の空に憧憬の眼を見張つたといふ多くの佛蘭西人の心は、丁度それに比例する熱心を以つて、もう一度自國に歸つて來たと言つていふ。そして、曾て失望した政治にも、教育にも、舊い舊い宗教にも、新しい情熱を見つけたと言つていふ。私はある佛蘭西人がその時代の轉機をドレフユウス事件にまで持つて行つて見せたことを覺えて居る。現代の佛蘭西を解するには、どうしてもあのドレフユウス事件を知らねば成らない、とその人の言つたことを覺えて居る。佛蘭西の軍隊も、佛蘭西の教會も、おそらくあの當時は極度の腐敗に達して居たのだらう。『私達佛蘭西人が自分等の内にある好いものを護らねば成らないと氣つき始めたも、あゝいふドレフユウスのやうな事件があつてからだ、』とその人の言つたことも忘れられない。旅人としての私の前に生起する幾多の現象は何かと言へば、傳統の回復でないものはない。佛蘭西運動でないものはない。新しい愛國心の發露でないものはない。『自分等は互ひに取る道こそ遠へ、同じ佛蘭西のルネッサンスを期待する、』と言つたあのパレスの言葉も想ひあたる。

私が旅の窓から見直さうとして居たのも斯の佛蘭西だ。自分の國のことすら言ふのは容易でない。ま

してや他の國のことだ。たゞ、斯うして客舎に暮して見るうちには、自然と自分の心に彷彿するものはあつた。幻を浮べることは出来た。その意味から言へば、戦争以前に私の眼に映つた一切のものは、随分行き詰つたものといふ氣がして居た。もつと精しく言つて見るならこゝには何程の廣大な天地があるか知れない。しかし私の胸に纏まつて浮んで來るものを言へば左様だつた。言葉をかへて言ふなら、現代生活の倦怠だ。こゝに發散する空氣は随分氣息の詰るやうなものといふ氣がしてならなかつた。そこへ戦争が始まつたのだ。私は佛蘭西にある年若な人達が何程アルサス、ロオレンを失つた恨みや獨逸に對する復讐心で燃えて居るかを知らなかつた。唯私には、丁度あの「アンナ、カレニナ」の終りに書いてあるヴロンスキイの出發のやうにして、進んで戦地に赴き、自ら救はうとする若い佛蘭西人のあることを想像するに難くないやうな氣がした。佛蘭西の再生——心あるこの土地の人達が戦時にかけて熱望しつゝあつたのも、その死の中から持ち來す新しい力ではなかつたううか。春の來るのが待遠しかつた。

## 九十八

そのうちに獨逸の飛行船が襲つて來るやうに成つた。三月二十三日の夜のことだつた。獨逸の飛行船は巴里の市中と市外とに爆弾を落して行つた。

この出來事は、オスタンドからアルサス、ロオレンに亘る長い戦線の方でも最早冬營の時でないことを語り、そよ／＼と吹いて來る南風が空中の活動を助ける季節になつたことを語つて居た。獨逸の飛行船から襲撃を受けた場處は巴里の北はづれで、損害も大したことはなかつたと聞いた。さういふ私などは實は何も知らずに熟睡して居たくらゐるだつた。翌朝になつて、あの昨夜の騒ぎを知つて居るか、敵の飛行船をめぐめて撃つた深夜の砲聲を聞いたか、と人に言はれて初めて左様かと知つたくらゐるだつた。二十四日には町々の警戒は一層きびしくなつて、あらゆる街路の燈火も消された。楽しい南風の來るやうな夕方で、淡い新月の光も空にあつた。點燈頃に早く窓の戸を閉めるのも惜しい氣が

した。その晩は寢臺に上つてから、けたましい物の音に眼をさました。自動車で飛ぶ警戒の喇叭が深夜の町々に響き渡つた。

「ゼエブランだ。」

それが咄嗟に私のあたまへ來た。私は急いで身仕度した。屋外に出て見るつもりで、部屋の廊下づたひに臺所の側を横ぎらうとすると、扉の開いたところから蠟燭の光が溢れて居た。

「屋外が騒がしいやうですね。」

と私が行きがけに聲を掛けて見た。主婦は臺所の隅に震へながら、しきりに祈禱でもあけて居るらしかつた。

夜の十時といへば階下の「アンツレエ、ソオル」に住む家番は表の扉を閉めてしまつたが、私がつものやうに聲を掛けると、家番のおかみさんも眼をさまして居ると見え、すぐに表の入口の重い扉を開けて呉れた。屋外は暗かつた。燈火一つ溢れる窓もなかつた。六層もしくは七層から成る高い町々の建築物はいづれも形をひそめて、夜の闇に隠れて居た。私は天文臺前の廣場まで歩いて行つて見た。

そこまで行くと、遠い夜の空を照すサアチ、ライトが物凄く私の眼に映つた。敵の飛行船を捜さうとするらしいその光は、どうかすると右からも左からも町の空を貫いた。廣場の中央にある銅像の側あたりには、そこにもこゝにも町の人達が黒い影のやうに動いて居た。

翌朝の新聞を見ると、また敵の襲つて來たことが報じてあつた。尤も、敵は佛蘭西側の飛行機の迎へ撃つのに逢つて、その晩は巴里までは來られなかつたとしてあつた。なぜ、獨逸軍はあんなつまらないことをするのか、今頃飛行船で巴里を襲つて見たところでそれが戦線の上に何の影響をするのか、と第三者は言ひ合つた。おそらく獨逸軍はそれを何等かの政略に供し、新聞紙上に吹聴し、漸く戦争に疲れて來た國內の不平を沈めようとするのであらう、と言ふ人もあつた。なにしろ、二十三日の夜に敵の落した爆弾のため二三十人の市民が負傷したのは事實らしい。「ラクション、フランセエズ」のレオン・ドオデエなどは、まるで『空中の海賊』の所業だと言つて憤慨した。

この出來事があつてから、早速巴里の北はづれまで被害後の状況を見に行つて來たと言つて、その話かたぐい私の下宿へ見舞に寄つて呉れたのは、日本銀行から留學する青木君であつた。君は在留同胞

の委員の一人として、開戦當時の同じ記憶につながれて居る人だ。この青木君に、逓信省から留學する村上君、佛蘭西法律の研究のために來て居る鶴峰君、これらの諸君は同期に大學を出た法學士仲間といふことであつたが、先方からも訪ねて來て呉れ、私の方からも訪ねて行つて、互に足繁く往來するやうな機會を造つたのも、矢張この出來事があつてからであつた。私は又、シテエ、フアルギーエの方集まる美術家仲間の無事な顔を見に行つて、私などが何も知らずに熟睡して居た二十三日の晩に、晝室々々を叩き起しに歩いたといふ高村君の話を聞いた。事ある毎に集まつて、互に無事を祝し合ふのも旅らしかつた。巴里も最早一時のやうに包圍されかゝつた位置ではなし、市としても出來るだけの警戒を怠らなかつたし、露西亞側の戦報はむしろ壤地利方面の勝利をさへ傳へて居る際であつた。獨逸の飛行船が襲つて來たと言つても、私達は大方もう戦時らしい空氣に慣れて居た。むしろ私達はこれが電報で傳へられた時の國の方の人達の驚きを語り合つた。その頃は、山本、森田、長谷川の諸君も既に英吉利の方から歸つて來て居た。開戦當時の混亂のため一時離散した美術家仲間もまたほつくと巴里に集まりつゝあつた。

## 九十九

「でも、好い陽氣になりましたね。燕のかはりに飛行船が飛んで來るやうに成りましたね。」  
こんな串談を言つて、私は下宿の主婦を苦笑ひさせた。主婦の顔を見る度に私は敵の飛行船の來た晩のことを思出すやうに成つた。何故といふに、平素の彼女は可成強いことを言つて居て、今少し自分が若からうものなら、獨逸軍の本營へ忍び込んで行きたい、カイゼルの首でも何でも掻き切つてやりたい、そして佛蘭西婦人の意氣を示してやりたい、とそんなことを口癖のやうにして居たから。その時になつて見ると、漸く私も長い冬籠りの状態から抜けきることが出來たやうな氣がした。大使館に在勤する菊地君の家で子供の誕生の祝ひがあつたのは、あれは飛行船の騒ぎすこし前のことであつたが、あの菊地君の家の方から徒歩で歸つて來た晩あたりには木の芽の萌える暗い並木路ももう餘

程春らしかつた。

三月末の日曜には羅馬舊教の「枝の日」が来た。町の子供は常盤木らしく緑の濃い黄楊の小枝をたづさへて寺院へ通つた。ファルギーエルの寒い晝室を出てマロニエの芽の延びた並木街を通つて来る正宗君等の顔付までが、何となく延びくゝと見えた。

私は正宗君に言つた。

「君もよくあの晝室に辛抱しましたね。なんだか今年の冬は特別に長いやうな気がしましたね。」

正宗君をねぎらふ心は、やがて私自身をねぎらふ心であつた。實際、國の方では知らなかつたやうな、こんな言葉の不自由と、やるせない沈黙と、襲ひ来る無聊とに耐へてまでも、何物かを歐羅巴から學んで歸らうとする正宗君達の熱心を思ふといぢらしかつた。

私はまた正宗君に言つた。

「君等は感心だ。よくそれでもお互に助け合ふね。」

「僕のところへ来るモデルもそれを言ひましたよ。」日本人は皆、貧乏だ、そのかはり感心に助け合ふ、

他の國から來てゐるものには決して左様いふことは無い」んですつて。」

と正宗君は答へたが、自分等の内にあるこの性質が一つは同胞の旅行者を結びつけもするのだと思つた。異郷の旅に來て見て殊に私はそれを感じた。

しばらく「シモンヌの家」も訪ねなかつたので、私は正宗君と一緒に熱い珈琲の一杯も飲ませてもらふつもりで、例の小さな店をさして出掛けた。最近に正宗君と私とは日本から派遣された赤十字社の救護班をホテル・アストリアに訪ねて、そこに班長として働いて居た鹽田君はじめ、めづらしい同胞に逢つて來た後だつた。その時の同行者は正宗君のほかに、私が下宿の食卓で毎日のやうに顔を合はせる村上君、それに鐵道院から留學する青木君などであつた。巴里の中心地の一つともいふべきエトワアル凱戦門附近の大建築物の屋上に、町の空高くひるがへる旭日旗を見て來たことも忘れられない。

「日本は好いものを送つて呉れた。その設備には申し分がない。その一切は現代の日本の進歩を具體的に歐羅巴人に示して呉れた。」とさも肩身の廣さうに私に話したあのニゼット・ジユバン女史の言葉も忘れられない。女史は日本人を母親とする人だけに、この言葉があつたのだ。私は正宗君と二人で

みち／＼その話をして、赤十字社の假病院だか交際場裡だか分らないやうに篤志看護婦としての多くの佛蘭西の貴婦人が往つたり來たりして居たホテル・アストリアの廊下の噂をしながら、サン・ミツシエルの通りまで歩いた。

ルキサンブルの公園に接した『シモンヌの家』の前あたりの並木は、マロニエの芽の延びたのが最早一寸にも及ぶのがあつた。丁度、國の方の春の彼岸時分を思出させるやうな陽氣だ。その小さな珈琲店まで行くと、フアルギエールの方面からやつて來る美術家仲間の誰かしらに逢へて、戦争以前と同じやうに『山本』とか『高村』とか親しげに呼びかはす聲も聞かれた。佛蘭西の飛行隊に加はつて佛蘭西人の兵士と衣食を共にして居るといふ石橋君なども、めづらしい軍服姿をその珈琲店に見せた。復活祭も近づいて居た。巴里での最も楽しい四月、五月の待たれる心が誰にもあつた。私は通り越して來たその年の冬の激しさを考へて、自己の禁錮にひとしいところからでも遁れ出たやうに、同胞の在留者の間に混る喜びを思つた。

宮本君は私が旅で逢つた同胞の中でも稀に見る美しい人で、しかもその若々しい容貌が靜かな感じを與へる方の美しさであるのは、白耳義の修道院にでも入つて宗教生活を辿らうといふ人にふさはしかつた。すこしも柔弱なところのない、對ひ合つて居ても氣持のよい青年だ。

この宮本君が私の下宿の方へ訪ねて來るのを迎へ入れて、白耳義から英吉利に逃れ更に此巴里へ來る迄の旅の途中で君が遭遇したといふ同胞の噂を聞くのもうれしかつた。何と言つても互に手を引き合つて長道中を凌いで行かうとするやうな同胞の旅行者の中に、君のやうなロオマンズと宗教的な憧憬とをもつて國を出て來た青年もあるか、とそれを思ふといぢらしくもあつた。

「私もいよ／＼前途の方針を決めなけりや成りません。一切を捨て、僧籍に入ることになりますか。それとも國の方へ歸つて行くことにしますか。母は歸れ／＼と言つて、しきりに國から手紙をよこすん

です。母でもなかつたら、とよく私はさう思ひますよ。でも私はこれ以上、母に心配させる氣にも成りません。それほどまでにして寺院に入つてしまはうといふ氣にも成れません。私の母といふのは、それは私のことを思つて居て呉れますからね。兎も角も、私はリオンまで歸つて行くつもりです。』こんな話が宮本君の口から出た。『自分はまだ若い』と言ひたけな宮本君の額つきを眺めたり、私のやうなものでも頼りにして度々よこして呉れる手紙のことなどを考へたりすると、君の話は他事とも思はれなかつた。さういふ私も、口にくそ出せなかつたまでも、前途の思ひに胸は塞がりつゞけて來た。宮本君は白耳義の修道院の方で戦時に際會した當時の話をした。君は獨逸軍によつて占領された白耳義に最後迄踏みとゞまつた極僅かな同胞の中の一人であつたといふ。あわたゞしく英吉利の方へ引揚げて行つた白耳義在留の同胞のことを思ひやりながら、唯一人の自分を修道院に見つけた時の心持はなかつたといふ。殊にその修道院へさびしい静かな黄昏が追つて來た時の空氣ほど身にしみたものはなかつたといふ。君はその修道院の建築物が一夜獨逸軍の將校達の宿泊所に宛てられた時のことを私に話した。日の暮れる前には、修道院では前觸のあつた敵の將校を待受けた。どんな狼藉を働かれる

かも知れたものではないといふ心が修道院に朝夕を送るものゝ皆にあつた。僧侶達は修道院の庭の土を掘つた。日頃の飲料とする葡萄酒の罎の多くがその土の中に隠された。この事は敵の將校を待受ける前の狼狽した一同の力によつて實に迅速に爲されたとのことである。やがて幾臺かの軍用自動車の響が聞えた。勝ち誇つた獨逸軍の將校達が着いたのだ。反抗する僧侶でもあらうものなら拳銃でもつて一撃のもとにそこへ打ち倒しさうな勢ひだ。炊事用の自動車が煙を立て、その後から續いて來た。ある地點から出發して來た將校達がその修道院へ着く迄にはあたゞ、かい夕飯のスウプがちやんと出來て居るやうに炊事用の自動車まで用意して來たところを見て、いかに獨逸人の綿密で注意深いかを思はせるものがあつたとか。宮本君はそれらの無遠慮な自動車が修道院の庭の内まで入り込んで來た時のことから、縦横に深い轍の迹を印した庭の草地の光景まで、あだかも眼に見えるやうに話した。靜かに咲いた草花も何も車輪のために踏みにぢられてしまつた。それを目撃した時の宮本君は、強い敵愾心を抱かずに居られなかつたといふ。丁度ある獨逸の將校の宿泊した部屋が宮本君の隣室に當つて居た。宮本君は自分の部屋に居ながら、壁一重へだてた隣の部屋に寢沈まる將校の動靜を手取る



やうに知ることが出来た。今少し宮本君に自制する心が強くなかつたら、どんな手段に出たかも知れないところであつたといふ。柔和なやうでも血氣さかな宮本君は、敵の將校の一人たりとも刺し殺したいと思ふやうな口惜しさに胸を滿たされて、一晚中寢臺の上に震へ明したといふ話を私にした。四月に入る頃には、この宮本君は巴里には居なかつたと思ふ。現代佛蘭西のカソリシズムといふものを想像する私に取つて、あの十字架を背にしたやうな晩年のユイスマンスの歩いた路を承繼いでレオン・ブロアとかペラダンとかのカソリック的な作家のあることを想像する私に取つて、勞働と忍苦との古代聖者的精神への復歸が何程まで近代人の求むる純一な生活と一致するかを想像するに私に取つて、兎も角も羅馬舊教の寺院の入口まで私を案内して呉れた人は年の若い宮本君であつた。巴里にあるカソリック主義の寄宿舎で、そこに多くの學生や僧侶などの寢泊りするといふ部屋の一つに私を連れて行つて見せ、熱心な青年のみが安息日毎に集まる地下室の拜禮堂の奥までも私を案内して呉れ、他の同胞の旅行者からは聞き得ないやうな消息を私に傳へて呉れたのも、あの宮本君であつた。

「うん、宮本か。」

と言つて、多少なりともあの青年の學生時代を知つて居るものは、美術家仲間でも佛蘭西語の巧みな小柴君一人ぐらゐるものであつた。私の下宿の主婦は羅馬舊教の信徒だけに、遠い東洋の果の方からわざわざ修道院へところざしてやつて来るやうな斯様な殊勝な日本人もあるかといふ顔付で、供養でもするやうに宮本君をもてなした。その年とつた婦人らしい應接振りが、あの青年のリオンへ去つた後でも、まだ私の眼に残つた。

復活祭前の木曜日が来た。その日は基督の十字架についた日を記念するためにあるとかで、この戦時へかけて殊に寺詣りする人達が多かつた。サン・スルピイスは羅甸區の界限にある寺院の一つだ。私はオデオン劇場の廻廊に新刊の書などを覗きに行くついでに、よくあの邊を歩き廻つて、ごちやくとした町中にある古めかしいサン・スルピイスの建築物を見て置いた。獨りで訪ねて行つて見ると、寺院としての清らかな感じに於いては到底ノートル・ダムなどに比ぶべくもない。造花を飾り蠟燭をつけた祭壇のさま迄も、年寄や子供の心を迎へるやうに見えていやしかつた。唯一つ、復活祭前の木曜日ではなくては見られない様なものが私の眼に映つた。それは銀製の十字架像だ。私はそれと同じやうなものを

リモオジユの田舎家での壁の上にも見て来たが、この寺院の祭壇の後方に横にしてあつたものはあれを大きくしたものと思へばいゝ。入れ替り立替りその場所に近づかうとする参詣の人達が私の周圍にあつた。黒い晴衣のまゝ片膝で脆座ひざまづいて、思ひくゞに基督の像に接吻して行く娘達を見かけた。何と言つてもこゝは羅馬舊教の國だといふ氣がして、その日も私は宮本君が残して置いて行つたいろくゞな言葉を思ひ出した。あの青年も僧籍へは入らずに、結局國の方へ歸つて行く人であつたらう。

カレエムの季節が終ると、もう待ちに待つた復活祭の日が来た。温暖い春雨は旅の窓にふりそゞいだ。かすかなと言つてもかすかな微雨こぼりの來るやうな日が、それから續いた。それに濡れて町々を歩くものも心持が好かつた。その間には、春らしい白い雲の浮んだ青空が急に曇つて來て、霞の落ちる音を聴く様な日がないでもなかつたが、マロニエの新芽はすんゞ延びて行つた。黒ずんだ球のやうな實の枯れ朽ちたのが長い冬の形見のやうにぶらさがつて居た。プラタマの枝ですら、一日一日と芽出しを急いだ。巴里の春はまるで初夏の感じだ、とは過ぐる年の四月に經驗したことだ。その勝手の違つたやうな心持がまた眼前の町並木にも、公園の草地にも歸つて來た。獨り暮す客舎で鼻血などの出るこ

がある、取り分け旅の心を深くした。おびたゞしく自分の髪の毛が抜けて、どうかすると朝顔を洗ふ時の洗面器に附着するのを見るやうなことも、國に居る時分にはなかつたことだ。四月の二十日を迎へる時分には私はもう何處を歩いても青々とした生氣を感じるやうな若葉の世界の中に居た。

## 百一

「メルキユウル、ド、フランス」が詩人ベギイの戦死に就いてかなり精して消息を掲げたのも、その四月であつた。それが戦時になつて初めて復活した文學雜誌であつた。印刷職工なども軍隊の方で、大抵の雜誌はみな休刊の有様だつたから、せめてあの彙報の多い「メルキユウル」を見つけただけでも旅の身にはめづらしく思はれた。私はソルボンヌ大學の附近までマロニエの若葉の美しい町を歩いて、ラルウスの書店であの四月號を買つて來た。

開戦以來、佛蘭西の文士で戦死したものの数は五十八名に上つた。そのいづれもが比較的少壯な人達であることは、いふまでもない。佛蘭西現代の文士録中にはその五十八人を削り去るわけだ。筆取る自分等に取つて、これは他事ひとごととも思はれなかつた。殊に詩人ベギイの死は佛蘭西人によつて惜まれたやうである。

深祕家にして推理家、カトリック的でそして佛蘭西的な思想の熱意ある詩人としてのベギイがあつた。後の確信に到達する迄には、可成な屈折を経たやうに見える。ベギイは人も知るやうに雑誌『カイエール』、ド、ラ、キャンゼエヌ』の創立者であつた。あのロマン・ロオランの長篇小説『ジャン・クリストフ』も先づベギイの『カイエール』、ド、ラ、キャンゼエヌ』誌上で發表されたものであるといふ。ベギイが思想生活の初期はロマン・ロオランと同じやうな傾向のもとに出發したものであつたらしい。あの二人の盟友が何時の間に思想上の別れ路に立たせられたらうか、そこまでは私には言へないが、少なくともあの二人の文學者の歩いた道によつて、さういふ時のあつた事を想像するに難くない。今度の大きな戦争はあの二人を殆ど兩極端の位置に立たしめた。この戦争に反對して汎歐羅巴の平和と人類

平等の道徳を力説するロマン・ロオランは『争闘の上に』一卷を佛蘭西に残して置いて、瑞西の山中に行つて隠れた。ベギイの取つた道は丁度それと正反對に、郷土と民族とに對する熱い愛のために燃えた。彼は進んで戦地に赴き、戦線に立ち、身をもつて衆を率ゐるやうとした。そして并ルロアの塹壕に惜しい生涯を埋めてしまつた。

この詩人の戦死に関する記事が、私の買つた『メルキュール』、ド、フランス』の新刊號に出て居た。ベギイの最後に就いては、ある軍隊の中の人から彼の細君に宛た手紙に精しい。それによると、彼がサンリ、クレルモン、シヤンティエの各所に轉戦し、最後に并ルロアで倒れたのは前の年の九月の頃だ。敵弾は彼の頭腦を貫いた。味方のものは彼の屍體を戦場に遺棄すべく餘儀なくされた。しかし、それより四日後、同じ場所同じ位置に於いて再び味方のものは彼の屍體を見つけた。彼は何等の紙片をも身につけて居なかつた。一人の戦友の彼を知るものがあつて、その屍體のベギイなることを確めた。彼には何等の苦痛の痕跡も見えず、その相貌さへも變つて居なかつたといふ。戦友は死せるものゝ名を名刺に認め、留針でもつてその下衣に留めて置いた。その年の九月の五日に、彼の屬して

居た第十九中隊の現員は二百五十人であつたが、再び彼の屍體の發見されたその日の夕方には百三十人のみが唯點呼の聲に答へた。その戦闘には中隊長さへ、ベギイに先だつて戦没した……これがその手紙の概畧だ。戦友の見るところによると、ベギイはすべての同輩より尊敬された。彼は常に勇健であつた。常に活潑であつた。假令彼の足が血潮にまみれた時でも、他の同輩に比して三倍の道程を歩いたといふことである。

ベギイは自己の信するところに向つて藝術を犠牲にした人だ。それを犠牲にしても厭はない程の確信を持ち得た近代人だ。さういふことは口には言へても、實際藝術にこゝろがなすものが藝術を捨て、自己の意象を未完成のまゝに残して置いて、四十一歳ばかりの男のさかりに死に赴くといふは容易なこととも思はれない。ベギイの友人も言つて居るやうに、彼は大きな佛蘭西の文學者でなかつたかも知れない。むしろ未完成のまゝで斯の世を去つたところに深い暗示を残したやうな人であるかも知れない。しかし新時代の佛蘭西人の氣持をある點まで自己の身に實現し得た人は彼のやうな氣がする。その意味から言つて、彼は佛蘭西の新しい詩人の一人である。

私はまだこの旅に來た初めの頃、國から届いた『三田文學』の中に、廣瀬哲士君の譯でフロオベエムがサン夫人に宛てた手紙の出て居たことを記憶する。その中には、曾てこの都會が普魯西の軍勢によつて圍まれた當時のことが書いてあつたことを記憶する。何といふ崩壊だらう、何といふ失敗だらう、何といふ慘目だらう、何といふ忌はしいことだらう、進歩といふことが信じられやうか、科學が何の役に立つのだらう、學者を溢れるほど有する斯の國民は野蠻のフンにも劣らぬ忌はしい目に逢つた、この大きい地獄のやうな淵を見て眼は眩むばかりだ、としてあつたことを記憶する。こんな打撃を受けて再び起つことの出来る筈はない、とまで書いてあつたことを記憶する。實際、戦敗の記憶は持ちたくないものだ。普佛戦争の打撃——佛蘭西人が受けたあゝいふ大きな打撃に結びつけて見ることにしには、何事をもこの國にあるものが考へられないやうな氣もする。『羅甸民族は苦痛に泣くのです、佛蘭西は西班牙や伊太利の跡を追はねばならないのです、そして俗惡跳梁の日が始まるのです、』とフロオベエルは書き残したと言ふ。どうして私がこんなことを思出したかといふに、新刊の『メルキユウル』一冊買つて來るついでに試みにあの羅甸區の一角に立つて、往つたり來つたりする町の人々の姿